

尖閣研究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－ 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 －

2017 年

尖閣諸島文献資料編纂会

発刊のあいさつ

本調査報告は、日本財団の2017年度研究助成交付によるものです。

「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告」の第4回目に当り、「沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 2017年」です。

日本財団は早くから尖閣諸島海域の漁業調査の重要性を認識され、当編纂会は、第1回は2009年度、第2回は2012年度、第3回は2014年度、今回は2017年度と、4回に亘って研究助成を頂きました。

私共編纂会は、「尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告事業」は、今回を以て、所期の目的を概ね達成したものと判断し終了することになりました。

日本財団様には、この間、2009年度から2017年度の長きに亘り、しかも4回に亘る特段のご配慮で研究助成を頂きました。笹川陽平会長様はじめ、関係者皆様に対して、心より感謝を申し上げます。またこの間、海洋グループの杉浦清治様、橋本朋幸様、長谷部真央様には大変お世話になりました。有難うございました。

尖閣諸島海域は魚族が豊富な好漁場として、明治期古賀氏の開拓時代から、国内有数の漁場として開発利用されてきました。戦時中、操業は一時途絶えたものの、終戦後いち早く、沖縄各地から漁船が出漁、県外船、台湾船も入り混じって操業し、賑わって来ました。

国内有数の好漁場にもかかわらず、同海域の漁業に関する資料は殆どなく、その全容は不明のままでした。そんな中、日本財団様から研究助成を得て、沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査を実施し、尖閣諸島海域の漁業の一端が明らかになりました。

東シナ海の黒潮回廊に位置する尖閣諸島海域は、名にし負う国内有数の好漁場です。

周知のように、明治期から開発利用された沖縄の伝統的漁場でもあります。

島の周りでカツオが獲れるので、魚釣島ではカツオ節を製造するなど、海域は多くの漁船で賑わっていました。戦後は、日本各地からカツオ船やマグロ船、突ん棒、深海一本釣船等々が行き来し、また島の傍らでは、電灯潜りも見られ、様々な漁業が営まれていました。

ちなみに、沖縄県において、尖閣諸島海域で営まれていた漁業は以下の通りです。

カツオ漁・カツオ節製造	マグロ延縄	カジキ突棒	カジキ曳縄
ダツ・トビウオ追込み	グルクン追込み	深海一本釣	底立延縄 底延縄
サバ跳釣・棒受け	曳き縄	電灯潜り	サンゴ網漁

この中には、今日ではカジキ突棒やダツ・トビウオ追込みなど消滅した漁業・漁法も少なくありません。加えて、同海域で漁業が盛んに営まれていたのは1960～90年代です。

往時漁に携わった方々は、殆どお亡くなり、存命の方でも高齢です。

謂わば、猶予ない状況の中で、漁業関係者を探し出し、滑り込みセーフで聞き取り調査を

実施できたのは、日本財団様のご理解と時宜を得たご判断のお蔭でもあります。

これまでの 4 回に亘る調査報告は、私共の力量不足もあり、決して満足のいく内容ではありませんが、わが国の尖閣諸島海域の漁業の開発利用の実態を明らかにし、こと国際的問題が生じた場合、日本の尖閣諸島に対する実効支配を証左する重要な資料になるものと確信しております。これも日本財団様のご助力の賜物と厚く感謝致します。

なお、本調査報告について、最終の報告となるため、編集部から、この機会に、新たな事業内容を加えたい旨の提案があり、協議の結果、下記の編集内容にしました。

○本調査報告の基本テーマである尖閣諸島海域における漁業については、I 章に、漁業者関係者への聞き取り 4 編と寄稿稿 1 編を掲載しました。また、II 章に、写真・図版に見る漁法・漁業としてカツオ漁、深海一本釣り、マグロ延縄など 5 つを紹介しています。

○III 章には、“尖閣諸島の学術調査関連”として、講演「尖閣諸島の学術調査と自然」と、高良鉄夫先生の初期調査に同行した上運天賢盛氏と私の学術調査体験記と対談、この 2 つを掲載しました。前者は私が 2016 年石垣市尖閣の日に行った記念講演で、内容も十分でないため、掲載に不本意でしたが、編集部の強い要望もあって承知し、汗顔の至りです。

○IV 章には、“尖閣諸島古賀村の昔と今”と題して、私の「久場島古賀村跡の遺構、生活跡調査を」と編集部の「魚釣島・南小島古賀村盛衰考」を掲載しました。

前者は、久場島を調査した際に、屋敷跡に転がっていた壺屋焼き甕を担いできたことから発した思いを綴ったものです。後者は、編集部が、これに触発されて、魚釣島・南小島の古賀村についてとりまとめました。この中で、大正元年 8 月の台風で尖閣諸島の古賀村が壊滅し、この台風被災が原因で、古賀氏は尖閣諸島の開拓事業から撤退したのではないかと推論しており、興味深い指摘も幾つか為されています。

これらを機に、今後は、専門家諸賢による尖閣諸島古賀村に対する活発な議論が高まることを期待します。併せて、地元石垣市、沖縄県、国による尖閣諸島古賀村跡の遺跡（遺構・遺物）調査が速やかに為されることを念願致しております。

なお、本調査報告は、以下の 2 人が担当しました。

本編纂会 研究員 國吉 まこも

本編纂会 事務局長 國吉 真古

本調査報告の聞き取りに際して、快くインタビューに応じて下さった関係者の方々。また貴重な寄稿を賜った友利昭之助氏、上運天賢盛氏をはじめ、多くの方々に大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

2018 年(平成 30 年) 9 月 30 日

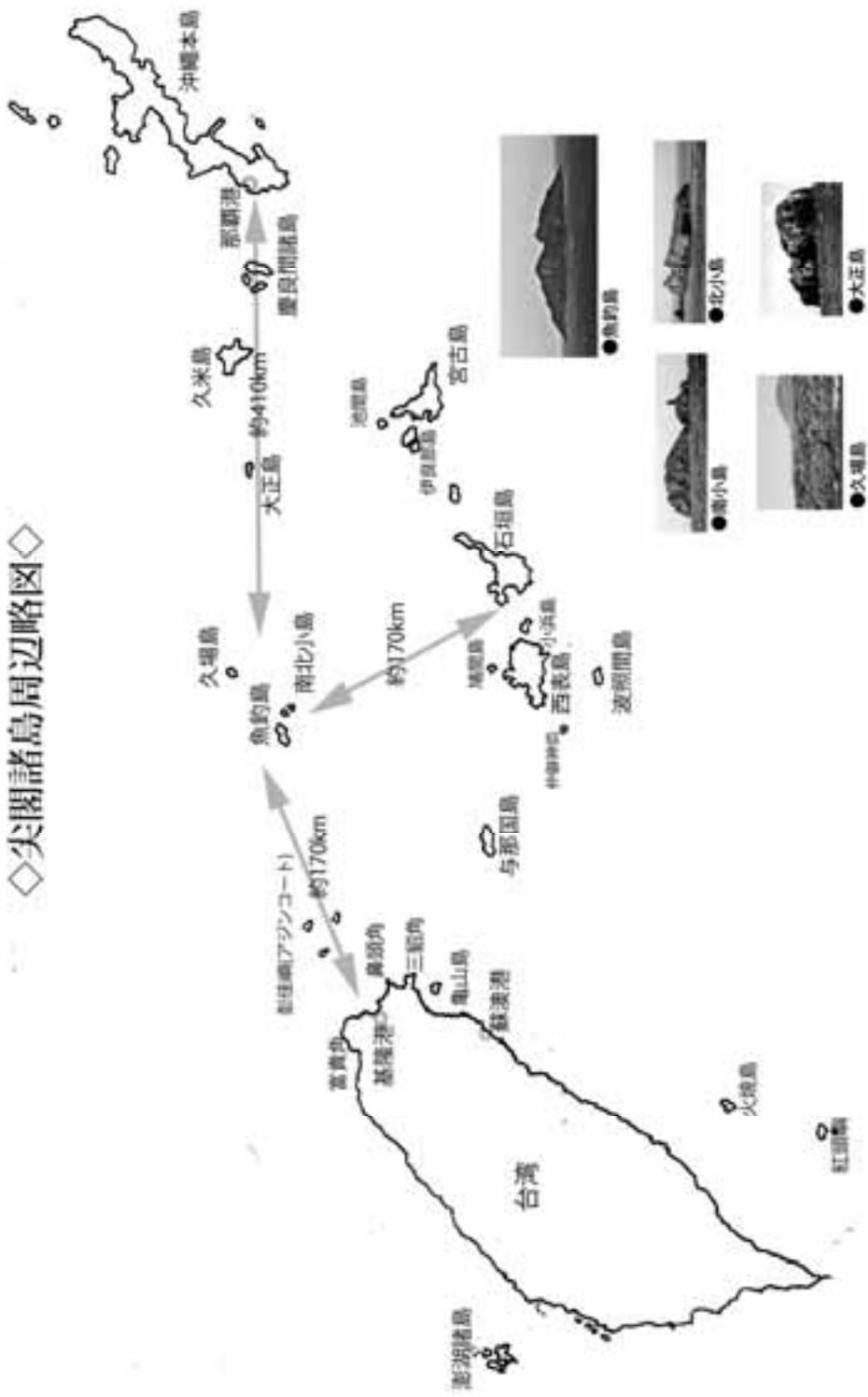
尖閣諸島文献資料編纂会

会長 新納 義馬

目 次

発刊のあいさつ.....	1
尖閣諸島とは.....	6
章 尖閣諸島海域における漁業	
1、聞き取り編.....	7
西銘 成吉 西里 健男	
奥田良正光 松田 昌雄	
2、寄稿：1972年日本復帰 闇めぐる沖縄県の動き	106
章 写真・図版に見る漁法・漁業	
1、日本各地から.....	149
2、カツオ漁及びカツオ節製造.....	161
3、深海一本釣.....	187
4、底延縄.....	215
5、曳き縄.....	225
6、マグロ延縄.....	235
章 尖閣諸島の学術調査と体験記	
1、講演：尖閣諸島の学術調査と自然.....	253
2、学術調査体験記及び対談.....	288
章 尖閣諸島古賀村の昔と今	
1、久場島古賀村跡の遺構、生活跡調査を.....	349
2、魚釣島・南小島古賀村盛衰考.....	370
あとがき	

◇尖閣諸島周辺略図◇



尖閣諸島とは

・絶海の無人島

沖縄県の八重山諸島の北北西凡そ 90 カイリ(約 170 km)に位置する無人島群を総称して、いわゆる「尖閣諸島」と呼んでいる。島嶼群の構成は、「魚釣島」「北小島」「南小島」「久場島」「大正島」の 5 島嶼と「沖の北岩」「沖の南岩」「飛瀬」の 3 岩礁である。

地理的には東シナ海南部に位置し、各島嶼が東シナ海大陸ダナの縁辺に沿うような恰好で連なっているため大陸沿岸流と黒潮の混合によって生じる潮目を形成、その影響を多く受け様々な魚族が附近を回遊、棲息していると言われている。

・1895 年に領土編入

歴史的には古くから中国南部福州～琉球那覇途上の航路標識として知られていたが、絶海の孤島とも言うべき場所に位置するために中国、琉球どちらにも属する事はなかった。

このように長い間無主地であったが、1895(明治 28)年に日本に領土編入され沖縄県の所属となり、翌 1896(明治 29)年には行政区分上八重山郡の所轄となった。

・本来の自然が残された島

過去、同諸島を明治政府より借受けた古賀辰四郎等により開拓がなされた。が、学術的には、依然人の手が殆んど入っていない。生きたままの自然の姿が其処に残る島々である。

島で歩き回り調査するたびに本来の自然を実感でき、生物・植物学者にとっては希少種や固有種が数多く棲息する学術上貴重な島嶼群である。

・現在の概要

現在は沖縄県石垣市宇登野城に属しており、魚釣島・北小島・南小島の 3 島は無人島、久場島・大正島の 2 島は在日米軍の軍用地として射爆撃演習場に指定されている。

尖閣諸島は歴史的に長くアホウドリやアジサシ類といった海鳥の繁殖地であったが、明治期の開拓により、アホウドリは絶滅したとされていた。が、1988 年 4 月、朝日新聞社は上空から南小島の断崖で繁殖しているアホウドリ及びヒナを再確認した。2002 年には北小島での繁殖も確認されており今後さらなる棲息数の増加に期待が寄せられている。

参考：◇尖閣諸島地番・地目・面積表◇

島名	地番	地目	面積	備考
南小島	石垣市宇登野城 2390 番地	原野	0.40km ²	国有地
北小島	同 2391 番地	原野	0.31km ²	国有地
魚釣島	同 2392 番地	原野	3.82km ²	国有地
久場島	同 2393 番地	原野	0.91km ²	私有地
大正島	同 2394 番地	原野	0.06km ²	国有地

沖の北岩・沖の南岩・飛瀬は岩礁のため地番等は付されていない。

I 章 尖閣諸島海域における漁業

1、聞き取り編

西銘 成吉 (前・後編)	与那国漁協
西里 健男	西里建築研究所
奥田良 正光	元与那城村長
松田 昌雄	尖閣諸島防衛協会

2、寄稿

1972年日本復帰後の尖閣諸島をめぐる沖縄県の動き 友利昭之助

西銘 成吉 にしめ せいきち (与那国漁協)

1941年(昭和16年)八重山与那国島に生まれる。77歳(2018年時)。祖父の代に沖縄本島久高島から与那国に寄留した3代続く海人である。1951年水産高校中退し、与那国運搬船・巴丸の炊事係から船長を勤める。のち1960年19歳には突き船、23歳にはサンゴ漁に従事、尖閣諸島でも操業する。1966年26歳で、与那国譜久山海運の冷凍工場長として、カジキの島外流通・販売に勤め、傍ら自ら突き船を持ち、突き手としてカジキ突きに励む。次いで、一本釣船を新造して、突ん棒、深海一本釣り、底延縄等を行う。のち沖縄県漁連の市場担当を経、県近海鮪船組合に入り、県マグロ船の海外操業の道を切り開くなどした。氏の海人の歩みは興味深く、沖縄の漁業の歴史を考える上で資するものが多いことから、聞き取りを「ある海人の半生」として、2つに分けて、紹介することにした。本稿は、前編で、27歳頃の突き船長栄丸でカジキ突きした件までとした。



— ある海人の半生 前編 —

与那国 寄留民の島 祖父たち 久高から 南方で遭難し 住み付く

与那国という島は多民族からできている。与那国だけの人でない。あっちこちから来た寄留民で成り立っている。宮崎、阿久根、枕崎、高知、徳之島、与論、伊平屋、伊是名、久米島、渡名喜、浜比嘉、久高、こういう所から来て、与那国を栄えさせている。

元々農村で、稲、芋、キビ作りなどしていた。漁業といっても、網で浅瀬の魚獲って食べて、潮の干満見て、漁する程度だったんじゃないか。そこへ寄留民が漁業を持ち込んだ。

久高系、糸満系、宮崎系、鹿児島系の人たちが来て、与那国の漁業は発展している。

ウチらは、久高島から来た久高系の海人だ。久高島では食べられない。皆島から出て与那国にも来たわけ。久高系は、糸数、安里、田島、西銘、で皆漁師とか、船乗りだよ。

いつ頃与那国来たのかわらん。台湾帰りも多かった。戦前台湾で稼いでいたんだけど、戦争終わって台湾から引き揚げて来て、与那国に住む人もおれば、また久高に帰る人も、八重山で生活しておる。カツオ船大福丸の福治グラー(福治正雄)、安福丸の内間安助、多勝丸の内間多千とかは八重山で活躍している久高系。

ウチらは、ジーちゃんの時代に、久高から与那国に来たらしい。西銘順治知事のお父さん



山紫水明の与那国島、昭和12,3年頃の祖納集落の光景、手前に広がる豊かな水田。マラリアのない無病地・豊かな島である。〈与那国案内写真帖より〉

の順石さんなんかと一緒にだったと。あの時久高からマレー半島に行く途中に船が遭難して、与那国に来たと、そんな話をしていた。ジーちゃんがここで結婚して親父（西銘成コウ）が生まれたのは大正 4 年だから与那国来たのは明治の終わり頃になるかな。この遭難の話はほんとかどうかちゃんと調べないといかんけど（笑）。

順石さんは与那国の慶田からの奥さんもらって、ウチのジーちゃんは八重山の宮良からもらった。皆違う所から嫁もらっている。ウチの親父もまた宮古の平良から嫁もらった。

これがウチの母。だから僕の身体には久高の血、八重山の血、宮古の血が入っている。与那国の島みたいに色とりどり、雑種強勢というから、それで元気あるかも分らん（笑）。

母方のジーちゃん カツオ節指導に来る 発田カツオ工場長する

母のお父さんは平良玄ぼうと云って、宮古から抜擢されて与那国にカツオ製造を教えにきた。長濱一男さんのお父さんの静一郎さんが与那国で久部良に最初にカツオ工場を造った。その時にウチのジーちゃんも一緒にやったはず。長濱のオジーとジーちゃんは兄弟みたいにやっついて、一男さんはジーちゃんを尊敬しておったよ。

仲嵩清さんの祖納のカツオ工場はその後からかな。これもジーちゃんが手伝ったかもしれん。僕が小さい頃、馬に乗って、仲嵩さんの所に行き、酒汲み交わしていたのを憶えている。仲嵩さんはジーさんをヒララ、ヒララと言いよった。宮古から与那国来て、こっちで住みつつ、皆にカツオ節の作り方も教え、工場の指導もやっていたから、ヒララのジーちゃん知らない人はいない。与那国のカツオ工場はジーちゃんが皆育てたから。

（写真を指して）これが戦前、東洋一の設備と言われた発田さんのカツオ工場だよ。これ長濱さんが最初に造ったカツオ工場で、発田喜平さんと重春たちが長濱さんから譲ってもらった。で、発田さんたちが頑張って、東洋一と言われる位の大きなカツオ工場にした。製氷施設も発電機、冷蔵庫も設備してあった。ジーちゃんはここの工場長やっておった。もうこんな大きな煙突があって、あの時皆電気ないさ、もう夜は真っ暗よ。だけどここだけは煌煌と電気が点灯してすごかった。

戦争の時は大きな煙突あるから、軍需工場に間違われて狙われたわけ。米軍の爆撃に遭って、工場は全部壊されたよ。戦後発田さんたちは与那国から八重山に引っ越して、石垣の大川でカツオ船やっていた。カツオ船は日向丸、サンゴ船も日向丸とおった。憶えておるよ。そうです。弟の重春さんは、終戦後の一時、尖閣列島の古賀さんの工場跡でカツオ節製造しておった。その話聞いたことある。発田さんたちが与那国引き揚げたのはジーさんが亡くな



東洋一と言われた発田カツオ節工場、従業員 150 名を擁し、最盛期の昭和 10 年には年生産額 20 万円に達した。日本一漁獲高をあげ、キング賞を受賞した。（「発田俊彦提供」）

ったあとからよ。ジーちゃんは早く亡くなった、僕が 8 歳の時に。だから色々な話を聞いておけばよかった。ウチの親父？ 元々漁師だから漁も上手だったが、エンジニア専門というか、機械が得意で、西銘成コウと言えば、機関長では有名だった。与那国で当時焼玉だったけど、久保田の 4 気筒のジーゼル機関を最初に扱ったのはウチの親父だった。

宮古水産高校に入る 途中で退学 楽しかった水高時代

海の仕事に興味があったから宮古水産高校に行くことにした。八重山には水産高校はない、宮古にしかない。受験したら与那国で僕がトップだった。皆驚いていた。祖納、久部良部落があって 38 名中僕が一番だった。だが、学校は宮古にあるから金掛かる。とうとう下宿賃払えなくなった。2 か月分滞納して恥ずかしいから、1 年途中で退学することにした。

そしたら、先生が、西銘君、学校は絶対辞めてはならん。君は学校成績優秀でトップだから、PTA 会で、寮に入れて、学校の模範生として育てようと、校長、担任の先生も揃って話し合っているからと言われた。けどもう恥ずかしいさ。それを振り切って、もう布団とか、机、本を下宿先に置いたまま、南洲丸に乗って、宮古を離れた。

石垣に母の従妹がいた。何で帰って来たかと叱られた。自分が何とかして金送るから戻りなさい言うから、いやあそこは学校じゃない。朝から晩まで勉強どころじゃない、喧嘩する学校だ。あんな学校では頭も磨かれんから辞めた。社会に出てから勝負だと強がり言っただけ(笑)。けど、学校は楽しかった。後ろ髪引かれる思いで中退したから内心悔しかった。

1 年足らずだったが、宮古の水高時代は、いろんな思い出がある。

下宿では警察官の波照間さんという先輩と一緒にいた。放課後は、あの宮古警察学校で、空手、柔道とか習って、急所もどこにある、こっちには絶対手掛けたらいかんと、そういう訓練も一緒に習った。今この人は習字の先生よ、首里に住んでいる。

砂川恵典さんという宮古の教育長さんの家に下宿していた。奥さんのオバーは宮古の池間の人で、僕をうんと可愛がってくれた。ある時、大きな台風が来て、台風が通り過ぎたら、栈橋に魚がいっぱい浮いていた。オバー、オバー早く早く、タライとハエ除け蚊帳があるさ、あれを持って、オバーを栈橋に連れて行った。僕が、ボコンと海に下りて、この蚊帳で、魚を一生懸命掬っていたら、オバーが危ない、セイキチ、危ないよと驚いているわけ。オバー、何も危なくないよ(笑)。で、バケツのいっぱい魚獲ったら、セイキチ、もういい、もういい、こんなにいっぱい持てない(笑)。何で、オバー、隣近所にも上げたらいいよ、もっと獲るからと言ったら、危ないから、もういい、もういい(笑)。で、僕は、家に持っていったら、裸でパンツ 1 枚なって、魚の鱗剥いで、これを料理したわけよ(笑)。

波照間さんがこれ見て、成吉は与那国生まれだから海専門だ。今日は美味しいご馳走が食べられると喜んでた。オバーは、こんなにいっぱい料理して、もう食べるだけの分がいい、これだけでいいと(笑)。ほんと、あの水高時代は思い出深かった。

僕は下宿部屋に机とか本を置いたまま飛び出した。もうそれきり行かないから、大変迷惑かけた。そのあと安里虎寿さんのサンゴ船に乗ってうんと儲けた。砂川のオバーに大変世話

なったお礼に、お金 300 ドルを持って訪ねて行ったら、あの家は姿形なくなっていた。オバーにも会えなかった。

飯炊きで 与那国航路貨物船・巴丸に乗る 見込まれて 船長免許取る

水高を中退したあと与那国町役場の水産課に入ろうとした。しかし、給料は僅かだし、役場は大変な所だから、自分の未来築くためにどうすればいいか真剣に考えた。

与那国航路船の巴丸といって潜水艦みたいな船が久部良港におった。あの船に乗りたい。

よし直接お願いに行こうと決心した。丁度八月十五夜の夜だった。行って、親方の前盛富夫さんに「おじさん、僕を、飯炊きでも何でもするから、使ってください」とお願いした。

「今時の若い人で珍しい、こんなして来るのはいない。いいよ、あんた飯炊きできるか？」

「できます。何でもやります」。それで飯炊きで使ってくれた。

伝馬舟で船に渡って、後ろで魚も釣り真似してよ、それから自分の将来設計が始まったわけだ(笑)。沖縄に着いたら、船員たちが、お前初めてだから、裸なって、丸パイなって、波の上(神社)の神様に宜しくお願ひしますとお辞儀しないといかんよと、騙されて、お辞儀した。

あんな滑稽な思い出もある(笑)。

(写真を指して)この巴丸は、元々西表の白浜炭鉱の石炭を運んでいた船。この石炭の需要なくなって、白浜に係留されていたのを、前盛富夫さんが与那国航路の貨物船として、許可取って、これで重油とか、お米、砂糖を運んでいた。この時船は6名位でやっていた。主に祖納の港に着けていた。この写真は久部良港に停泊した時のもの。憧れのこの巴丸に乗れて、僕は飯炊きの仕事をした。もう一生懸命やったもんだから、1航海したら、富夫さんに呼ばれた。



与那国航路貨物船・巴丸。元々西表白浜の石炭運搬船。この船からが社会人の第一歩、飯炊き、甲板、船長した。

「飯炊きはオジーに、別の人に頼むから、あんたは甲板に上がれ」。で、甲板に上がってやっていたら、しばらくしてまた呼ばれた。「あんたは甲板においていたら惜しい、今度八重山で船長免許の講習あるから、履歴書作るから、受けて取って来い」と言われた。それで19歳に丙長の船長代理の免許を取った。

船長代理で初航海 親方富夫さん 事故で亡くなる 巴丸解散

僕が巴丸の船長代理して、初航海の時よ。与那国から貨物いっぱい積んで、こっちの那覇泊港に着け停泊していた。そしたら、僕がいない時、沖縄水産高校の悪友たちが来て、船員に、西銘はほんとにこの船の船長代理かと聞いていた。そして、当時の水高生は野蛮人だから、飯炊きを騙してソーメンチャンプルーとか作らして食べていったらしい(笑)。僕はそ

れ聞いてあの連中が言うこと、絶対聞いたらいかんと怒った。で、あの時、巴丸は中間検査もあって、泊港に那覇造船所があったから、ドックするために船揚げていた。そしたら大きな台風が来た。親方の富夫さんは船大丈夫かと夜中2時頃見に来たら、風に飛ばされて、行方不明になった。もう皆大騒ぎして搜索した。

港いっぱい船は台風対策で船縛って係留されていた。このロープ外して、船移動し、伝馬を漕いで、底に沈んでいるはずだからと、皆でガキジャー（鉤）であっちこっちやっても掛からんわけ。翌々日の5時頃だったか、死体が揚ったら、富夫さんに間違いなかった。

あれやこれやあって結局、親方の富夫さんが亡くなったから、巴丸は解散することになった。与那国に回航して、引き揚げて解散する前に、親戚一同で白浜に回航して、オーナーに渡して解散した。オーナーは内地の人だった。

僕は、巴丸には足掛け2年おったから、辞めた時は20かな。この船石炭運搬船だったから、ヤマトンチュ（大和人、内地人の意）の船長がそのまま引き継いでいた。あの人から僕に代わった。鉄船だから、沖縄に着くのにもとにもいかん。船は真っすぐできなかつたから、こんなこんなよ。この人は地理的にあまり分らんから、八重山の平久保から島伝いしていくから遅かった。僕は与那国から、東に一応向けて、そこから久米島に直行したから速かった。

（写真を出して） この人が親方の前盛富夫さんの息子の勲さん。1994年9月北海道で全国漁港大会があった。この時勲さんは与那国町役場の代表で、僕は県近海鮪船組合の代表で行ったら、十勝の会場で偶然出会った。2人共びっくりした。30年ぶりだからもう感激して、抱きあって喜んだ（笑）。僕の青春・人生は、この巴丸からスタートした。この勲さんも1年前に亡くなった。僕にとって、これは恩人と撮った大切な記念写真だ。



全国漁港大会で前盛勲さん（右）と30年ぶり再会。
（北海道・十勝会場にて1994年9月）

突き船徳栄丸に乗る 4,5隻船団組んで 尖閣列島へ カジキ突きに

巴丸回航して、前盛勲さんの突ん棒の船あったから、盛亮丸という船あったから、これの船長をしばらくやっていたら、徳栄丸の船主の奥さんが僕を頼みに来たよ。

このオバーはウチの親父と従姉関係になるから、成ちゃん、あんた腕があるから、自分の旦那を儲けさせてくれとお願いに来た。それで米元実さんの突き船徳栄丸船に乗って、一番ジョー（儲け頭の意）したわけさ。その時に、尖閣列島にも突ん棒で行った。

尖閣に行ったのはミーニシ冬10月頃、丁度北風が荒れて時化している時だ。波のある時しかカジキは浮かんから、それ狙って、与那国から皆で行った。尖閣まで約5,6時間位掛かる。突き船4,5隻船団で行ったわけ、この徳栄丸と仲嵩博さんの宝来丸、松川さんの播生

丸、あと何丸だったかな。4、5隻で一緒に行った。

あの時 19 (1960 年時) で僕が一番若かった、当時の先輩方は皆亡くなっている。

台湾船? 所々に見えていた。そんなにまとまっては見えなかった。台湾の突き船は大きい。15,6 ト位はある。僕らの倍位はある。突き台も長い、3 倍位ある。僕らは銛投げんと当たらんけど、あそこは長いから、上からカジキをこう突き刺すわけよ (笑)。全然違っておった。台湾船は 7、8 名位、乗っておったんじゃないか。僕なんか 5 名位だから。

僕らの船は小さいから、カジキ突いて、もう 5,6 本獲れたら、連絡取り合って、与那国に帰るわけ。あの時徳栄丸は 4,5 本位。他の船は 5,6 本は獲ったと思う。松川さんの播生丸はそれ以上獲ったんじゃないか。播生丸は台湾帰りの優秀な先輩たちが乗っていた。僕なんかより 10 歳位上の先輩だった。

突き船は、尖閣列島行くなら、普通は 1 航海 1 週間位。それに島は見ているけど、島に上がることはない、漁するだけ。夜はそのまま流しているけど。

あの時は、僕らは 1 日しかいなかったが、クバシマ (魚釣島) に船着けて水採って、そのまま帰った。クバシマの南側にアンカー打って、停泊している船もいた。どこの船だったか分らん。だけど台湾船、八重山や宮古の船、沖縄の船 (垣花のマチ船) がおったと思う。

魚釣島 大きなヘビ 豚小屋跡に 赤いサトウキビ 芋のかずらも

その時にクバシマに上がった。カジキ獲ってから帰りは水がない。飲み水やご飯炊く水ないから、後ろにアンカー打って、突き船は伝馬ないから、南側の断崖絶壁の下りる所、平たい所にあっただと思う。横付けできたけど、どこに着けたのか、よく憶えてない、19 の時だから (笑)。アンカー入れて、そこに着けて、艫綱持って、ポンと下りて、縄を岸の岩にくくって、これからバケツを持って水汲みに行ったわけ。

水ある所は、先輩方は行ったり来たりしているから分かっている。水どこにあるかと聞いたら、山の方にあると。水は下にあるはずなのに、何で上に登っていくのか不思議だったが、山から流れていると言うから、なるほど、これずっと上がって行った。船着けた所から、水汲む所まで、20 分か 30 分位歩いたかも分らん。もう 60 年前のことだから忘れてる。水汲みに行く途中でフール (豚飼育の石積み) の跡もあるし、こんな大きなヘビが巻いておった。ハトもいっぱいいた。あそこはハトの樂園さ。小さな卵なんかもあった。19 才の子供だから、もう卵採るのも怖かったわけ (笑)。

(シュウダの写真見せる)。そうそう、これ見た。これシュウダと言うわけね。いっぱいいた。これは歩きつつ、こんなして巻いておった。それにでかかった。2 メーター位はあって。あっち見ても、こっち見ても、これがいっぱ



尖閣諸島に生息するシュウダ (臭蛇)。無毒で臭い蛇である。2 メーター超す大物もいる。(高良鉄夫 1952)

い(笑)。最初の方はこれ見たらすぐ逃げる(笑)。僕も驚いて逃げたら、先輩がこれハブじゃない、毒ない、どうもせんよ。通っても、どうもせんよと言うけど、怖かった(笑)。気持ち悪いから、横目で見て、足早でそこから離れた。

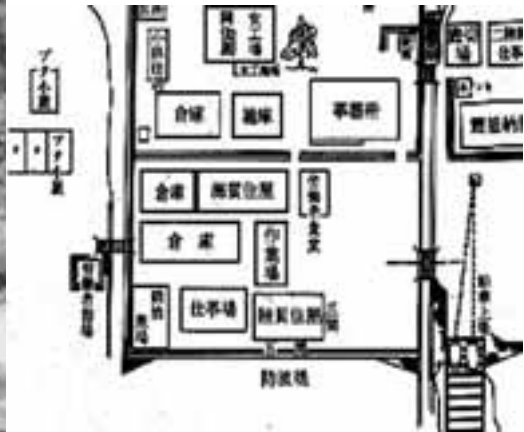
(古賀村工場跡の石積み写真見せる) こういうものは皆あった。この時もあった。

(工場配置図の豚小屋を指して) こっちに確かに豚小屋が 2 ヶ所あるね。あそこに石垣があって、その傍から上って行ったわけか。豚小屋といっても、崩れて何もなかった。石がバラバラになって、昔はフルだったと先輩たちが言ったから分かったわけ。豚にエサ入れて上げるもの、こんな長い石を彫ったもの、あれもあった。

で、フルの後ろ側に、裏側にサトウキビが生えていた。これ位あった。上等な赤いサトウキビだった、与那国では青いサトウキビ、あっちのは赤い種類で丸かった。その傍には芋のかずらもあった。これ普通のカンダバーだが、葉っぱはでかかった。与那国のより大きかった。一緒に行った先輩は西泊という、もう亡くなったけど。

バケツに水汲んで船に戻る途中に、西泊先輩に、ちょっと水持っていて、僕があのだサトウキビを取ってくる、脇に差してゆくからと言ったら、怒った。仕方ないから、汲んできた水を 2 人で担いで、船まで運んで行って渡した。それでもあのサトウキビ気になった。

それで、駆け足で取って来るから待っておけよと言ったら、船長機関長の親分たちは船の上にいるさ。「お前、また何をしにゆく? 何、サトウキビ?! あんなの取らんでもいい。すぐ船に乗れ」と怒られた(笑)。上司からあんな言われたらどうもならん。艦綱外して、船に乗って、2 日目には与那国に帰ってきた。あんなこともあったよ。



右：旧古賀村の工場配置図（明治 41 年頃）左端にブタ小屋 4 つがある。ブタ小屋と石積みの間は山からの小さな流れ。左は古賀村跡写真（新島義龍 1991）、○印はブタ小屋附近 点線は水汲み場への推定経路を示す。

カジキ見る 金星上げたが 約束違うと 怒って 船下りる

米元さんの徳栄丸には 1 年位は乗っていたかな。前盛さんの家で毎月の計算勘定して配当がある。そうしたらある時、そうはいかん、約束が違うと、僕が怒ったわけよ。

話はこうだ。カジキはエサ見る人、大海原から小さいへりをカジキが泳ぐのを見る人、そ

して突き手はこの船のオーナー米元実さんと取り舵している従弟の後間貞男さん 2 人が鉾で突いているわけさ。たまたま、この取り舵が、自分よりカジキ多く見て、これが獲れたなら、最初に見た人に、花金を上げると約束した。取り舵といたらベテランだから、自分以上に、カジキを最初見たなら、相撲で言えば、平幕が横綱倒したら、金星上げるということ言い出してしまった (笑)。その 1 か月後に、メクラゾネで漁した時だった。最初に見たのは僕は 12,3 本、あっちは 11 本で僕が多いわけ。したら、取り舵の貞男さんは、これは自分が見たものと言いだしたから話が崩れた。オーナーの米元さんも、違うよ、あれ成ちゃんが見たカジキだ。あんたの口から言ったじゃないか、自分を追い抜くなら花金上げると口に出したんだから、花金上げんといかん。いやあのカジキは自分が見たと意地っ張りするわけよ。まさか平船員が自分を負かすと思ってなかったんだろう。

僕は、何も兄さんがこんなこと言わなければもらわんよ、だけど自分で口出しておいて、先輩らしくもないと怒った。もう、こんな船に乗っていたら自分の人生真っ暗だと思った。

翌日、徳栄丸のオバーに、親父と従姉になるから、あんたのオジさんのこととして上げたいけど、あんな人間だと面白くないから、僕はもう辞める。そう言って、すぐ船下りた。

これが幸いした。2,3 日位したら、慶田清稀さんの知り合いから、「成ちゃん、あんた何か宮古のサンゴ船に乗ってくれないか」という話が飛び込んできた。

いいけど、金がないからどうもならないと言ったら、前渡し金、運賃とか支度金、慶田さんが送ってくれた。300ドルを送ってくれたわけ。

サンゴブーム作った福太郎丸 譜久山さん持ち船 与那国航路船だった

1960 年森田真弘さんが宝山ソネで、サンゴ見つけた、福太郎丸で。これから戦後のサンゴブームが起こった。この福太郎丸は与那国海運の八重山航路船・鹿港丸だった。譜久山トシさんの船だった。このトシさんも僕の恩人で、大変世話になった。

で、森田さんがこの鹿港丸を買った。買って、船名を福太郎丸に変えてサンゴ船にした。

最初サンゴ発見した福太郎丸の船長は高知の人、あの痩せた中平謙太郎さんだった。機関長は長嶺隆博さん。あとから慶田さんが福太郎丸を持っていた。台風になると宮古の池間に避難するわけ。で、福太郎丸がサンゴ発見してから、サンゴ船許可もらって皆出るようになった。その頃には宮古はサンゴブームで活気づいてきた。宝山ソネには、サンゴ船が 100 隻ほども来ていたらしい。宮古のカツオ船はカツオ獲らんで、サンゴ船に切切り替えておったと言う話もある (笑)。とにかく、もう宝山にはサンゴ船が 100 隻も集まっているから昼間みたいに明るかったらしい。

宮古グループでは、森田さんのグループ何名かおったけど、その中で仲間勇栄さんの伸光丸が一番儲かっていたはず。あとから与那国グループが入ってきた。安里虎寿の共進丸。前西原豊の住吉丸なんかもやるようになった。慶田さんも独立して宝興丸を持ってやっていた。この与那国グループには誰も勝てなかった。半分も採りきれんかった (笑)。

で、僕が共進丸乗ったのは、サンゴブームが始まって 1,2 年あと、もうサンゴ景気に大沸

きしていた。サンゴ船は大体3月半ば頃から10月半ばまで、大体10月までで切り上げていた。操業は7,8カ月間位。その時は宮古はサンゴ景気で大賑わいしていた。

サンゴ船共進丸に乗る 半年で2千ドル余儲かる 5百ドルで家造る

慶田さんは、僕を見込んで300ドルを送ってくれた。それで宮古に渡ったら、安里虎寿が僕を連れに来ているわけ。どこから聞いたか分からんけど、何であんたは他所(よそ)の船に行くか、いかさん、あんたのお父さんと自分は兄弟分だったから、兄さんと一緒に働け！ お金300ドル？ これは自分が今すぐ返すからと強引だった。困って、慶田さんに電話入れたら、これあんたが決めることだ。あんたを連れて来て後継者にする積りだったが、もう仕方ないと、最後は、慶田さんが折れたもんだから、謝って、安里虎寿の共進丸に乗った。

サンゴ船というの初めて、虎寿が目井津のカツオ船を買ったわけ。これが共進丸、何号だったか分からん。僕は、一番ジョーで、虎寿、僕、津波古ミノルなんか7名位乗っていた。もう皆亡くなっている。とにかく、サンゴ船は儲かった。ものすごかったよ(笑)。

あんまり儲かるもんだから、サンゴの親方連中、何名か集まったら、どこでも、オイチョカブ(賭博)、百ドル、千ドルも掛けてよ、もうオイチョカブ。あの与那国の親方連中、安里虎寿、前西原豊、慶田清稀、岡村豊三郎、宮里栄光なんかはもう怖い位だった(笑)。

だけど宮古の森田真弘さんは紳士で、あんな賭博なんか絶対やらなかった。仲間勇栄さんもじっと観ているだけ。与那国グループは皆セイバン(野蛮人)の集まりだった(笑)。

とにかく、サンゴはものすごく採れたよ。漁場に着くと、魚探見て判断する。で、この辺りがポイントと決めたら、すぐアンカーとブイを打つ。打ったら、元から何か所かに旗立てる。それで潮の流れが決まるわけ。この潮の流れ見て、サンゴ網入れる。

だけどサンゴ船も並大抵じゃないよ。もう夜昼寝ないで15日間ぶっ通し、もう一生懸命仕事やった。ある時宮古の船なんか、縄入れて眠っているわけさ。僕なんかは眠っている船の前に、すぐブイの棒立て、カーンと、網下して、少し流してよ、次は揚げるわけ。相手の網に引っ掛けてくることもある。サンゴ掛かっているよ、その網外してウッチャンナギテ(打ち捨て)、自分たちの網入れる。あんなにまでがしておった(笑)。もう分らんさ。皆眠っているから。

僕なんかは全然眠らん。もう一番ジョーで、頑張って3人前仕事したよ。



採れた枝サンゴの品々。南西諸島はサンゴの宝庫だ。宝山、西大九ソネとない。尖閣、与那国沖でも採れる。

母が胃潰瘍かな。病气罹って、もう与那国はどうもならんから、沖縄にやろうとお金送金して300ドルも前借していた。

で、6カ月位、サンゴ採って、計算したわけさ、そしたら俺1人半だから、で、給料は40ドルだった、給料40ドルより、水揚げして僕が掛けたサンゴの歩合が大きい。それで計算したら2千ドル余りあったから、差っ引きして、僕は千5百ドル余りを与那国に持って行ったわけよ。当時の千5百ドルは大きいよ。

5百ドルでお家も造り、残りは母に皆渡したら、母は涙ぐんで喜んでた。よかったね、お母さん、もう大丈夫だよ、心配せんでいい、今からが親孝行できるよと言った。

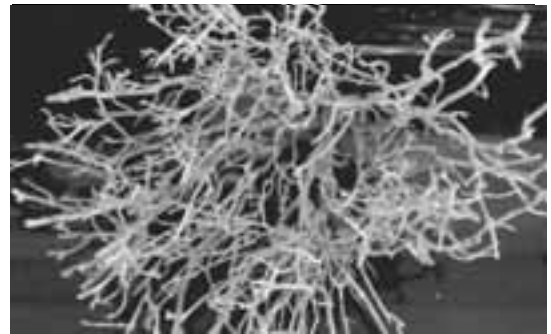
僕は、このサンゴ船に行ってからが、これからが自分の家庭は安定した（笑）。

アカオ 海サボテンがいっぱい 尖閣も いいサンゴ漁場かも？

サンゴを宝山ソネで発見したのは森田さんだけど、そのあとに、久米島の西大九ソネでもサンゴを発見したのは前西原豊さん。こっちのサンゴはちょっと違ってた。トットローと真っすぐしている。枝はいっぱいあるけど、もうこんなに細長い。サンゴとして、西大九のは若すぎる。しかし宝山は違う、宝山はこうして皆太い、両方のサンゴの質は全然違う。

それと生えている環境も違う。宝山は石ガンガラ（岩だらけ）の所に、西大九は白いサボテンとユリの花みたいなものが一緒に網に掛ってくる。

私の場合も何度もそれを経験した。だから、こんなのがあったら、ここには、サンゴはあると分かるわけよ。ウミユリが掛かると、ウミサボテンが掛ると、こっちにブイ打って、この付近を網で引くわけさ。大体水深220から230メートル位。そういう所も自分で探して、サンゴも採る。尖閣諸島もウミサボテンの多い所よ。自分は、アカオ（大正島、赤尾嶼）のあそこでやったよ。もうウミサボテン、船にいっぱい揚がる。あそこは西大九と同じよ。



ウミサボテン、ウミユリ、針金状の硬い草（上掲写真、名称不詳）が引っ掛かれば、サンゴある可能性が高い。

サンゴ採るのも色んな経験がいる。白いサボテンとか、針金みたいな硬い草、海松とか、こんな海草が引っ掛かって揚がって来るさ。それ見ながらどんなサンゴがあるか、サンゴの質も判断もする。

ハーッサミヨー（感嘆詞、ああの意）、アカオとか、海草が多い所で網入れたら、もうこれとの闘いだよ（笑）。手袋履いて、これ絡まっているから1つ1つ砕いて外さん限りは、これ元の網に直せん。だから、木の槌、あれでダイバン（デッキ）に持って行って叩いて、大変よ、1時間位、これだけの網、叩いて直して、これ終わったら次の物に切り替える。ウミサボテンだけじゃない、もう何と言うかな、もう刺すのもいっぱいよ。痒いどころか、俺自分がやっているから分かる、ほんとの話よ。だから年寄りなんかは分っているから、もうアカオには行かない。嫌がっていたから、アカオには行かなくなった。

あそこでもう少し頑張っておれば、西大九みたいに、サンゴ採れたかも知れない。

ここに尖閣諸島でサンゴ採ったリストがある。これ見ると、1967年6月には、これ僕らがサンゴ辞めた3,4年後になるかな、宝興丸の慶田清稀さんが、頑張ってアカオで20㌔サンゴ採っている。また1970年5月から10月には、採集地尖閣列島としか書いてないが、慶田さんが91.8㌔、住吉丸の前西原豊が63.6㌔、福泉丸の大城清一が85㌔サンゴ揚げている。僕の経験から見ても、尖閣列島も、サンゴのいい漁場よ。

命拾い3回 ヤナに網掛けて 船グルグル回った 台風にも遭った

サンゴ船は3年した。その間危ない目に？ そういうことは何回かあった。命拾いしたのは3回あった。網がヤナ（サンゴ礁の海底の岩）に引っ掛かって、もう船がグルグル回り、沈没しかけた時と、あとは台風に遭った時はもう一巻の終わりかと思った（笑）。

サンゴの網、流し網というのは、潮流れ見て、船スローで引いていくから、海底が皆平らの所ならいいけど、こっちは山、こっちは谷と、起伏が激しく、地形が険しい所もある。こんな所に網入れて、もしこっちが潮の流れが速ければ、これがヤナに引っ掛かったら危ない。あれだけの網だから、船が潮の流れに巻き込まれたら、もうアンカー入れたのと一緒、ヤナからロープはピーンと引っ張ばられて、船はグルグル回って、もう沈没しかけた。こんな時が共進丸で2回もあった。1回はこっちの港川、1回は与那国のメクラゾネで。ここは潮の流れが速いわね。ヤナに網が引っ掛かって、これだけのロープだから、船はグルグル回って沈没寸前（笑）。その時は急いで艦からロープをパッパッと切って危機一髪で助かった。300メートルのロープだから、これ5本、6本位切るのが大変だった。艦のロープを切り捨てて、残りのロープは船首だけ3本。やっとかっつで巻き取って、与那国に入ったんだよ。2回とも沈没一歩手前、命拾いした（笑）。



サンゴ船の操業光景。潮の流れを見て艦から網を入れ、スローで曳いていく。ヤナに掛かると危険な場合がある。
（「沖縄県漁船保険組合記念誌」より）

あと台風に遭って、もうダメだと思った。西大九で、あの時もやがてだったよ（笑）。

サンゴ船の時期終わる頃で10月頃、あの時集団で行った、15,6隻位おった。

南大東で18メートルの台風だったけど、皆無線でどうもせん、影響ないと安心してたわけよ。沖縄近くになって35メートルになってね。もう波高くなったから仕事できんと、皆帰ることにした。あとで聞いたら、あれだけの船、台風予報聞いて散り散り帰っているから、宮古に行く船もおれば、7隻位沖縄に向かって行った。

共進丸も、夕方日が暮れる頃、泊港に向けた。僕が1人ブリッジで舵取り、残り皆は下の部屋で休んでいた。そしたら、もう山みたいな大きい波がゴーゴーさ、もう前は見えない。ナーデージ（もう大変）よ、オーオー（笑）。舵取るでしょう、これで僕、皆こっち頭あるよ、こんだけの船よ、前よ、ごっそり、もう見えない。波がゴソッと、もう沈んでいるさ、波つなぐさ、ボーボンボンボンしたら、このブリッジなんかの所が出よったから、大きな波がぶつかって来て、ものすごい衝撃、ババーンと（笑）。もうブリッジのガラス1つも残らん、皆粉々よ。僕はそれからもう無我夢中、これだけのガラス割れて、飛んで来ているから、血だらけよ、でも、自分は怪我していること分らん。

船水浸し 大波の谷間の中 命からがら 台風から逃げきる

ブリッジのガラス皆割れておって、船はもう水浸しになっている、機関場まで水入っているからエンジン故障することもあるさ。それにサンゴ船ロープ皆巻かれてあるから、船長部屋や魚槽にもロープ入っている。予備ロープなんか、だから、これだけの水がワーと入ったさ、もう船はもうこんなよ、沈み掛けている、最悪よ。波の谷間の中で、波にもまれて揺れている、木の葉みたいに。もう大変だったよ、もう一卷の終わりと思った。早く水吐かして、網流して、船が沈没でもしたらいいかん。皆の所に飛んで行ったよ。ブリッジの下で皆休んでいるから、すぐ後ろ戸を開けてね、サンゴ網下ろせ！！ このロープまま、サンゴ網早く落とせ！！ 大声で怒鳴ったわけ。そしたら 2,3 本位、艫にザーと落として、50メートル位か、行かした。それですぐゆっくり波のいく左舷に、スロースローして、また皆で、すぐアカ水出して、スロースローで少し浮いてきたわけ。スロースロー後ろに浮いて、外も大波来るけど、サンゴ網をロープにくくって、艫から流した。そしたら、船は波に浮いて、別の波も見えたから、ゆっくりゆっくり左に曲がって、やっとかっとな波の下手に行くようになった。

それでスロースローで南西の方角、台湾の北に舵向けて、進んで行った。

この台風は大東島の方から来て、沖縄、久米島の上を北西へ、中国の方に向かっていたから。それでやっとかっとな命拾いした。水もチャー（ずっと）出しよ。機関場も水いっぱいさ。この時エンジンは止まらなかった、急いで水出したお陰だ、ああ運よく命拾いした。

昔の人が命捨てるのは島のハラガー（隅っこ？）でが捨てると言ったのは、そういう意味かなと思った（笑）。港に帰って来るまで2昼夜かかった。当時 14,5 隻あれだけの船は散り散りバラバラだけど、皆無事に帰って来ていた。宮古に行った船もさ迷っていた。1週間位掛かって帰って来る船もいた。1隻も遭難してなかった。皆無事だった。

だから海人は言っているわけ。台風は舐めるもんじゃないと。トーマンカイウラランドー（さー、ここにはおれん）、ヘークヤーカイ（早く家へ帰ろう）（笑）。

海人はデージ（命懸け）よ、あの時命捨てる所だった。神様に助けてもらったかも分からん（笑）。ほんと、海人はやるもんじゃない。だからウチの子供なんかさせない。長男はマグロー船買ってやるというけど、ヌチドタカラ、命あつての人間だから、絶対させない。

サンゴ船下火 マグロ船に切り替える 見切り付け 与那国へ帰る

サンゴは、元々宝山ソネ、サンゴゾネが漁場だから、もう皆一緒に採っていたんだけど、前西原豊さんの船は見えなかった。宝山のサンゴは段々少なくなってきたから、船見えないのは分るけど、でもこれおかしい。もしか、別の場所行って、サンゴ採っているのではと思った。でも、どこの場所で採っているか分らん。知らん顔しているもんだから（笑）。

これ調べんといかんと、宝山ソネに行き真似して、あと付けていったら、久米島の西大九ソネで採っていたわけ。これが先に話した西大九のサンゴのこと。もうそこは若いけど、枝サンゴがこんなさ。こっちは宝山と違って、草とかウミユリとか、ウミサボテンがいっぱいあったけど、桃の枝サンゴがいっぱい採れた。これが金になるわけよ。これだけの船がこっちで採った、そこが最後だったね。

あの頃からサンゴが段々下火になりかけていた。それで、安里虎寿は第 15 共進丸、16 共進丸という 40 トン級のマグロ船 2 隻造ったわけ、サンゴ船しながら、マグロ船に気移りしていた。僕に「マグロ船が幾ら稼いでも、サンゴ船には勝てないようね、成ちゃん」と言いよったのに、今度は自分でマグロ船造っていた。

僕はマグロ船やるのに反対した。虎寿兄さんはサンゴで儲かって大きなホテルも買っていた。素晴らしいホテルだった。沖縄で指折りのホテルだった。慶田さんも儲けでホテルも買った。虎寿兄さんは、こんなにお金いっぱい持っていたから、誰かに唆されてマグロ船 2 隻を造ってきたと思うけど、もう造っているから仕方ない。あれだけでも最低 1 億はしているはず。僕も仕方なくマグロ船に乗った。乗って、ずーと南緯まで行った。あそこは確かに魚はこんなだった。40 日で 40 トン 50 トン大漁満船だった。魚は獲れるけど、ドル時代だから金にならん。サンゴは金になった。それに、サンゴ船は経費も掛からんし、こんな儲ける仕事はない。1 航海 15 日で、当たれば何億と儲かるからね。マグロ船は仕込みから何からバカにならない。1 カ月の経費だけでも大変、長くは続かん。だから、僕は 1 航海行っただけで、すぐ船から下りた。で、サンゴ船辞めて、マグロ船に切り替えている。サンゴ船の許可抹消だから、もうサンゴ船できない、諦めるしかない。

で、僕は、虎寿さんに見切り付けて、自分で次の人生を切り開こうと与那国へ帰ったわけ。

与那国海運の工場長に カジキ冷凍流通事業で 突ん棒 栄える

与那国に帰ったら、南方船に乗ってみようと思っていた。そしたら与那国海運の譜久山トシさんが、突ん棒船とカジキの契約をして、久部良港に冷凍流通するため冷蔵庫を造っていた。僕に、そこの工場長してくれないかと頼みにきたから、喜んで行くことにした。

僕が巴丸乗っていた頃までは、与那国には宝来 1 号、白洋 1 号、鹿港丸が有名だった。

与那国海運の鹿港丸をやっている譜久山トシさんは与那国の宋美齡と言われた人で、頭もいいし、きれいな人で、才色兼備の女傑というか、すごい人だった。

鹿港丸を辞める時に、この 25 トンの船を宮古池間の森田真弘さんにサンゴ船として売った。それが福太郎丸になり、宝山ソネでサンゴ発見し、沖縄でサンゴブームが起こった。このこ

とは前に話した通り。

僕は、サンゴ船やる前は、突き船に乗っていたので、カジキの冷凍流通事業というものに興味があった。トシさんからその事業に誘いが来たから、ほんといい仕事に就けてよかったと思った。与那国海運は、突き船がカジキ持ってくる、処理して、冷蔵庫に半凍結して保管し、これを船で送るわけ。沖縄のマルユウという仲買さんの有泉丸？という船を買って来て、これを運搬船に使って、那覇の市場に送る仕事だった。



あの頃、与那国には、突ん棒船は10何隻か、20隻はおった。船1隻で、最低カジキ2,3本獲って来る。多い船では7本から12本。だから毎日4,50本のカジキが揚がった。

譜久山トシさん、アンガー米高等弁務官が与那国来島した際に撮影。(沖縄県公文書館 1968.5)

それを僕が腹エラとか取り、S型に曲げた8分鉄筋に掛けて、マイナス10℃の冷凍庫に入れて、半凍結していた。3千斤とか5千斤とか、あの時は斤だから、今はトだが、とにかく2ト、3ト集まれば船に積み込んで、那覇の市場に送っていた。

カジキはでかい、腹取って、上等にして、鉄筋に掛けるのだが、これ大変な仕事だ。

これ僕1人で全部やっていた。あの当時は今の体力じゃない、200キから300キのカジキなんか問題なかった。皆驚いていたよ。力はすごかった。ドラム缶一本もこんなして上げよった。相撲取らしたら、どんな大きい人も僕にいつも投げられていた。成ちゃん、ゆつくりが投げるんだよと言われたよ(笑)。八重山郡で相撲取らしても負けたことなかった。

26歳で若いし、力もバリバリあったから、もう無我夢中、もうがむしゃらに働いた。

だからトシさんが僕をととても信用していた。与那国海運のカジキの冷凍流通事業を成功させた。トシさんと僕とのコンビで、与那国の突ん棒を栄えさせたわけよ。

与那国のカジキ突きの面々 尖閣諸島も 有望な漁場

与那国の突ん棒は、戦後は台湾帰りの人たちが戻って来てやっていた。賀数金次郎さんとか播生丸の松川さんとか、大先輩の人たちが。戦前、台湾から尖閣列島にも行っていたというから、尖閣列島にも時々は行っていたかも分らん。

終戦直後だから船も少ないさ。だから細々とやっていたと思う。僕が中学卒業する前(昭和30年、1955年)かな。大分の臼杵という所で、突ん棒6、7隻位造って来た。これから後かな、与那国で突ん棒が次第に盛んになったのは。

与那国が突ん棒の本場として一番盛んな頃は僕が青春時代、あの頃には突き船は20隻位はおったと思う。大体が5トから7ト位の船だった。大きい船もおった。あの老人と海の

糸数さんの金剛丸は 50 トンもあった。大朝得三さんの日之出丸、松川さんの播生丸、仲嵩博さんの宝来丸、宮里さんの長栄丸、長濱一男さんの大宝丸、大城さんの大福丸、前盛勲さんの盛亮丸、市成さんの市丸、あと米元実さんの徳栄丸。思い出だけでこんなにおる。沢山おった。カジキ釣らしては播生丸には勝てんかった。あの船は皆台湾帰りの海人たちが乗っていたから、与那国で一番漁しておった。日之出丸、長栄丸、大宝丸も大漁船して、こんなだったよ。



久部良港に停泊している突き船、(大朝得三 1955)

尖閣諸島ですか。尖閣諸島も有望な漁場だったが、台湾船が沢山来るからあまり行かない。あそこ行かなくても与那国近くでカジキ獲れるからね。だけど、近くで獲れん場合はあそこに行く。でも、行く時は船団組んで行って、大体 1 日 2 日漁して帰って来た。

町会議員に立候補？ 絶対ならん 騒動の末 仕事辞める

譜久山トシさんに雇われて、この突ん棒で獲ってきたカジキの冷凍流通事業をやりだしたのが 26 歳。僕が結婚したのはその翌年の 27 歳、両親がこの機会に早く落ち着かせようと久高島から親戚の娘を連れて来て見合いさせた。それで結婚したのが今のカーちゃん。

そして 1 年後に長男もできた。そしたら、あの安里虎寿さんが、僕がこの時には乙 2 免許持っているからと、遠い高知から連れに来たよ (笑)。虎寿さんは、今度は高知から、遠洋マグロ船を 2 隻買ったわけ。その船長させるからと、わざわざ与那国まで連れに来た。

「成ちゃん、もう 1 回兄さん助けてくれ」と言うから、僕は譜久山さんの工場長なのに。親父も母も驚いて、「虎寿、あんなに言うな。自分の息子は今頑張っているし、次男三男ならやってもいいけど、長男だしから、こっちに落ち着かせてくれ」。

そしたら諦めたよ。「仕方ないね、成ちゃん、兄さんはあんたのこといつまでも忘れんから頑張りなさいよ」「虎寿兄さん、ありがとう、頑張ってね」と別れた。

譜久山海運の冷蔵庫の仕事は楽しかった。やり甲斐あった。仕事のポイントは、カジキの相場見て、いつ市場に送るかだった。それには日本全国の市場、魚の相場動向を知らんといかん。勉強せんといかんしとても勉強にもなった。この経験が僕の人生に大変ためになった。

もう仕事は順調にいつて相当儲かっていた。そうしたら周りから町会議員の話が出た。「立候補セー、お前に投票するから」と。トシさんまで与那国にはこんな素晴らしい頭のある人はいないから、立候補しなさいと勧めてくれた (笑)。僕も実際そうしようと考えた。

そしたら、もうウチの家内がもう大反対。ならんと、絶対ならん！ もう子ども置いて自分は久高に行くから。もう毎日喧嘩よ。いつまでもこんな田舎におって、どうする。ここは

高校もない。沖縄（本島）に、那覇に1日も早く出たい、自分は出て行く！ もう大変だった（笑）。やはり、いつかは那覇に出ないとならんだろうと肚決めた。

いろいろ悩み、考えた末、譜久山海運を辞めようと思った。もう潮時だ、仕事の基礎はこの2ヶ年でできている。あとは誰かに引き継がせばいい。それでトシさんに、辞めさせてほしいと話した。「おばさん、大変申し訳ないことした。皆に迷惑かけた。独りだけなら自分の思う通りできるけど、今は妻子棄てるわけにいかん。許して下さい。旅に出て、必ず成功してきます」「成ちゃん、あんただったらできるから、頑張りなさい」と承諾してくれた。

だけど、トシさんは、「あんたが辞めたら、この冷蔵庫を動かす人はいない。後継ぎ探すまでやってくれ。そんなに長いことできないはずだけど。その代わりに、あんたに船買ってあげるから、この船で儲けつつ、あとのこと考えたらどうか」と。これ聞いて嬉しかった。

僕は譜久山トシさんのような立派な人に巡り会えて、自分は幸せ者だと思った。今でもトシさんは僕の人生の恩人だ。第二のカーちゃんと思って、とても尊敬している。

突き船長栄丸 試運転で カジキ突いた 大漁船だった

（長栄丸の写真を出して） この船よ、譜久山トシさんが僕に買って上げた船は、長栄丸という7トンの突き船の中古船、石垣の桑田造船所に1956,7年に造らした。船主の宮里さんはこの船で儲かっていたが、年取って船をやる人もいないから売ると言うことで、トシさんが僕に千五百ドル現金渡して、買って僕の名義に替えたわけ。大漁船だった。

僕は冷蔵庫の仕事あるさ、それやりつつ、浜盛一男といういい先輩を船長に雇った。

で、この長栄丸は、旧暦3月3日に間に合うように、片寄造船所のドック場に揚げて化粧まわしして、餅も投げて、進水した。昼満ち潮に船下ろして、船長が試運転して行ったら、4時頃港に大漁旗を立てて帰って来たよ（笑）。

船岸壁に着けて、僕は冷蔵庫におったから、来い来いと呼ぶから、行って見たらびっくり。カジキ生きたまま突いて持って来ているわけ。僕は喜んで、カジキにウートー（合掌）したよ（笑）。「一男兄さん、これ開いて、皆に分けてくれ。これはそういう風にしなさいという意味はず」。カジキ開いて、皆に上げた。もう皆喜んだ。試運転でカジキ突いてきたから、幸先よし、この長栄丸、もう大漁船に間違いなしと思った（笑）。

いよいよ翌日から漁開始。夜中の2時に出ると言うから、お願いしますと行かしたよ。アッサビヨー（感嘆詞 ほんと！） 期待した通り、初航海もすぐまた旗立ててが来る。



譜久村トシさんに買ってもらった長栄丸（7.5ト）。大漁船だった。5,6名乗って1航海でカジキ7,8本を揚げた。

大漁旗立ててよ。もう、前後ろにカジキ、横に積んで、全部で12本(笑)。

この船で相当儲かった。この船はものすごくカリー(幸運)ある船だった。ほんと、カジキ獲れないということはなかった。もう漁場に行って皆獲らんけど、僕なんかは今日はデボだ。獲らないのはデボというけど。デボだからと船員に与那国に向けて舵取らして、僕はデッキの方にこんなして俯いていたら、カジキが寄ってきているわけよ。僕はすぐ跳び起きて、機関場に、スロースロー、スローストッパーと合図した。船はスローするとカジキは前に行くさ、僕はこっちにいて、すぐゴッス、突いて、ハッサマヨ(感嘆詞 驚いたね!)この船は素晴らしい船だったね。

カツオをエサに 波の上に誘き出す 「来たドー」で 戦闘開始

僕も突き手やる、一男兄さんも突き手、だからすごいよ。船乗りというのは海は地獄よ、こっちに突き棚に立つさ、足場やるんだけど、あんまり遠い所に投げると、銚と一緒に行く海に落ちていくこともあるよ(笑)。また波荒い、大きな波来て、だけど、波の中に潜っても大丈夫。突き棚? これ裸足で、ちゃんと足が入るようにベルトで上等にされてるから(笑)。長栄丸の船員? 大体5,6名だった。5トクラスの小型の突き船は大体その人数だ。

突き台に2名、櫓(やぐら、見張り台)でカジキを見る人2,3名、機関場に機関長1名、あと艫で舵取は大体船長が舵取るから、舵取り1名、で5,6名なる。機関長は暇な時には、皆と一緒に櫓でカジキ見ている。カジキは水中2,30メートルの深さから、エサ探して泳いでいるから、これをカジキが見るさ、食べようと船に近付いて来る。櫓からカジキ見ている。波の上通るの見たら、「行きおるドー」と言う。船長が「どこかー」と言うたら、「はい、こっちー、こっちー」とこのコースに行くわけよ。

カジキは波かき分けながら、波の上からヒレ出して、エサのカツオを食べに来る。カジキは海の中では赤く見える。船の艫の後ろに赤いのがサーサーと走って追ってくるのが見える。櫓でこれ見ているから、「カジキ来たドー、来たドー」と大声で叫ぶわけ。そして縄持っている人は櫓から急いで下りてくる。デッキに下りたら、この縄の先にカツオをスピイテ(曳いて)いるさ、この縄を引っ張って行って、突き手がうまく突けるようにカジキを誘導するわけ。だから「来たドー」したら、戦闘開始(笑)。

カジキ仕留めるのは突き手の腕次第。突き台に2人いる、取り舵が一番手、面舵は2番に突く。突き手はカジキ突くだけじゃない、船をうまくカジキの方に持って行く、この合図を船長にする。合図の方法? 突き棚(台)に立って銚竿をこう構えているさ。銚竿は長い、3.5~4メートルはある。突き手は銚竿の先を動かして、船長(舵取り)に信号送るわけ、合図す



目を凝らしてカジキ見つけると「来たドー」と戦闘開始。(「キワケヲ」より)

る。今船をどうしなさいと、どこに舵取れ。どの方向に走れ、面舵か、取り舵に船廻せ、スローで行け、スピード出せ、これ全部知らせるわけ。だから船長は銚竿の先を見て、船をどうするか判断する。だから、カジキ突くには突き手と船長の呼吸がピッタリ合わんといかん。

(長栄丸の艫の方指して)。普通突き船は艫の方にブリッジがある。長栄丸みたいな小さい突き船だとはブリッジはない。あったら船長から突き棚の銚竿は見えない、邪魔になる。大型船だと違う、艫にブリッジあるから、あれだと別のやり方、船員もその分多くおるよ。我々の場合は5,6名だから、たくさん魚獲するには、このやり方が一番よ。

船半回転して 突き棚に引き寄せ 撒きエサ食べる際に 銚投げる

長栄丸は、こっちに機関室があつてエンジンある。で、最初に「行きおるドー」と言ったら、機関長は急いで櫓から下りて、機関室に入ってエンジン回す準備しているわけ。機関長にエンジン指示するのは船長。すぐ目の前にワイヤーがあるから。これ機関場につながっている。船長は片方で舵取って、もう片方で、ワイヤー引いて合図する。これ引くと鐘が鳴る。カンカカーンだとフォースピー、カンカーンはスロー、この鐘の合図で、機関長はエンジンどうしなさいという指示受けるわけ。

で、櫓からカジキ来るの見たら、「来るドー」して、すぐこの縄持ってデッキに下りる。曳縄係は、縄の先にはエサのカツオを流して、艫の方からスピーテいるさ。カジキはこれ食べようと艫の後ろから追っておる。だけど突き手は反対の船首の方で銚構えて待っているさ(笑)。だからカジキは艫から、反対の船首に来ないと、突き棚の下に来ないと、突き手は銚で突けないわけよ(笑)。さて、これどうしたらいい? カジキは、カツオ食べると前へ前へとチャー突っ込みよ。だからもう船を回すしかない。船は半回転させれば艫と船首が逆に入れ替わるさ。で、曳縄のカジキのタイミング見て、船長は船を曲げる合図して、船回す。



死にもの狂いで逃げ回るカジキに、突き手はとどめの一撃二撃加える。(石田寛一 1964)

曳縄係も、カジキから目を離さないで、船が半回転して曲がるまで、上手に縄引っ張ったり、緩めたりして、エサのカツオをずっと追わしておくわけ。で、船半回転すると、船は逆になっているから、カジキは、今度は船首に向かって、突き棚目がけて、走って来る。

この時突いたら危ない。危ないから、突き棚の真真中に投げエサ箱がある。こっちにカツオ千切りに切った投げエサがあるから、この時銚竿は左手で構えておって、右手で投げエサをパンパンと3つ4つ投げるわけ。投げたら、カジキは前のカツオを諦めて、投げたエサに振り向いて、これ食べると回ろうとする。その時は銚竿は右手に持ち替えているから、カジキが回った瞬間、スローになった隙にカジキ目がけて投げる。このタイミング逃がさなけ

れば命中は確実。サッと逃げても、頭狙えば、身体（からだ）に当たる。

銚竿投げて、カジキ突いたら、すぐエンジンはスローストップ、船長は鐘叩いて、機関長にすぐ合図するから。

ツバクロは3つ銚矢 ワイヤー繋いで 突き刺したら 逃げられん

普通突き船は、カジキ見たら追いかけて行って、突き柵の下に来たら、上から銚竿を振り下ろしてブッスと突くわけ。だけど我々の場合は、カジキをずっと追いかけて行くことできないし、船員も少ないから。投銚する。逃げるカジキに銚竿投げて突くわけ。だから、突き柵の上からブッスと突くのと、我々みたいに投げて突くのとは当たりが全然違うよ。

（ツバクロの写真を指して） 銚竿は15尺位、この先には、これツバクロといって矢（銚槍）を3本一緒にしたのが装着してある。これ投銚して、カジキに命中して当たれば、ここにワイヤー付いて後ろに縄付いているから、この矢が身体の中に入るから、カジキは逃げることできん。

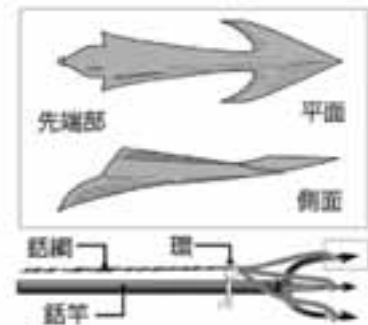
ツバクロはこんな仕掛けになっている。

このツバクロの矢の3本のうち、どちらが当たっているか、当たりが浅かったら、矢はそんなに曲がらない、当たりがよければガツと曲がる。曲がってカジキの身に食い込む、カジキは痛いから、もうポーンと飛び跳ねて、逃げていくから。また跳ね返った衝撃で、竿は外れて海に落ちる。ツバクロはそのままカジキと一緒に持って行かれる。

今度はカジキを逃がさんよう、このツバクロに付けた縄と闘うわけ（笑）。

外れた竿ね、これにも縄付いているから、流れて来たら、長いガギ持って来て、これで掛けて取るわけ。ツバクロの当たりが浅いと、またあんまり跳ね返らん。

突き手は取り舵、面舵に2名立っている、一番手の取り舵が投げて、次は面舵が投げるから銚竿2本、ツバクロの矢は全部で6本になる。このうち2本3本当たれば大丈夫だけど、1本当たって、当たりが浅く、矢も曲がってもいない。皮目にただ入っただけだと、カジキが抵抗すると抜けてしまう。ここで、もう1回、ガサッと打つことができれば、真ん中の骨にツバクロを食い込ませば、もう身動きもできないから確実に獲れる。だけど浅く打ったカジキは、もう一日中も掛かる。無理するな、無理するなで（笑）。これ突いた人が分るわけさ。これは少ししか入ってないから無理するなと、2番手が打とうとしても、打てない場合があるわけ。その時バァーと沈むから、もうその時は仕方なく、縄と気長に闘わんといかんわけ。引っ張ったり、緩めたりして、もう一日中掛かる（笑）。



ツバクロは銚槍を3本一緒に装着、逃がさんよう網が付いている。〈「ウエブサイト」より〉

突き手2人は、ツバクロの当たり具合、カジキの縄の動きを見て、縄は締める。

縄締めると、もう縄を行かさない、もうがっしり締めるわけさ。そうするとカジキは弱まるのが早いから。もう身体皆傷められているから、もう自然にワーと上がる。

カジキは右舷で揚げない、ここに寄せて左舷から揚げる。あの頃巻揚機ない、皆人力で揚げた。すぐこっちに頭揚げて、バンバン、船の錨の芯棒で、バンバン叩くわけさ、この棒は2つ3つデッキにあるから。叩いたら頭の角はこれに引っ掛ける。そしたら尻尾が出るから、こっちに尻尾はまた縄で縛る。デッキにはちゃんと穴開いているから、それで固定すると、どんなに船が揺れても落ちもしない。

僕は、この長栄丸で八重山ゾネ行って、こっちに8本、こっちに4本を縛って、カジキ12本持って来た。朝の2時に出て、夕方5時には帰って来た。朝からすごかった。

これで儲かったよ。あの時は27歳、人生楽しかったなあ(笑)。



今日も大漁だったと水揚げしたカジキを見る。〈大北寛 1970〉

後編に続く

西銘 成吉 にしめ せいきち (与那国漁協)

1941年(昭和16年)八重山与那国島に生まれる。77歳(2018年時)。

この稿は、一ある海人の半生—の後編である。

本稿は、1970年29歳で、一本釣船・第一長栄丸を新造し、突ん棒、深海一本釣、底延縄に挑んだ件からスタートする。

1978年37歳には、沖縄県漁連の市場担当となり、県産魚を飛行機で全国市場に送り出すなどして、県の水産振興に寄与する。

1981年40歳で、沖縄県近海鮪船組合に招聘され、県マグロ船のグアム、パラオ、ヤップ島など海外操業の道を切り開くなど、県マグロ漁業の発展に大きく貢献する。

1996年55歳で退職し、水産加工会社経営の傍ら、沖縄の宝は水産資源との信念のもとに、水産資源の開発研究に専念する。永年の経験と研究成果から、沖縄の一番の宝はサンゴとの結論に達する。氏は、沖縄自らの力で、サンゴ漁を再興させ、沖縄にサンゴ産業を育て上げることが自分の夢であり、国や県に、沖縄のサンゴ漁の重要性を認識し、サンゴ産業育成を呼びかけている。



— ある海人の半生 後編 —

第一長栄丸 新造する 突きん棒、一本釣り 底延縄 曳縄した

長栄丸を買って、突ん棒して、航海する度にカジキを大漁した。これで相当儲かったから、自分で船持ってやれるという自信もできた。今の船は大漁船だが、中古船だし、突ん棒しかできません。この機会にちゃんとした船持って、与那国から出ようと決めて、新しい船を造ることにした。この長栄丸は2年位は持っていたかな。これ千5百ドルで買ったけど、奄美で亀捕る人に5百ドルで売った。新造船は一本釣り船だが、突ん棒も、何でもできる船にした。

丁度29歳の時、石垣登野城の井上造船所で造った。船は実際は7ト位だが、登録は5ト未満にした。所長の井上重行さんは船造らして上手だったけど、遅かったが丁寧だった。

船材の松は黒島産か、あとは殆どヤラブで造った。船代は8千ドル掛かった、欲出して造ったもんだから、この船造って人生狂ったよ(笑)。この船代払うのに、相当苦労した(笑)。

新造船の船名も、前の大漁船、カリ一船にあやかる意味で、第一長栄丸にした。

この第一長栄丸は、与那国から石垣、西表、尖閣列島、台湾のスオーナンポー、シンコウとかで、一本釣り、底延縄、曳縄した。船員は多い時は5,6名、少ない時は2名で行った。

底延縄でマーマチ(オオヒメ)、テークチャー(オオグチイシチビキ)、オークチマチ、ミミジャー(ヒメフエダイ)、アオマチなんかがいっぱい獲れた。

アオマチも大きかった、13和もあった。

与那国の西側の沖、丁度11月頃だった。ガーラ(アジ類)、あの時2人で行って千5百キロ獲ったよ。与那国に持って行かれんから与那国から八重山に行く航路船に、早く揚げれ、揚げれして、魚全部積まして、八重山に下したこともある(笑)。

また突ん棒の時期なったら突ん棒もした。前に突き棚付けて、5,6名乗って行って、マジキ、クロカワ、シロカワ獲った。

この船造って1年後位かな。与那国にNHKの取材が来た。与那国はカジキの本場だから、突ん棒を撮影するからと来たから、この船に乗せてやった。皆出航からカジキ突いて港に帰るまで撮ってある。僕がカジキ突いている所も写してある(笑)。

NHKには、このフィルムあるはず。71年の頃かな、復帰前だったはず。

当時これ船が新しく、走るさ。だからNHKは、櫓に乗って取材した。与那国のウマヅメに漁しに行く時に乗せて行って、あそこで撮影したわけ。僕はあの時30位だから、今から47年前になる、もう昔のことだが、あのフィルムがあれば、今観てみたいね(笑)。

尖閣で 曳き縄、一本釣り 底延縄やった アカオでも 操業した

アカオ(大正島、赤尾嶼)でも曳き縄した。あそこは潮は速い。曳き縄にはいい漁場だから、宮古の船も、八重山の船もよく来ていた。アカオは当り前の島じゃない、岩の山だよ。海からこんなして岩山が突き出ている。あそこでサワラとか、イソマグロとか夜流して釣った。サワラはサワラ曳きで。

4,50 呎のイソマグロなんかもこんなにいた。サワラも、イソマグロも相当釣れた。

またウブシュー(ヤイト)という魚あるさ、冬なったらあれ釣ってきた。

尖閣列島は、一本釣りも底延縄もした。

一本釣り船は、八重山のカツオ船が終わったら集魚灯でなら、3日位で満船できるから、尖閣近くに行って、7,80 尋 120,30メートル位の所で、灯入れて、マーマチ、すごく釣れたよ。

もう集魚灯を点けて、エサ下ろすと、皆底届かんうちに皆食っておった。海の底から上に上がる。電灯に向かって上がって来るから、150メートル位の所でも、50メートル位の所でも、マーマチなんかバンバン釣れた。

底延縄してもすごかった。普通底延縄なら、アンカー打つさ。打って1か所に網固定するから、魚いる所に当たればいいけど、当たらんかも分らん。尖閣だと潮が速いから、固定すると潮に引っ張られて、網切れる場合もある。だから、僕は錘(おもり)だけにした。

これが底延縄の図。これ1人は舵取って、2人でやる、こういう樽3つ4つ位に皆針を掛けていて、2人でできた。釣針は多くない、樽1つには幹縄に釣針は7,80位掛けられて、



アカオは好漁場だ。曳き縄、一本釣り、底延縄できる。写真は曳き縄している宮古の漁船。(長嶺巖 2012)

これにエサも掛けられている。この樽3つ分の幹繩入れるから、全部で釣針240本位。

で、魚探見て、魚いるか見て、地形見て、場所決めるさ。決めたら、そこに旗1つ立ててから、船スローで流しながら、樽の幹繩をボンボン入れる。これ終わったら、残り2つの樽の繩、これもボンボン入れて、最初は錘しているから、最後も錘してぶん投げる。投げたら潮によって流れるわけさ、もう潮に流されて、あとは底に繩は沈んでいくから。

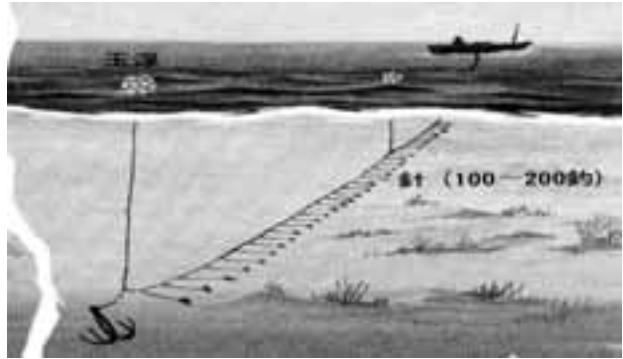
枝繩に釣針1個、1メートル50間隔だったかな、それに釣繩の長さ50センチ位、だから繩の長さが350メートル位か。自分でこんな仕掛けして工夫したわけ。

これ底延繩だけど、浮き延繩にもなるわけ。底には着いているけど、途中で着かん所もあるはずよ。よう釣れよった。マチなんかこんなに釣れたね。大きなマーマチから、センネンダイ、いろいろ、これで成功して儲かったよ。

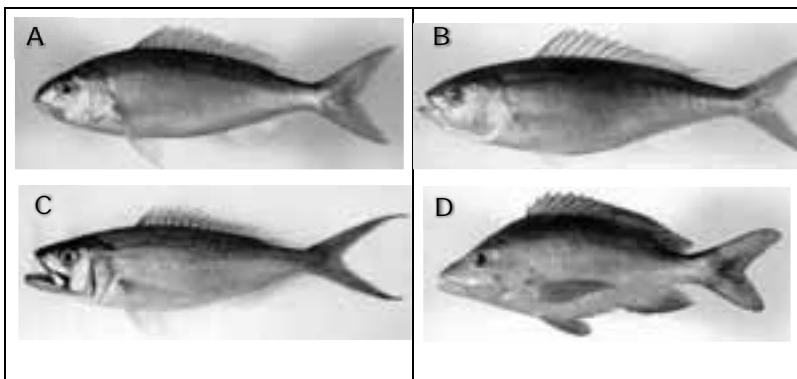
水深？ 大体70尋から85尋(130から150メートル)位だった。

水深は浅いからアカマチ(ハマダイ)、シチューマチ(アオダイ)なんかは釣れん。アカマチ、シチュー

マチは水深230~200メートル位だから。クルキンマチ(ヒメダイ)は釣れた。あれは140メートルで釣れるから。あれでマーマチ、テークチャー、オークチマチがいっぱい獲れた。



底延繩：長さ350メートルの繩に釣針240個を吊るし両端に錘を付けて130メートル深さに沈め、潮に流しながら底魚を釣る。



尖閣で釣れた魚は、底延繩(水深130~150メートル)では、A マーチ、B クルキンマチ、C テークチャー、D ミミジャーが獲れた。



あと曳き縄とかでは、でかいE サワラ、F イソマグロが釣れた。

僕の場合、魚獲ったら、よく宮古に入ったから、アカオでよくやった。

あそこは宮古に近いから。あの時代は、八重山ではあまり魚売れんから、八重山に入るより、尖閣列島からすぐ宮古に入った。

宮古に魚下ろしたら、すぐ農家に行って、いろんな野菜買って、長栄丸に積んで、そのまま与那国に直行した。八重山は野菜は高い、宮古は安かった。その代わり魚も安かった。それ止む得ないから、宮古を往復したりして、少しでも儲けがあるように工夫して、いろんなことをやった（笑）。

尖閣最高の漁場 台湾・中国にやられている 日本政府 しっかりせよ

この新造船の長栄丸は 29 歳に造って、母が亡くなって、久高島にこの船持って行った。これが 33 歳の時だから。与那国では、足掛け 3,4 年位漁していたかな。

あの時は、もうどことない、もう行ける所はどこまでも行った。尖閣列島に 2 人で行って、底延縄の縄入れて、スギ獲ったこともある。

あのクバシマ（魚釣島）が見える所で、あの島をノースウエス見て、この辺で仕事しておった。水深 85 尋位（150 メーター）に縄入れたら、スギ釣れた。25 疋もあった。700 から 800 疋位獲れた。あれすごかったね（笑）。

あれが僕の尖閣列島への最後の航海だった。

このスギを石垣の登野城漁港に着いたら、何やこれ？ 見たことない魚だから、こっちでは売れないと断られた。丁度、鹿児島に行く船がいたからに、氷入れて、コンテナに積んで、すぐ鹿児島漁連に送った。そしたら高く売れた。びっくりする位の値段だった。1 航海の経費だけじゃなかった、儲けが付く位高く売れたわけ（笑）。

それから 1 カ月足らずで、この長栄丸持って、久高島に行ったと思う。

そのあとずっと久高島にいるから、尖閣列島は全然行けんさ。



尖閣諸島は最高の漁場、台湾漁船の違法操業は常態化。南小島沖合に点々としているのは操業中の台湾船。（松田賀勝 1968）

尖閣列島は、アカオも、クバシマも、今の魚釣島がクバシマよ。してその隣に小さい島あるさ。南小島、北小島が、あれ僕らはトイシマグワ（鳥島小）と言っていた。また上にユクン（久場島）もある。もうあそこは皆一緒、魚はいっぱいさ。スギも、アカマチ、シチューマチ、クルキンマチ、マーマチも、イソマグロも、サワラも、ウブシューも、カジキも、いっぱいいる。

今でも魚はこんなにいるはずよ。

それに曳縄も、一本釣りも、底延縄も、突ん棒も、どんな漁でもできる。

僕も全部自分で体験して来たし、また、大漁してきたから、よく分かる。

尖閣列島は、ワッター（我々）海人にとって最高の漁場だ。だから沖縄の、日本の宝の島だよ。今中国や台湾船なんかが行ったり来たりしている。もうあれなんかにやられているわけよ。沖縄のマグロ船もそう



2隻の台湾船は操業を終え、島の傍らで休憩中か？
(松田賀勝 1968)

さ。日本政府はだらしがない。こっちは日本の領土だから、あれなんかに荒らさんように、保安庁は船出して、もっと厳しく取り締まってほしい。日本政府はもっとしつかりせんといかん。

母亡くなり 久高島へ引っ越す 長栄丸で稼いで 船代払う

母は、僕がいつれ与那国から出て行くことに、悩み悩んでいたんじゃないか。このことで脳溢血で倒れたわけよ。丁度その時は、長栄丸で漁していて、カジキ獲って、組合に下そうとしていたら、母が倒れた知らせを受けた。もうびっくりよ。

すぐ翌日米軍の飛行機をお願いして、救急で沖縄市の病院に運んだけど、9日目に亡くなった。ハッセモ（感嘆詞 ああのタメ息の意）、物も思われんさ。それからの苦労は大変。親父は親父、ウワーバグト！（余計な事！）、こんな大金使って船造ったからこんなになった。もう船造らなくてもよかったのに。船造ったから母亡くなったという言い方したから、もうワジワジー（怒り収まらず）してならんわけさ。

よし、こっちにおったら、しょっちゅう親子喧嘩だ。これでは大変だからと、船持って、僕だけ先に久高島行くことにした。家内と相談してから。船に荷物積んで、与那国から夜中出たよ。八重山から久米島にコースとったわけ、凧だったからよかったけど、久米島の灯台が見えたから喜屋武に走って、喜屋武岬から廻って久高島に入った

したら、親父は僕が漁に出たが戻って来ないと心配しているわけよ。あとから心配するな、あんたの息子は久高島に着いて仕事していると聞いたから、もう酒飲んで大変だったらしい（笑）。それから、家内も子供たちも久高島に引っ越してきたわけよ。これが 31 歳の時。

僕の沖縄での人生は、その時にが、久高島から始まったわけよ。

久高島は海人いっぱいいる、仕事もいっぱいあった。こっちでうんと稼いで船代払わんといかん。もう一生懸命頑張った。長栄丸は一本釣り専門だから、伊平屋、伊是名周辺、久米島、慶良間周辺、宮古まで行った。南は八重山とか、尖閣には行かんけど、北の海はどことない、鹿児島島の喜界島まで、与論、徳之島、沖永良部周辺まで行って仕事した。

電灯潜りも、ダイバー（潜水ブーカー）もやった。また時季にはイカ釣りもした。モズクもウニも自分で採って、加工もしたし、育てもした。

うんと儲けたよ、うんと稼いだ。それに海のこと全部自分でやっていたから、県の市場に入った時、これがプラスになった。

だけど、海の仕事は大変さ。ダイバーの仕事は船にタンク作って、40メートルダイバー持って潜ってやっていたが、これ命が危ないと思っていた。そしたら、丁度馬天に船回して行ったら、同級生に陸（おか）の仕事しなさいと勧められた。それで船売る決心をした。

伊平屋の所でクルキンマチ釣って、これで大漁して、船代全部払った。丁度また宮古から遊漁船で使いたいから 350 万で買いたいという人がいた。それで船売ろうと宮古に船を持って行き、引き渡して来た。

これで長栄丸とおさらばだ。これ自分で造った船、苦勞を共にしてきた思い出深い船だ。「世話になったな。長栄丸、ありがとうよ」と言って、分れる時には、やっぱり涙が込み上げて来たね（笑）。俺は船売ったから、もう海人じゃない、陸の人間だよ、そう思うと複雑だった。そのあと何月目かな、久高で新聞見ていたら、海洋博当時（1975～76年）、砂採取運搬船の船長採用広告があるわけ、給料 50 万円で。すぐ本部運天港に行って、採用された。

僕は、この時には 5 千トまでの船長免許持っているから。で、大宜味塩屋の浜の砂を採って運天港に運ぶポンプ船の船長していたわけ。船は夜昼上がるから、毎日港で寝泊まりして仕事しておった。

県漁連市場 請われて入る 月給 50 万から 18 万に減る

この砂船船長の給料は、毎月那覇泊の事務所にもらいに行っていた。もらって、その足で、久高島に帰って、家内に渡しておった。そうしたこと続けているうち何ヶ月目だったかな。いつものように泊港に行ったら、「西銘さん、あんた探していたんだよ」と知り合いの参事から声掛けられた。「何で？」「あんたが必要だ。県漁連の市場に入ってくれ。夜の 10 時から朝の 5 時まで水揚げ担当者にしたいから考えてみてくれ」と。給料幾ら？と聞いたら 18 万と言うから、「とんでもない、今 50 万取っている」からと断った。

この人曰く、「給料安いというけど、その代わり、市場はあんたに全部任すから、臨時だ



久高島、沖縄本島東南端に位置し、1.38 km²の島だが卓越した漁夫を輩出し各地で活躍している。（「国土交通省」サイト）

から自分で何してもいいよ。あんたが必要だから。明日でも明後日でもいいから、とにかく早く来てほしい」と言われた。給料 18 万円には不満だったけど、市場の仕事に魅力があった。家内子供たちと相談して、親戚や友達の意見も聞いて、いろいろ考えた。

譜久山トシさんの所で冷蔵庫の工場長していた。あの時は那覇の魚相場見て、那覇の市場にカジキをまとめて送っていた。相場が当たれば、高く売れて、その分利益も多く出た。これが面白くて、市場の仕事、魚の市場流通というのに興味持っていた。

トシさんの所では、カジキだけ扱っていた。それも主な相手は県内市場、県外も少しはあったけど。県漁連ならば、種類も規模も大きい。いろんな魚を取り扱うし、しかも日本全国の市場が対象だ。これ男としてやり甲斐ある、面白い仕事だ。またとないチャンスと思った(笑)。そう考えた末、県漁連市場に行くことにした。すぐ浦添の勢理客にアパートを探して、久高島にいる家内と子供を引っ越しさせた。給料 18 万円、うち 3 万 5 千円はアパート代だった。大変だったけど、県漁連の市場に行くことにした。

初仕事 台風あと カジキ仕入れる 飛ぶように売れ 400 万利益

県漁連の魚市場担当になって、しばらくしたら沖縄に台風が来た。この台風の時が僕の最初の大きな仕事になった(笑)。台風あと時化で魚ないさ。僕は、譜久山トシさんの所にいた時に、こんな場合の要領分かっていたから、すぐ熊本の魚仲買会社に電話入れた(笑)。

「もしもし、沖縄からよ、魚欲しいが、何がある?」「凍結カジキがある。」

「よし、これ 5 ト買うから、今日にでも、すぐ送ってくれ。」と 350 円で交渉して 175 万円分注文した。大至急で送らしたら、すぐカジキは来た。船は港に着いているけど、もう台風で荷下ろしは休んでいたから、港は混雑し、皆順番待ちだった。

もう荷下ろしはいつになるか分からない。僕はすぐ港行って、交渉した。今日で何とか荷下ろしてくれ。何、とても無理だと。それならウチの職員連れて来て荷下ろしさせるからと談判したよ(笑)。ウチの市場も、台風で時化していたから魚来ない、もうあれだけの職員が遊んでいるから。じゃー、何かい? 自分たちで荷下ろしする。それなら喜んで、オーケーした(笑)。すぐ皆連れて行って、大きな 4 ト車持って港に、安謝港に行って、もうコンテナに積んで、この凍結カジキ、市場に持って来た。持って来て、その日に全部セリに出したわけ。もう魚何もないさ、これが飛ぶように売れたよ(笑)。

僅か 350 円で買った品物が、約 900 円位で売れた。もうすごいさ。仕入れ 175 万が 450 万近く売り上げになったわけ。利益は 275 万円だよ。このマグロのお陰で、市場はだいぶ儲けた(笑)。そしたら、そのあとから、船の親方たちに僕は信用されたわけ。僕の腕を見込んで、西銘さん、西銘さんと、お願いに来たよ。

マグロ買ってくれと お願いされる バイト副業で バンバン稼ぐ

あの当時はマグロ船なんかもいっぱい。魚はこんなに揚がるけど、全部は捌けない。

沖縄の人口は今は 140 万人だが、当時は 95 万人位しかいない、魚消費する量も少ない。

僕は譜久山さんの所にいた時から、沖縄の市場だけなら限界ある。県外の市場、鹿児島、熊本とか、東京の築地、東北の気仙沼などにも出荷できればと考えて、あっちこっちの市場情報に関心あった。親方たちから「西銘さん、お願いだから、自分の魚買ってこれ」と沖縄で売れないからお願いされたわけ。だけど、僕が魚買って、内地に送って売り捌く。そんな商売できるわけない。自分はここの市場任されているからと断った。

何度もお願いと来たから、糸満三郎会長に話した。

会長は「西銘君、あんたは臨時だから、自由にやっつけていい。これはあんたの腕試しだから、好きなようにやっつけていい」と言ったわけ。なるほど、僕が市場に入る時、「給料安いけど、その代わり、臨時だから何してもいいよ」と言うのはそういう意味だったんだ（笑）。

それを会長は、これ君の腕試しだよ、自由にやっつけていい、アルバイト副業として自由にやっつけていいと許可してくれた。会長のお墨付きがあるわけだから、翌日からすぐ始めた。

県漁連市場には、毎日 60 トも 70 トも水揚げあるけど、仲買は弱いから、親方たちが「西銘さん、マグロ 10 本でもいいから、和 500 円で買ってこれ」「この船 300 和、この船 500 和と 2 トある。この魚買ってこれ」とお願いにきた。

また新南群島、あの南沙諸島は、今あそこに行けないけど、あの頃自由だった。これだけのマグロ船は 10 月になったら、もう皆あそこに行って魚獲ってくる。獲った魚は、親方たちが「西銘さん、何とかしてくれんか」ときた。

もう僕はメカジキからシロカワから、クロカワ、マカジキから、バチから皆買い込んだ。もう買ったら、すぐ鹿児島とか、気仙沼とか、築地に電話して、値段交渉して、この魚売って、すぐ送った。午前 4 時頃には運送会社、コンテナ持って来るから、これに皆氷漬けて、キッサモー（感嘆詞、いやもう）3 時頃から出ているわけよ。

飛行機でもマグロ送った。そしたら仲買の連中びっくりしておった。

「あの西銘フラー（バカ）よ。人が飛行機にも乗れんのに、マグロを飛行機で送っている。アンシ引き合イガヤー」。言わせておくと相手にしなかった（笑）。

もうあれだけの船主、親方がお願いするから、もうバンバン買った。はい何本、はい何キロと。船ごと買ったこともあった。買ったら、今度は高く売らんといかんから、もうあっちこっちの市場にバンバン電話して、バンバン送った。

もう日本中で僕の知らない市場ない。北は北海道から、南は九州、各都道府県の全部の市場と取引した。それで、僕も、うんと儲けたよ。給料は 18 万しかないのに（笑）。もういっぱい稼いだもんだから、浦添の大謝名に土地買って、今のお家を造った。勢理客の 3 万 5 千円のアパートから、家族皆、引っ越してきたわけ。あの家は 7 千万円位掛かった。

しばらくしたら、丁度家が完成した頃だったかな。県近海鮪漁業組合が僕を訪ねて来た。

しぶしぶ 県近海鮪組合に入る 3 年以内に 借金返し 立て直し約束

この沖縄県近海鮪漁業組合は、昭和 53 年に知事認可で設立されたマグロ船主の組合で、事業が振るわず、貸金業から 8 千万円も借りていた。

僕にこの組合に入って、建て直してほしいとお願いに来たわけ。とんでもない、いやだと断った。市場にいたら自由に仕事できるし、糸満会長も行かさんというわけ。

それでも、そこなんとかとお願いと来た。終いには、県水産課与那覇さんが、西銘順治知事から、宜しく頼むというメッセージ持って来た。知事は久高島、与那国の大先輩で、親父たちも世話なっているから、もう断れん。もう行くしかないと腹を決めた。

それで金城実組合長と、与那覇さんに言った。「僕組合に行ってもいい。だけど条件があります。今貸金業者から金借りている。漁業関係の銀行があるはず、漁信連が」「分かりました。帰って組合員と相談して、理事会やって、西銘さんの言う通りお金借りてやりましょう」「それならば、私やって上げます。3年足らずで、借金も返して、大きな組合に育てます」。1週間位してまた2人来た。膝まづいてよ。「あんたの言う通りお金もできました。理事の担保入れて、お金3億借りました」「いや、3億は必要ない、1億円でも十分」「いやいや、西銘さんお願いしますよ」「そうですか、分かりました」。

それで組合理事会を開いてもらった。「どうですか、今皆さんの上司から皆さんの組合のことしてくれと私は来てますが、全て営業に対して、私に任せますか？」と聞いたら、「そんなこと言わんで、西銘さんお願いします、頼みます」と言うから。「そこですよ、オーケーです」。それから僕は組合に入ったわけだ。

組合に入ると、すぐ金城組合長に言った。「仕事するだけが能じゃない。挨拶廻りせんといかん」「どこに?」「各都道府県の漁業関係の組織のある市場に」「どこの市場に?」「東京にも築地の市場がある。横浜も川崎も、どこもありますよ」。もう驚いているわけさ。

「2人で出張しましょう、挨拶回り10日間は予定して下さい」。で、行ったわけ、北は気仙沼から、次々と廻って、仙台から塩釜、東京の築地、そして横浜から川崎、焼津から清水の市場に、皆挨拶廻りしたから、もう組合長はもう目まん丸くしていた。

「西銘さん、ワッター（自分たち）は魚獲るだけしか分からなかった。こんな所があると知らなかった。あんたの考えすごい」。静岡の浜松が最後だった。名古屋経由で、岐阜県も行きたい。熊本も僕知っている。もっと行くべきだけど、もう疲れていたから、これだけ挨拶廻りすれば、ワッター組合は、あっちこっちの市場に魚出荷できる、もうバンバン仕事できるからと帰って来たわけ（笑）。

グアム島に目を付ける 漁場近く有望 12隻の操業許可 もらう

中大型のマグロ船は南方方面で操業していた。だけど漁業専管水域200カリと制限されて、もう身動きできないわけよ。それで目を付けたのがグアム島、ウチの組合は日本政府から許可もらって、グアム島で操業できるようにしようと視察に行った。

行ったら、沖縄のマグロ船の親方たちがいた。皆顔見知り、僕は市場で、この親方たちからもマグロ買っていたから。この沖縄のマグロ船は、1年頃前から内地の大手仲買が技術はなくて、ただグアム島に連れて行って魚獲らして、売らしていたから、赤字続きだった。

「あい、西銘さん、何しに来た?」「遊びに来たよ」(笑)と冗談言ったら、一人が泣きついてきた。「お願い、あんた魚のこと全部分かるさ。15ト魚釣ってきてても取前がなく赤字だから、3百万上げるから、何とかしてくれ」「いや、僕は組合以外は仕事できないが、どうして?」と魚見せてもらった。そしたら、もうそのままチャータックミ(そのまま投げ込んでいだけ)さ。こんなしたら魚売れるわけないと怒った。

僕がこれ仕分けして、15ト余りから12ト8百を上等にして送ってやった。そしたらあのままだと和600円、15ト送っても9百万。上等にしたら和1280円位で売れたから、12ト8百で、千6百万円近く水揚げしたわけよ。もう親方連中は大騒ぎ、びっくりしていた。

この親方はお礼にウイスキー持って来て、「西銘さん、自分組合に入るから、次からまたやってくれよ」(笑)。「それは僕勝手にできんよ。お礼の3百万もいらん。その代りこっちの事情がよく分かった、僕もプラスになったから」(笑)。で、見たり、聞いたりしていろいろ調べたら、グアム島は、漁場も近く、有望だと分かった。

日本政府に正式に交渉して、ウチの組合の船12隻のグアム島での操業許可もらって、マグロ船の仕事始めた。この写真は、グアムの港に係留しているワッター組合のマグロ船。

無線で僕が港に入れる。毎日朝夕連絡して、今日の釣り具合は何か、報告あそこから出てくる。そしたら何丸何丸で、今日の水揚げは何魚が何本、何10和が何本。それで毎日データ取って、それに飛行機の輸送代は値が張るなら、内地の市場の相場を見比べて、どこに送るか決める。そうしながら、魚仕分けして、これを段ボールに入れるわけよ、これがポイントだ。こんなやり方は、皆僕が最初だった。あとで皆、僕の真似しているわけ。

マグロ船1隻で 水揚げ年2億円余 2年足らずで 組合借金返す

さっき話したように、魚は上等にして、仕分けして、上等に送れば高く売れる、これが一番肝心。船からマグロ水揚げするさ、バンバン魚下ろすと切って、魚上等にして、ダンボールに、バンバン入れていくわけ。これがポイント。これ大事だから、僕がやっていた。

こういう台を3つ揃えているから、魚切って、これはあそこ、これはこっちと、仕分けしておいて、集まったら段ボールに入れる。これ簡単なようだが、経験と技術がいるから、僕みたいに誰もできないわけ。台湾の人なんかよく見に来ておった。あんたがこう、こうやるのは不思議だと言いながら、じっと見ていたね(笑)。

マグロ分らん親方だと、船から下す時は尻尾を切っていいか分からんから、皆箱に詰めていく(笑)。また7,8和の小さい魚は誰も売りきれん。僕は小さい魚も大きな魚と同じよう



魚を満載して帰ってきた近海鮪組合所属のマグロ船。水揚げ待ちで港に待機中。(ポナペにて2001)

に売れる。大きい魚は大きい市場に、小さい魚は小さい市場に、青森県とかに送るから。これは譜久山トシさんの所にいる時に、県市場で仕事しているうちに分かったわけ（笑）。

もう1つ僕がグアム島でとった作戦がある。マグロ船は、沖縄の船員使ったら最低20万、フィリピン人は4万で使えるから、マグロ船を12隻、グアム島に持って行って、船長1人だけは30万給料上げて、5,6名の船員は4万で使える。あの時沖縄は船員不足だし、グアムのフィリピン人は生活難だったから、もうやりたい人、こんなにいる、だから助かったはず。これで船の経費抑えることができたわけ。あとから皆真似しているよ。

ウチの組合は、グアムに船持って行って、大当たりだった、すごく儲けた。沖縄から行くと、グアムの漁場まで1カ月掛かる。グアムから行くと3航海できる。

あの時はマグロが当たり2千円から2千5百円したわけよ、バチが。だから2か月3航海するから、もうすごいさ。毎航海1千万以上の水揚げだから。これを僕が飛行機でバンバン送って、うんとマグロ船を活性させたわけ。

マグロ船1隻で、年間水揚げ最高が3億円、大体平均2億円余り、船12隻だから全部で25億は下らん。その手数料が3%取るにしても、それからエサ代、燃料15%位取るから、僕が入って2年足らずで、組合は8千万の借金返して、大きな利益も出たしたからね。

ハワイで ベトナム難民に カツオ船指導 2週間で帰る

グアムに行って1,2年あと、日本のジャイカ（JICA 国際協力機構）から派遣されてハワイにも行った。グアムで沖縄系2世の比嘉ハーリーと知り合って、僕がやる仕事を見て、驚いているわけさ。比嘉ヒデオという自分の兄貴がハワイのオアフ島におる。ベトナム難民にあそこでマグロ船させているから、指導してくれとお願いされて行った。

ハーリーは上に兄のヒデオがいて、下に弟のノボルがいた。この3人は昔宜野湾にあったペプシコーラ会社の社長の子供だ。兄のヒデオは足切れていた。欧州戦線で負傷したと言っていた。弟のノボルはグテマギー（体躯腕力大きい）、もうこんなだったよ（笑）。

オアフ島の西にまた大きな島がある。ハワイ島、牛を何百頭を養って、そこで牧場やっておった。で、ハワイに県人会が500名、600名位おった。この県人会の集まりに、僕も呼ばれた。会長にこんな仕事で来ましたと話もしたわけよ。

で、オアフ島の港行って見たら、25隻位難民の中国のジャンク船があった。これアメリカ政府が金出して、ベトナム難民に、マグロ釣らしておるわけ。これ比嘉兄弟が関係してい



メバチは身質を上中下に格付け仕分けして出荷するため身質を調べている筆者。（ボナベにて2001）

た。港から少し東側に難民部落があった。ベトナム人は、魚獲るのは上手じゃない。

僕にマグロ船のやり方を指導して、魚がいっぱい獲れるようにしてほしい。そうすれば難民たちの生活もよくなり、この事業の経費もまかなうことができるからと、弟のハーリーが僕を指導に行かしたわけ。嬉しいさ。沖縄のマグロ船の技術が、僕らのやり方が、ベトナム人の、皆の為になるわけだからと、張り切って教えたよ。

で、船出して、パヤオで魚獲ってきた。港に魚水揚げしていたら、ハワイの海人、遊漁船組合の連中が押しかけて来た。ベトナム人に絶対魚獲らさんと、もう喧嘩さ、港だよ（笑）。

日本の法律とアメリカの法律とは全然違うから、アギジャビヨ、あそこは西も東もピストル持っている。もうピストルを、自動小銃を構えて、お前たちやるかー、やるかーなんだよ、今にもぶっ放す勢い、怖いさ（笑）。

この喧嘩の原因はパヤオにある、ハワイの遊漁船の海人は勝手に線引きして、ベトナム難民の船には、パヤオの所では絶対魚獲らさんとしているわけ。それで僕はヒデオとノボルに言った。「あんたたちはこれから解決しないといかん。パヤオは地元優先だけど、難民にもどう便宜を図るか、これアメリカ政府と交渉してやらんと、僕はこっちで働かない。ハキサミヨ、ここ危ない所だから、もうグアムに帰る。何かあったら協力するから」「確かに西銘さんの言う通りだ。政府に交渉して決まったらその時またお願いします」「じゃ僕は明日切符買うから」。それであっちこっちハワイを観光して、グアムに帰って来た。

ハワイに 3 カ月はいたかな。僕はベトナム難民と握手して一緒に写真も撮ったが、あれどこ行ったか分からん（笑）。

グアムから ポナペで操業 パラオで 石原慎太郎と出会った

ワッター組合のマグロ船は毎航海 1 千万以上の水揚げした。それを僕が飛行機でバンバン送って、うんと成功させたわけ。そしたら、このやり方見て、台湾船から、中国船からワンカラワンカラ（自分らも、自分らもと）来て、グアム島の港に船入らん（笑）。

台湾船、中国船だけで 600 隻あまり来ていたね。もう大変だと言うことで、すぐ東のポナペという所に移動した。

日本政府と相談して、操業許可を得て操業しようとしたら、今度はポナペには輸送便がないから、問題が出たわけよ。新しく航路開かんとならんから、輸送代は割高になるさ。それで輸送代の補助金もらえんかと云うことで、沖縄県水産課と一緒に、これ担当するODAとジャイカに陳情に行った。したら、ODAの予算 40 兆円か、この予算の利息のうち 7800 万を補助金としてもらうことになった。

で、沖縄県のマグロ船 20 隻はポナペで操業する。この 20 隻が水揚げした分の補助金 7800 万円は組合が扱うことになったから、ポナペ政府と新航路の交渉した。

したら、あそこは欲が強いわけ。ソ連の飛行機なんか持ってきたりしたから、もう頭に来た（笑）。もう皆さん方と気合わんから、皆さん方と契約はしないと交渉打ち切った。

それで、すぐグアムに飛んで行って、今度はコンチネンタル社に話持っていった。そした

ら我が社はポナペ行き来のローカル便なんかは扱わないと（笑）。じゃ、この補助金全部渡すから、これでどうにかお願いと強く頼んだ。それでコンチネンタル社と契約できた。

それからコンチネンタル社の飛行機はハワイから帰りにポナペ経由でローカル便として、あっちこちに寄るようになった。

僕がポナペも道拓いたわけ。このローカル便ができたから、もうポナペから、東のコスラエ、マジュロ、また西にはチューク、ヤップ、パラオがあるさ。もう輸送の心配しないでいい、ミクロネシアのどこに行き来しても、安心して操業できるようになった。

パラオでね。今、思い出したけど、石原慎太郎さんが都知事ならん時に、パラオで水揚げした時に会った。「どこから来ました？」「沖縄からです」。僕は台湾近くの与那国出身と名前書いて上げたら、「ええ、何であんな遠い所から、なぜ、また」とびっくりしていた。

石原さんは、この時、大きなヨットをパラオのアオジマという所に係留して、遊びに来ていたわけ。その時にホテルで一緒になった。夕方、ホテルで話したよ。「西銘さん、私は石原慎太郎です。・・日本国は北は北海道から南は南西諸島まで、海洋国家ですから、大いに活躍して下さい。自分は後ろ盾になって応援します。力になりますから、何かあったら電話でも下さい」。にこにこ笑ってね。思い出すよ、パラオのホテルで出会ったことを（笑）。

軌道に乗ったら 開拓精神忘れる 潮時と見て 55歳で辞める

近海鮪組合は、平成8年55歳で辞めた。40に入ったから、15年勤めていた。

その間いろんな体験をした。これがミクロネシアの地図、こっちがグアム、西はヤップ島、パラオ諸島、東はトラック島、その東はポナペ、コスラエ、マジュロ、その中間にナウル、僕は現役時代に、全部行き来し、いい人にも恵まれて、仕事はバンバンできたよ。

グアム島から始まったが、今のグアムは沖縄以上に開けている、すごい。当時住民はチャモロ人で、田舎の村みたいだった。今みたいに開けてないから皆生活難よ。グアムの沖縄県人会は30人位いたかな、僕が県人会を助けたわけさ。

これだけのマグロ船行ったら、マグロ船のエサ、これ捨てるわけ。県人会にピックアップ2台を準備しなさいと、船が入る度に来いと、何時に来いよと連絡して、来たらこのエサのサンマを上げていた。上等だよ、食べられる、最高のものよ。グアム島は魚ある所ではないから、これ飛ぶように売れた。

それが約1億円位は売れたらしい。それで僕に金半分もらえと言うから、とんでもない、あんたなんかの為しなさいと上げたのに。何で僕



ミクロネシアはパラオ、グアム、サイパン、チューク、ポナペ、マジュロ等々からなり、戦前は日本委託統治下でパラオに旧南洋庁が置かれ、経済発展し、日本との関係も深く親日的である。

がもらわんといかんか。これ皆で分けなさい。売る人の手間もちゃんと上げたと言うから。いらんよ、それなら、グアム島に寄付するか、皆さんでもっといいように考えてやりなさいと言った。

僕がやっている仕事、皆見に来ていた。沖縄、内地の業者から、台湾、中国の業者から、僕の真似して皆やって、それで皆もう競争だよ。そしたら、どこが手を廻したか知らないが、グアムの警官に賄賂上げて、僕のビザおかしいと、僕を移民局が逮捕させたわけ。そんなことないと組合にすぐ電話入れたら、運悪く台湾に皆旅行に行行って沖縄の事務所に誰もいないわけ（笑）。僕説明できないさ。刑務所入ったよ（笑）。県人会が驚いて、西銘さん悪いことする人じゃないからと運動してくれて、釈放されたわけ。あとでこれ嘘だとバレて、あの警官は鹹なった。僕が沖縄に帰った時、グアム政府からも大統領の奥さん、弁護士、県人会の3名、僕の家まで謝りに来た、すみませんでしたと。で、グアムの永住権上げますから、あんたのやっている仕事、またグアムに来て頑張っ続けて下さいとお願いされたわけ。そしたら家内が、また、ならん、絶対ならん！と言ったから、グアムの永住権もらうのは断った、パーなった（笑）。

15年間も永く仕事していると、グアムでも、パナペでも、どこでも、嫌なこと、いろんなことあった。近海鮪組合の中でもそうだった。人間そうかもしれんけど。最初はパイオニア精神で頑張るさ。頑張っって、仕事が軌道に乗れば、開拓精神を忘れて傲慢になるわけ。どうすれば仕事バンバンできるか考えればいいけど、そうじゃない、仕事は二の次、邪魔することしかしないから、トラブルが多くなる。そうなったら仕事するのも面白くない。

僕の気性に合わんわけ。僕はグアムに船持って行って、ボナペも道拓いて、沖縄のマグロ業界をこんなに栄えさせた。もう今が潮時だろうと思って、近海鮪組合を辞めることにした。平成8年55歳に辞めたから、もう20年余りなる。

朝4時起床 海は何でも宝 これ手掛ける でも サンゴが一番

近海鮪辞めて、ずっと自分で、朝4時に起きて、海の仕事している。

自分の工場持って、7,8名位使って、海の仕事、ありとあらゆるものしている（笑）。

身体の調子？ もう最高よ。40代は80和あった。今は60和、スマートになった。

47歳に椎間板ヘルニア罹かって、それでステーキとかの一切肉食辞めて、やっとかつと腰も治って、血圧も170,90あったけど、この身体なって血圧も120,60なって、こんなに丈夫になった。僕は若い時は船乗りでは酒飲んだけど、陸に上がってからは、一滴も酒飲んでない。グアム島行こうが、ハワイ行こうが、もう酒飲まない。熱いお湯の風呂入ったことない。皆シャワーだけ。で、アキサビヨー、今青春に戻っている。あんなに身体違う、朝の4時から起きて、もう仕事も、他人が化け物という位やる。神様がさせているんじゃないか。

仕事の秘訣？ 僕は間違っことは大嫌いだから、自分も絶対しないし、他人にもさせん。息子たちに、皆にも、こんなのが教えている。それに仕事は、他人が与えない。自分で見つ

け出してしなさいと。そうすればいろんなアイデアも、知恵も湧き出てくるから。それが成功する秘訣だと教えている。今日も朝キハダ 80 疋買って兵庫県神戸新港市場に送ってきた。沿岸漁協では太刀魚買って、これは和歌山の魚市場に送ってきた。日本の中で、分らん市場ない。北は北海道から、各都道府県に送っている。他人が僕の真似はできない、下手に真似して皆つぶれているよ（笑）。

沖縄の海の資源は掘り起こせば兆円産業だ。僕はこれいろいろ調査し研究してきたけど、何と云ってもサンゴが一番。サンゴ船 1 隻で何 10 億円も揚げるから、サンゴは沖縄一の産業になる。だから、僕は仕事落ち着いたら、サンゴやる積りでいたから、網も準備している。店の倉庫に網隠してあるから（笑）。

また、若い頃は安里虎寿さんのサンゴ船に乗って一番ジョー（一番竿、稼ぎ頭の意）もした。サンゴ船は相当経験してきたし、サンゴがある所もいっぱい分る。

そしたら、与那国の先輩の慶田清稀さんから呼ばれた。慶田さんは僕らがサンゴ船辞めたあとも 1 人で頑張っていて、ずっとサンゴしていた。あの宝興丸で、尖閣列島行ったり、大九行ったり、あちこち行って、最後まで、サンゴしていた。もうサンゴの超ベテラン、慶田さんにサンゴ採らしたら敵う人はいない。沖縄のサンゴの神様だよ。

台湾船のサンゴ密漁 抗議したら 保安庁 24 時間パトロール

6,7 年前（2011 年頃か）よ、慶田兄さんに呼ばれて、開南の居酒屋で話した。

「成ちゃん、もう我慢できん。台湾船にサンゴ泥棒だけされて、頭にくる。ワッターもサンゴ船許可取って、一緒にサンゴ採ろう」と言うから、僕も大賛成さ。

「よし、許可もらいに行こう」と、県庁に一緒に行った。

そしたら、県水産課の担当は、「サンゴ網は環境問題あるから許可できん、潜水艇じゃないとダメ」と言うわけ。潜水艇だと、母船も必要だし、全部いれると、何億と、莫大な金掛かるし、海人にはとてもできるわけない。それで頭に来たから、「バカモン！！自分たちにサンゴ採らさんで、何で、台湾船にサンゴ盗らしているか。あれたちがサンゴ泥棒してからもう何 10 年なるよ。これ分っているか！」と怒鳴ったら、黙っているわけ。

台湾船が、尖閣列島にも、宮古の宝山ソネ、サンゴゾネにも来て、サンゴ泥棒していたのは、復帰前からだったが、1976 年頃には、これは大きな問題となっていた。当時の新聞見れば分る。僕らが県庁に文句言いに行ったのが 2011 年だから、76 年から数えると実に 35 年間も、放ったらかして、台湾中国にサンゴ泥棒させていた。

「こっちはサンゴ採って専門なんだから、すぐ許可与えて、サンゴ採らせば、税金も増えるし、沖縄は皆豊かになるんじゃないか。何で、県はサンゴ網許可与えんで、誰がもできない潜水艇、あれしか許可しないと言うか、これおかしいよ」と言ったが、それでも黙っている。「ワッター海人を殺して、台湾に皆財産は食われて、あとは沖縄は、日本はどうなるか分っているか！これ分かっているながら、あんたたちは政治家と繋がって、あんなことさせ

ているんじゃないか」。そしたら「何のことですか？」とやっと口開いた。

慶田さんが地図見せろ言うから、僕が海図拡げて説明した。こっちは宮古、これが東のサンゴゾネだ。沖縄の大事なサンゴを管理するため、今海上保安庁の船は、ここをどういうやり方やっているかと聞いた。真面目な顔して「宮古から朝8時出て、夕方5時に帰ってきます」と言うわけ(笑)。

「じゃ調べてくれ。夜になると20隻位の台湾サンゴ船が、宮古の宝山ソネから久米島の西大九で、サンゴ盗っている。これ知っておるか?」「まさか、ホントですか!」と言うからもう呆れた。こんな大事なことも県の担当は知らないわけよ。

「保安庁の船朝8時に出て、夕方5時にパトロールは引き揚げるさ。台湾船はこれ知って水平線で待っているよ。保安庁の船帰ったら、あそこで夜サンゴ網引いて、サンゴ盗って、夜明けたら皆逃げる、これ何10年も続いているんだよ、これ海人は皆知っているんだ」

「いや、絶対こんなことはないです」と言い張るから、「じゃー、僕が今言ったこと、嘘かほんとか、保安庁にすぐ確認しなさい。すぐ電話しなさい!」。

県のいい加減さに益々腹立った。「お前たちね、もしそんなことあったらどうするか、クビだよ。誰の税金でここに勤めているか、沖縄の財産をみすみす泥棒されてよ、お前たちあんまりだ、ちゃんと仕事しろ、バカモン!!」ともう怒鳴ってやった。

そしたら、1週間か、10日位して、県から電話があった。「西銘さん、大変申し訳ない。あなたが言う通りになっていました。これからは24時間パトロールします」と、これで終わりだよ。あと県は何の返事もくれん、もう情けない。僕らがサンゴ網で許可取ろうとした大事な問題は放ったらかしさ。でも、僕らが保安庁のバカげたやり方、朝8時出て5時に帰るのに抗議したから、24時間パトロールになった。これで、台湾船がサンゴ盗るのを追い払える。これだけでもよかった。

華僑グループ 絶えず情報集めている 小笠原の中国船も 関係!?

サンゴ泥棒している台湾船は、これ台湾と沖縄を行き来している華僑グループが関係していると思う。与那国、八重山は、戦前から台湾とは交流ある。僕が小さい頃から近所に台湾の人も住んでいた。また戦前台湾に住んでいて、戦後帰ってきた先輩たちも多かった。

僕らは台湾の人、華僑グループとは知り合い多いわけ。だけど皆心のいい、立派な人ばかりじゃない。泥棒みたいな人もいるわけよ(笑)。



宝山ソネに何10年前から台湾漁船が来てサンゴ泥棒していた。警備も手薄なため最近写真のように中国船も来てサンゴを盗りまくっている。(宮崎卓己2012)

それに気づいたのは、慶田さんが僕に言った。「成ちゃん、何某なんか信用したらダメよ。あれなんかサンゴ泥棒だよ、騙しにが来ているんだよ、気付けなさいよ。サンゴ泥棒して、皆蔵建っているよ」と。それで、兄さんの話から、サンゴ泥棒していた台湾船は、この華僑グループが、2,3名が関係していると分かった。沖縄と台湾を行き来して、いろんな情報取りながら、何10年も、沖縄でサンゴ泥棒して儲かっていたわけよ。

で、この華僑グループは、僕らが抗議して、保安庁が24時間パトロールするようになったら、今度は高知に行った。サンゴの本場は高知さ、サンゴ入札しに、サンゴ買う真似して、セリに行ったよ(笑)。僕は、バカじゃないからパッと感じたわけ。あそこの漁師に、サンゴ船どこ行か聞いて、どこで操業するか、その海図も手に入れて、漁場情報を取っていたはず。

あれたちがやること用意周到だよ。情報集めたら、あとは知らん顔して、行動に移して、日本のあっちこっちで、サンゴ泥棒するわけ。

何年前かな、2014年10月から12月にかけて、一斉に中国船が小笠原にサンゴ盗りに行った事件があったね。小笠原に200隻余りが押しかけて、サンゴ盗った。これテレビでニュースになって、日本中が大騒ぎだった。あれは、この華僑グループが裏で関係しているんじゃないか。

日本の法律ではサンゴ盗って捕まらない。おかしいよ、捕まっても、また簡単に釈放する。サンゴ泥棒しないのがバカだと思っているわけ、沖縄でその味しめて、また小笠原のサンゴを狙って行ったわけよ。金もあるから、中国の上海とか福建とかに行って、あそこは少しの金でできるから、金投資して、中国のサンゴ業者と組んで、綿密に連携取って、今度は小笠原に、サンゴ船を行かしたんじゃないか、僕はそう考えている。

日本政府はもっとしっかりすべきだ。台湾や中国の泥棒たちから舐められている。あの華僑グループの人も僕に言った。

「西銘さん、日本の法律は甘いです、甘いよ」。法改正で厳罰化したというが、それでも日本は甘いと侮られている。「そうだよ、ね、某さん。我々はゴム、パラオでも仕事すると、この領海侵犯は、国際法の中で、仕事しつつ、こっちに入ったら、コーストガードがすぐ拿捕しに来る。もう3千万、4千万の罰金だから。どう思う？ 某さん」

「日本の法律は叱って追い払うだけだからね、やらのバカだよ(笑)。悪いことしないとバカだよ(笑)」と僕にそんな言い方していた。



2014年小笠原近海に押し寄せ、日本のサンゴを泥棒した中国漁船。(「ウェブサイト」より)

甘すぎる政府の対応 損害受けるのは漁民 サンゴ網 早めに許可を

僕はずっと外国で仕事して来たから、外国が厳しいことよく分かる。すぐ拿捕されて、高い罰金払わされて、場合によって船没収されたり、刑務所に入れられたり、とても厳しい。

だけど、日本の法律は全然甘い。沖縄でも、小笠原でも、日本の財宝のサンゴがあれだけ盗まれている。これほんとは大変なことだけど、もうチンタラして、すぐに捕まえようともしない。捕まえても、賠償金も取らん、刑務所にも入れん。注意だけして、サンゴ泥棒をどうぞと帰すわけよ。日本政府はこんなだから、華僑グループも僕にはっきり言うわけ、「もう盗らないのがバカだから」と。外国にそこまで舐められても、全然厳しくしようとしんない。日本政府は外国にいい顔しておればいいさ。だけどワッター海人はどうなるの？

もう沖縄の、日本の財宝のサンゴを泥棒されて、損するのは皆海人なんだから。

日本政府の甘い対応で、保安庁の巡視船の不手際で、あれだけのワッター沖縄の財産のサンゴを盗まれたわけだから、この莫大な損害を、政府はちゃんと弁償してほしいよ。

今の日本の国家、何かおかしい。県もおかしい。県は潜水艇しか許可しないと言っている。これでやるとしたら何億もの莫大な金掛かるから、海人がサンゴはできない。前のようにサンゴ網でもできなくなったから、あんたなんかはワッターにサンゴ採らさんで、何で、中国、台湾船にこんなに知らん顔して盗らしている。これ政治家と裏で繋がっているんじゃないかと怒ったわけよ？ ほんとおかしいよ。潜水艇だけと言っているのは沖縄だけよ。

東京も、高知も、長崎、鹿児島も全部サンゴ網許可している。サンゴ先進県の高知は、昭和56年のサンゴ網船の隻数見ると、473隻もある。夫婦でやっている網船あるから、こんなにサンゴ盛んさ。この時沖縄はたった2隻、慶田清稀さんの宝豊丸と大城清一さんの福泉丸だ。そのあと潜水艇になったから沖縄はゼロ。高知は今もサンゴ網船300隻位操業していて、日本一サンゴが盛んだ。それから考えると、沖縄はサンゴ盛んにしようとしんないで、潜水艇、潜水艇とだけ言って、ワッター海人の足引っ張っておるよ。

県がサンゴ網を許可しない理由は海の底の環境を破壊する。魚の棲みか、ヤナを壊すからダメと言っているわけ。だけど、僕のやり方は、環境壊さん、ヤナ壊さんから、この点は心配ない。今までのサンゴ網だと、もう4、50分も網曳くさ、網流して、サンゴを網に引っ掛けて採る。そしたらもうヤナから何から全部壊す。僕はあんなことしないよ。網曳くことしない。潮の流れを見て、ただ網被せるだけ。被せたらすぐ網揚げるわけ。そしたらヤナ壊さない。サンゴを網曳いて、引っ掛けて採るんじゃない。ピン



潜水艇を使って八重山近海でサンゴ採取している。この業者は10数億円投資し倒産した。(編集部提供)

ポイントでサンゴを狙って、その上からサッと網被せて、すぐサッと垂直に揚げるわけ。

そうするとサンゴだけ上に揚げて採るから、下のヤナは絶対壊さん。僕はその方法をずっと研究して来た（笑）。これ企業秘密よ、今は教えるわけにいかん。また皆に真似されたら困るから（笑）。

船持って行って、これ 2,3 回か試してみたよ。このやり方でやれば、環境破壊することない。だから、県は潜水艇しか許可しない、そんなバカなこと言わんで、早くサンゴ網を許可してほしい。一緒に県に行った慶田兄さんは、あの後に倒れて、病院に入院しているから、あれっきり会ってない。一緒にサンゴ船やろうと言っていたのに、ほんと残念だ。

僕の夢 沖繩一番の宝はサンゴ これ自分たちで 採ること

僕は、いつでもできるように、サンゴ網は家の倉庫に置いてある。許可取ったらすぐできるから。それにサンゴ採れる所は、あっちこっち知っている。これ僕しか分からん所もある。与那国にも、八重山にもあるから。

丁度、サンゴ船辞めて、譜久山トシさんの冷蔵庫を見ていた時の話。時々ウチの親父と一緒に海行っていたよ。僕は船首にいて、親父は船尾で、一本釣りしていたら、サンゴの欠片が掛かって揚がって来た。親父が「これ何か?」「これがサンゴよ、こっちに宝物があるんだ」（笑）。僕は帰る前に、サンゴ掛けたこの場所当てた山、色々調べて、帰って来たわけ。

そして親父に、サンゴ網を持って来てから、あそこでサンゴ採ろうと言ったら、親父が怒った。「あそこはヤナが荒い、ヤナ（海底の珊瑚礁）に網引っ掛けて、これ壊して、魚いなくなったらどうするか」「いや違う、大丈夫、大丈夫夫だ」と言うけど親父は聞かんさ。

頑固だから（笑）。それで、あそこのサンゴ諦めて放つたらかしていたよ。

しばらくしたら慶田さんが、僕の家を訪ねて来た。「あんたがサンゴ掛けた所、ぜひ教えてほしい。サンゴ採れたら、必ずお礼やるよ」と言うけど、親父は猛反対だから教えるわけにいかんさ。そしたら 2,3 年して、他人に聞いた、西銘の親父がよく行場所、どこか?と。

で、あそこでサンゴ揚げて来たわけ。慶田さんがあんたにお礼しないといかんと来たよ。「あそこのサンゴすごかったよ、大きい枝も揚がった」と言うていた。「慶田兄さん、自分で探した場所だから、僕、お礼もらうことない」と断った。そのあと、一人前なって、自分で、あの場所に行って、もっとサンゴあるんじゃないかと魚探で調べたわけ。調べたら、確かに、ヤナ荒くて、山なったり、谷間なったり、それに潮が東に流れる時と、西に流れる時との交差する場所もある。サンゴ網は全部入らんさ。やっぱり、サンゴが相当残っている可



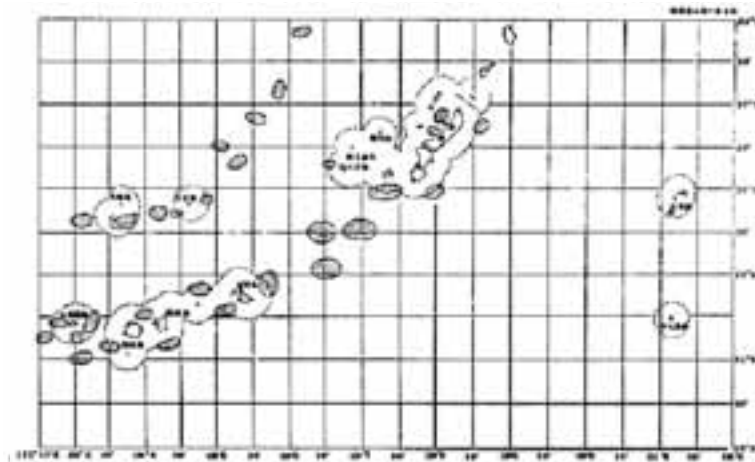
慶田清稀兄はサンゴ漁一筋の人生だった。彼の功績を讃え、愛船のペラがサンゴ店に飾られている。

能性がある（笑）。

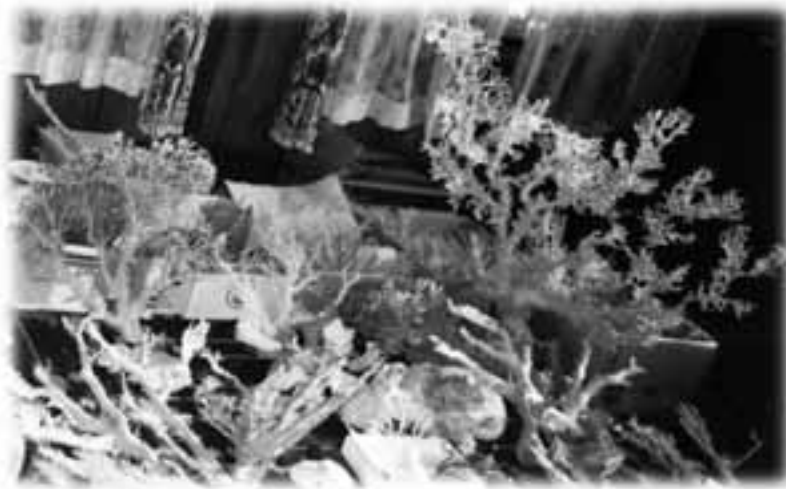
（海図指して） こっちにも、西表のこっちにもサンゴある。波照間の沖にも、こっちのサンゴは桃サンゴ、大きいよ。だけど網入れられない。地形が山のように、危ない。魚探で分かる、波も荒いから。久米島のこっちにも上等なサンゴある。もうこんなにある（笑）。

ここだったら1日に10キは採れる。伊平屋のこのソネの所にもサンゴある、いつか試してみようと考えている。あの台湾の華僑グループが、僕の所に何遍も来たよ。サンゴどこで採れるかも聞きたがっているわけさ。あれたちスパイよ。

沖縄にサンゴ泥棒して来ている、だから絶対教えない（笑）。



沖縄県サンゴ漁場図、沖縄本島・宮古間、宮古・石垣西表・与那国周辺、尖閣諸島に至るまで豊富な漁場がある。〈「わが国さんご漁業の現況 昭和57年」より〉



南西諸島・尖閣諸島はサンゴの宝庫。ここで採れた宝石サンゴの数々。

沖縄の海の宝といったらサンゴが絶対よ。だから、サンゴ船 1 隻で何 10 億円産業になるから、一番有望な沖縄の産業になるわけ。それに僕のアイデアの網被せる方法でやれば、ヤナ壊さんでも、サンゴは採れる。僕が船長して、船長 1 人いて、3 名位でもできる。

僕は 19 でサンゴ船の一番ジョーしたよ。あの時に 1 日に 100 疋は採った。

今サンゴ 100 疋と言ったら、すごいよ、億単位だから、もう沖縄一番の産業になる。

僕の夢は、沖縄の海の宝のサンゴを採ること。台湾中国に泥棒させないで、ワッター海人たちが自分たちでサンゴ採るわけ（笑）。そうすれば海人たちも儲かるし、沖縄もサンゴ産業で栄えるわけ。それにもう昔のように乱獲しないさ。

高知は計画的管理してサンゴ採っている。だから高知のサンゴ漁は 100 年余りも続いている、すごいよ。あそこを模範に、いろいろ研究しないといかん。

沖縄の海の宝のサンゴを、これサンゴ採る生産から、製品加工まで、いろいろ研究して、沖縄にサンゴ産業を育て上げること。これが僕の最終的な夢だから（笑）。

その夢を実現するには、国や県の理解と協力が必要です。それで、最後に国や県、政治家にお願いしたいのは、沖縄の海の宝のサンゴを中国や台湾に盗られないようにしっかりと守ってほしい。そして、サンゴが沖縄一の産業になるようワッター海人に協力してほしいです。

(了)



2014 年、小笠原沖で日本のサンゴを盗りまくっている中国サンゴ船。こんな許しがたいことが沖縄の海でも起こっているのだ。尻に火が点いてからしか動こうとしない国や政治家はあまりに情けない。日本の海の宝を勉強して、しっかりと守ってほしい。 「ウェブサイト」より

※参考資料 新聞報道 1 (1976年7月)

尖閣列島海域 台湾船の密漁活発化 ことしすでに63隻
領海侵犯 サンゴなど乱獲 効果のない取り締まり



(琉球新報 1976.7.10)

(一部抜粋) 魚釣島、南北小島周辺は台湾漁船による密漁が盛んに行われ、ことしになっての領海侵犯は七日までに六十三隻にのぼっている。これらの漁船は十トン前後との小さなものだが、早朝から夕方にかけて、マグロ、カツオを釣っていく。

……この日も「必ず現れる」という乗組員の話どおり、南小島から魚釣島周辺でパトロールしていると台湾漁船が発見された。漁船は十トンのサンゴ船で「香福漁」と船尾に書かれ、密漁に取りかかるため八人の乗組員が船尾で作業していた。「やえやま」からさっそく中国語で書いたタレ幕を下げて「この付近は日本の領海である」ことを警告。サンゴ船はOKのサインを出しながら台湾方面に消えた。十一管区の話によると「警告を出し、文書を手渡すが、いまのところ大きなトラブルはない。ただ、領海から出しても、また入って来る漁船もあり、イタチゴッコです」(薬王寺警備課長)といっている。

※参考資料 新聞報道 2 (1976年 11月)

サンゴに群がる台湾漁船 領海侵犯もへっちゃら
地元漁民も恐れる 巡視船といたちごっこ



(一部抜粋) 【宮古】沖縄近海はサンゴの宝庫。特に宮古島北東百二十キロの岩礁・宝山ソネ周辺は、良質の桃色サンゴが眠っている。この“宝物”をめざし、台湾からのサンゴ船団が出没、傍若無人の振る舞いで、地元採取船をけちらしている一と訴えが平良海上保安署に相次いでいる。巡視船「のぼる」退去命令でしぶしぶ操業を止め、いったん領海のそとに逃げだすが、巡視船が立ち去ると、すぐに引き返し荒っぽい方法でサンゴを採取している。また巡視船乗組員の話によると、宝山ソネを、台湾船だけで百隻以上が取り囲み、巡視船をあざ笑うかのように、競い合ってサンゴを海底から引き上げている光景をたびたび見かけるという。これら台湾船団は、尖閣列島の赤尾礁でサンゴを乱獲したと同一グループといわれ地元漁民に恐れられている。サンゴを求めてだんだん沖縄近海まで接近中の“船団”だが、現在のところ、平良海上保安署でも、明確な基準がなく、その取り締まりに頭を痛めているのが実情。

※参考資料 新聞報道3 (1978年3月)

台湾漁船 あと断たぬ領海侵犯 昨年7月から半年間で百三十隻も
宮古島北東沖 船団組んで操業 海上保安庁 空、海から監視強化



(沖繩タイムス 1978.3.12)

(一部抜粋) 台湾漁船による尖閣列島、宮古沖への領海侵犯が相つぎ第十一管区海上保安本部は空、海から監視を強化しているが、五十二年は、尖閣列島の魚釣島周辺で百三十二隻、領海を十二カ所とする領海法が施行された昨年七月から十二月の間に宮古島北東の「宝山ソネ」一帯で百三十隻ほどにのぼっており、今後増えると見ている。航空機が侵犯船を発見した場合は「領海侵犯しているので、ただちに領海外に退去せよ」と記入した文書を筒に入れ漁船の近くに落下させているが、中には知らんふりして操業を続ける漁船もいるという。しかし、巡視船の警備は「漁船内立入検査」があり、領海外へ逃げ出すようだ。巡視船による立ち入り検査では船長から二度と領海内に入らないという「宣約書」を取るほか「警告書」を手渡している。しかし、警告したにもかかわらず、再度、立検を受けるケースもあるという。警備には他管区の応援を求めているが、巡視船に侵犯船の取り締まりにも限度がありむづかしい。せいぜい一、二隻が限度で船団を組んだものになると、一隻を立検している間に残りの船は逃げてしまうという。近く沖縄へも一、〇〇〇の規模型巡視船も配属されるが、これを機会に今後の取り締まりを考えなくてはならない、と説明していた。

西里 健男 にしごと けんお (西里建築研究所)

1937年(昭和12年) 宮古島伊良部村に生まれる。81歳(2018年時)。

1950年宮古伊良部のかもめ丸が南小島でカツオ製造を行った。その時女工4名が同行している。彼女らに興味を惹かれ、どのような状況のもと渡島したのか知る術がなかった。たまたま西里ハルさんのご子息健男さんを知る機会を得たので、氏に当時の話を伺った。西里一家は台湾の蘇澳南方に疎開し、終戦後に宮古伊良部・佐良浜へ引き揚げてきた。



ハルさんは、かもめ丸が南小島でカツオ節製造始めると従妹知人を連れて4名で渡島したという。伊良部島は名にし負う漁業の島である。氏の話は、母ハルさんのことから伊良部島の懐かしい思い出へと進展した。往時は、海では実力本位で厳しかったが、陸(おか)では皆優しく親切であり、ユイマール精神で助け合っていた。氏は、これが貧しき時代を共に生き抜いてきた島の海人たちの奥深い智恵だったと語っている。

佐良浜の家並み 山の手に張り付く 海空見て いつも漁日和 観測

これ昔の佐良浜の家並み、山の手に張り付くように皆建っている。風はまともに当たるから台風の時なんか大変ですよ。昔は、瓦葺きは数えるしかない、茅葺が多かった。風に飛ばされないように茅をしっかりと縄で押さえてました(笑)。これ見るとコンクリートの家が多いね。これは南方カツオ漁で儲けて、皆建て替えたわけです(笑)。

よくまあ、あんな山の手、崖に張り付くようにして、住んでいるなと思います。曲がりくねったあの坂を利用しないと道もできないし、敷地も造れない。でも土地はないわけじゃない。あの山を越えると後ろはただっ広い、土地は相当ありますよ。あるけど、あそこに人はあんまりいない。

皆海の方の崖に張り付いて住んでいる。やっぱり漁業の集落として自然発生的にできた村だと思いますね。

ここは皆東北向きになってます。他の所は皆逆向きだけど、で、朝太陽が上がって来るのを見て、今日海に行ける、今日はいけな、今日はどういう道具を持って行けばいいと判断できる位置にある。



佐良浜の家並み、山の手に張り付くように建っている。朝太陽が上がって来る東北向きで、海空見観て、漁日和を判断する。〔「伊良部町漁業史」より〕

だから、どうしてもここは海をする人じゃないと住めない。ここからその日の内の波の立ち具合、風の吹き具合、雲の方向、それを全部読んで、ああ今日は漁に行く、今日は漁は休む、今日は島陰の方に行って、今日は左の方に行く、今日は右の方に行く決めてるわけです。

私の家はすぐ海から 30 メートル位しかない所です。朝早くからもう海人が出て来てワイワイ騒いでいました。海を見て、今日は漁に行ける、どこからの風が吹いて、波も何だからどこに行こうかと話していたかも知れません。とにかく大声で、海風吹いているから、声は持って行かれるから、うるさい位の大声です。佐良浜の男は声が大きいけど、女も大きかったですよ（笑）。一番鳥が鳴く頃には、佐良浜の海人は皆劇団みたいでしたよ。すぐ家の側を通過して行くんですよ。皆賑やかに騒いで行くもんだから、安眠妨害もう当然起きました（笑）。

この写真見ていると思ひ出しますね。あの当時は佐良浜は賑やかで、活気があって楽しかった。ほんと懐かしい光景です。

台湾疎開 蘇澳南方へ行った 突き船漁師 佐良浜の人 多かった

父が戦時中、南方へ行ったもんだから、私たちは昭和 19 年夏頃でしたかね、台湾に疎開したです。私が小学校 1 年生ですね、家族 6 名で行きました。

母と私と妹の 3 人、母は 4 人姉妹で、母が次女で、三女キヨ叔母とその叔母の息子と五女浪子叔母の 6 人で行った。一旦八重山に行って、今でも港の光景思ひ出します。夜だけでも、海なのか、陸なのか分らないほどすごい光でした。あれは軍艦のライトだったんだろうね。八重山から台湾にコースを取って行った。で、向こうに 1 年位いました。戦争終わったのが昭和 20 年 8 月 15 日ですから、すぐ台湾から引き揚げて来ました。

考えて見ると人生いろいろだなあと思う。ウチの伊良部の人たちは一緒に疎開したんです。それで皆と一緒に台北の方に行く予定でしたが、私たちの場合は、キヨ叔母の知り合いがスオーナンポー（蘇澳南方）にいたんですよ。それで、急遽、私たち家族 6 名だけ、そこに疎開先を変更したんです。北に行くべきのを南に行った。

北に行った人たちは皆マラリアに罹ってひどい目に遭ったりして、途中からスオーナンポーに来てましたよ。来た時には病気でしたね。看病しようにも薬もないし、医者もない、生命力で持ちこたえるしかなかったですよ。また避難している所は山の中、戦争の最中ですから、その橋の下に住まうか、山を切った所の洞穴や山小屋に住まうかです。それで大体 1 家族で 1 人は必ず失くしているんです。



現在の南方澳港、日本統治の頃はいつも突き船がいた。今も変わらず見られるようだ。（「ウェブサイト」より）

スオーナンポーはきれいな港町で、突き船がいっぱいいました。ここと沖縄の関り合いは

深いです。あの当時、結構沖繩から、宮古からも相当行ってますよ。佐良浜の人たちは殆ど向こうに行っている。漁師ですからね、皆向こうに行きよったんじゃないかな。カツオ船に乗れないのは、ナンポー（南方澳港）に行って突き船に乗る。

突き船をしていたのは皆宮古の人、佐良浜の人ですよ。だから向こうで船を持っていた人もいたです。他所に行って船を持つというのは当時は大変です。

（「伊良部漁業史」を開いて）これが終戦直後、台湾から帰って来て、尖閣へ突き船に行った人たちです。この人たちは皆ナンポーにいたはずですよ。伊波定一さん、仲間武雄さんはウチの親戚です。池村メガの長女の旦那さん。仲間忠勝さんは武雄さんと兄弟じゃないか。西銘繁さんは私の家の隣です。だから母たちもその関係でナンポーに行ったわけです。この佐久本正一さんは分かりません。野里太郎さん、山口金光さん、下地栄、山口銀朝さんは分かります。山口銀本と銀朝さんは兄弟かも知れない。伊良部光一さんも、皆佐良浜の先輩です。この人たちは今で言えば港の近くにいたんでしょうね。國吉守夫さんは叔父の池間孝之助さんがナンポーで、やはり突き船していたから、そこに世話なってカジキ漁して海人になったと、この本（「尖閣研究 2012 年」）に書いてありましたね。

10月空襲で 軒下逃げ回る チリーつない砂浜 兵隊の遺体漂着

（写真出して）これがナンポーの戦前の写真です。

この山があったの憶えてますよ。こっちはきれいな港でいつ行っても突き船がいましたね。突き棚が長いですよ。ここに立って銚子を持ってカジキ突くわけです（笑）。

ここの港とこの海岸の間はきれいな住宅街で、道路もきれいでした。今思い出していますが、ここには工場のようなものとか、周りに市場みたいなものがあった、カジキも皆ここに下していた気がするね。そこからほんの少し外に出たら、バスが通っていたから、このバスで皆外には出ていました。

僕らが住んでいた所ですか？ この港と海岸の間の住宅街だったから、この辺かな？ 漁師さんか、住民の家だったか憶えてないが、僕らはそこを借りてました。僕の田舎から、佐良浜から来た突き船の漁師さんたちも港近くだから、こっちに住んでいたんじゃないかな、住んでいた所はよく分かりません。



戦前の南方澳港。きれいな港で左方の海岸と港の間の住宅街に住んでいた。（「蘭陽大観，1933年」より）

で、空襲の時には、あそこの家はちょっと庇が出てました。だから、機銃に追われて、家の軒下を走りながら逃げ回ってました（笑）。丁度道路の軒下を通ると、弾に当たらないもんだから、これで助かったです。飛行機からあんなして機銃で追われたのは一度だけでした

ね。あの時、船は相当やられたようでした。

この港、住宅街の反対側には、ここは、この海岸は、チリ 1 つないきれいな砂浜でした。話聞いたら、そこは映画のロケにもなった場所だと言うてました。私は小学 2 年生ですから、休みには散歩で行ってよくそこで遊びました。この海岸の砂浜には、あの 10・10 空襲（昭和 19 年 10 月 12～14 日の台湾空襲の意）のあとには、兵隊さんの死体がいっぱいきれいに並べたみたいに流れてきてました。あれ見てびっくりしましたよ。

普通戦争は陸の方でやるのに、ここに何で、兵隊さんの死体が海岸に流れて来たのか、不思議でした。こっちの港には来なかったです。このきれいな海岸だけでしたね。

で、あとから分りました。丁度、あの時台湾沖でアメリカと大きな海戦があつて、日本の飛行機が沢山撃墜された。その時に海で亡くなった兵隊さんがこっちへ流れて来た。潮の流れに持ち運ばれて、港に入らんで、皆海岸の砂浜に、きれいに並べたように流れてきたわけです。あれ見た時は、とてもびっくりしました。その時の光景ははっきり憶えています。今でも忘れませんね。

小さな突き船で 宮古へ引き揚げる 大波にもまれて 地獄の思い

昭和 20 年 8 月 15 日が終戦です。あの当時は伊良部の人たちで突き船を持っていたのがいました。キヨ叔母の知人が突き船を持っていたから、その人の船に乗せてもらって宮古に帰って来た。あの当時引き揚げる船はないから、突き船に乗って引き揚げて来ました。

突き船は小さかったからそんなに乗れない。3 名で最初帰って来た。キヨ叔母と叔母の長男と私と 3 名で。で、母と妹、末っ子の浪子叔母は、その後からです。

あの時私たちは学校があるからと云うことでキヨ叔母が付き添いして最初に帰って来た。誰の突き船から帰って来たのか憶えてないです。私はただ乗せられて、突き船の名前は分からない。船員の数ですか？ これも憶えてない（笑）。小さな突き船だったからそんなにいなかったです。でも、大変な思いで帰って来た記憶だけはありますよ。子供でしたからとても怖かった（笑）。突き船は時化の時に出来ます。その時にカジキは上に浮いて来ますからね。だから、海が荒れてないと突きん棒はできませんから（笑）。カツオ船も荒い方ですが、突き船はもっとひどい、皆気性が荒いわけです。そういう人たちが周辺にいて、引き揚げ船来ないから俺たちが連れて行こうと連れて来たんでしよう。大時化だろうと構わずに急いで出港したんでしよう（笑）。

台湾は荒い海だし、もう船も小さいから、海に浮かべた木の葉みたいにもうこんなこんなに揺れましたよ。ポンと波の上に、上がったら全部見えるわけです。そしてすぐ谷間に落ちる。落ちたら地獄の底、もう全部何も見えない（笑）。それにまともには走らない、右行ったり左行ったり、もう 3 人共抱きあいながら、このまま船が沈んだらどうしようかこの恐怖しか憶えてません（笑）。

キヨ叔母は、数年前に 107 歳で亡くなっています。叔母の息子も亡くなった。3 名のうち生きているのは私だけです。叔母が元気な頃に、ちゃんと話を聞いておけばよかった。この

キヨ叔母は、かもめ丸の船主漢那吉郎さんの弟の国光さんに嫁いだんです。

かもめ丸は網元でも有名だったから、その関係で、あそこにおった伊波定一さんとか、仲間武雄さん、仲間忠勝さん、西銘繁さん、野里太郎さん、山口金光さん、下地栄さんとか、もう突き船は皆佐良浜の連中ですから、皆この叔母の知り合いだったはずですよ。

この人たちの誰に頼んで船に乗せてもらって帰って来たのか分かりません。国光さんも亡くなってますからね。あの当時どんな経緯で帰って来たのかは分かりません。あとで帰って来た浪子叔母、これは本村盛公さんの長男に嫁いでいます。もう 93 歳になりますが、佐良浜にいてまだ元気ですよ。彼女に聞いたらあの時のことは、少しは分かるかも知れません。

帰った時期ですか？ 終戦の何カ月後か、これもはっきり憶えてない（笑）。でもかなり早い時期でした。あの時引き揚げ船ないから、もう帰るのは自分らの能力、力ですよ。

佐良浜から相当の人が台湾に疎開してますからね、台北とかにも沢山行ってますから、そこからの引揚げは突き船だけでは間に合わないから、恐らく、かもめ丸も行って引き揚げさせてます。親戚が皆行っているからね、あそこで餓死する人もいたから、引き揚げ船なんか待ってられない、自分らで行って、連れて来たんじゃないかな。

私も確認みたいなものはないけど、佐良浜のカツオ船が、カツオ船といってもそんなに大きくない、板船ですから。行って連れて来よったです。これ私たちが帰って来たあとから、カツオ船のかもめ丸、長勝丸（船主仲間清光）に乗せて連れて来たのを憶えています。

私の記憶では、本家の叔父も行って連れて来ました。本家の西里成長叔父は、かもめ丸の機関長でしたから。

父 ダバオで戦死 南方出稼ぎ行った島人 戦争で多く亡くなる

父（西里貞雄）は海人していたです。私を産んで 2 歳にはシナ事変で、大陸の方に出征している。それで満期して帰って来た時に、私は小学校に上がる頃、その間に私と 8 つ違う妹が生まれている。

で、昭和 19 年に南洋に行く漁船が船団を組んで、静岡の焼津から来てました。

皇道産業焼津実践団の南方開発団です。あれは焼津の漁民が軍に漁船を徴用されて、生活に困って、残っている船で以て、南方に行って活路を見つけようと思ったらしいですね。その時沖繩にも、宮古にも寄ってます。今のカツオ船みたいな船、そんなに大きくなかったようです。2,3 隻位来ていたかな。父が乗った船の名前はセイ海丸でしたよ。船の名前だけは記憶にあります。あそこに父は漁労長か、何かで行ったらしい。

あと、その時に記憶に残っているのはミカンです。伊良部にはミカンはなかったから。ミカンを船にいっぱい積んで持って来たんですね。ダンプルに入れてあるもんだから、腐れる物もあったわけですよ。で、腐れたものは皆海に流したんでしょうね。そしたら海が皆真っ黄色になっていた。あの記憶だけは忘れない。



父・西里貞雄は南方に漁師で行き戦死した

この本（「尖閣研究 2012 年」）に、川満稔さんは 18 歳に行ってますね。国から募集があったから、これに応募して船が来たから乗って行ったとあります。父たちと一緒に行ったのかな。川満さんは助かったんですね。そして向こうでイギリス軍の捕虜になって、命からがら帰って来たわうです。

父の場合は向こうに 1 年間は無事でいたけど、そのあとダバオで敵機の攻撃に遭って亡くなりました。あの時一緒に行った人が相当死んでいます。皆船の上で仕事の最中だったんでしょうね。突然バラバラ機関銃受けたわけです。船のおモテで仕事に夢中になっていたから逃げ遅れたわけです。だけど、艙の方にいた飯炊きの 2 人は、前の方から機銃されてきたもんだから、危険だと思って、綱捕まえて、すぐ海に飛び込んだ。飛び込んで、敵機が去って行ったから船に上がって見たら、船のおモテにいた人たちは、皆やられて、死んでいたそうです。あの時に助かったのは飯炊きだった若者 2 人だけです。はやて海運の川平清社長のお父さんのブラマツさんと伊波という青年が生きて帰って来ましたよ。



皇道産業焼津実践団には沖縄から多く参加したが、詳細は今だに不明である。（「ウェブサイト」より）

で、父が戦死したと分かったのは、台湾から引き揚げて来てからです。母は大変悲しみました。戦死の報せがあってから 2 日か 3 日位、飯も食わないで、起きても来ないで、ずっと寝っぱなしで、独りで泣いていたと思います。

でも、母は精神的に強かったから、すぐ元気を取り戻して、何事もなかったように仕事に行きました。いつまでも悲しんでいられなかったんでしょう。

それに自分たちの周囲、どこ見ても戦争で亡くなった人がいました。

私たちの父のように、南方で亡くなった人が沢山いましたよ。

母の上の姉、長女のマツ叔母はトラック島で戦死しています。奥原栄良さん（奥原鯉工場創業者）が旦那さんでした。南洋のトラック島のカツオ工場で働いていました。マツ叔母は長男次男三男、長女の子供 4 人できて、それで一時沖縄に帰って来ていたんですよ。

それからまたトラックに行って、宮古に引き上げる時、栄良さんが見ている港の中で、アメリカ軍の爆撃に遭って、叔母と子供たち 4 人は一度に亡くしています。

もう目の前で、妻子がやられてますから大変なショックです。で、栄良さんは宮古に帰って来たら、私を見るだけでもう泣いていましたよ。長男は私と齡が一緒だったから、思い出したんでしょうね。その後再婚して、奥原カツオ工場やっている今の栄一さんが生まれたんです。栄一と彼の息子たちが家業を継いで、今は立派に成功しているからよかったです。

そうですね、母が尖閣行った時は栄良義兄さんが工場長していたようです（笑）。

戦禍から復興再建 海に助けられた 台湾上がり 突き船で 尖閣へ

戦争終わった後、どこもゼロから出発です。台湾から引き揚げて来たら、伊良部も空襲で相当やられてましたよ。沖縄本島だと皆飢えて、あの当時は米軍の軍作業なんかに行って、皆飢え凌いでいます。また、たまには戦果なんか上げたりして〈笑〉。宮古八重山には、米軍基地もなかったからそれがないです。その代り海の幸があったですよ。

カツオは幾らでもいるし、このカツオ以外の魚もいっぱいいました。マグロも、ミーバイ、グルクンもいっぱいいました。佐良浜ではマドインと言っているけど、グルクンを獲る時期とそれ以外のがあって、冬場にグルクンは大きくなっているから、アギヤーで獲って、平良辺りに出していましたね。グルクン以外の魚もいっぱいです。またサンゴ礁があるから、リーフの上に、海藻も、タコも、ナマコも、アサリ、サザエ類の貝類もいっぱい獲れました。

伊良部島は、この海の幸を幾らでも、獲って食べることができました。だから、軍作業行かなくても飯食って生きていけた〈笑〉。それに空襲の時にはそんなに海にも潜ってないし、今みたいな変な水も流されてない。洗剤もないわけだから、これは栄養源ですよ。

皆新鮮な栄養源もらって豊かな海に助けられたわけです〈笑〉。

何と言ってもカツオ漁があったからよかったです。あれが産業になって島の復興再建に大きく寄りました。カツオ節作って売ったら現金収入が入りますから、これが島を豊かにしました。

あの当時はほんの少し海出たら、幾らでもカツオは獲れましたから、大漁して来たら大盤まいといって、カツオをブツ切りにして船から投げると、これを籠を持って受けるわけですよ〈笑〉。子供の時、もうあれが楽しみで、この記憶まだあります。

また、カツオ船が入ると、浜でカツオの頭切って、はらわたとか取って、海にポンポン捨てますよね、これがごちそう、また最高の栄養ある食べ物です〈笑〉。あれ浜でポンポン切っては捨てて、もう海の中はこれでいっぱい、それ子供なんか皆拾いに行きましたが、私は母が宝得丸のカツオ工場にいたから、いつも母が持って来てました〈笑〉。

で、カツオ船は夏の時季、これ終わると、今度はカジキ突きですよ。ホースビットに突き台付けて、皆突き船で行きましたね。あの台湾のソーには佐良浜の突き船漁師が大勢いましたから、戦後引き揚げて来て、この突き船に乗ったわけです。

この本（「伊良部町漁業史」）に、台湾帰りで、尖閣諸島までカジキ突きに行った人たちが載ってます。伊波定一、仲間武雄、仲間忠勝、西銘繁、佐久本正一、野里太郎、山口金光、下地栄、山口銀朝、伊良部光一、この佐良浜の先輩たちは、ソーで私たちがいた近くに住



少し海出たらカツオは幾らでも獲れた。節製造は島の産業になり、皆を潤した。〈郷友会誌いらぶ〉より

んでいたかも分りませんね。母や叔母たちは知っていたかも分らんが。でも、この先輩たちが戦後台湾から引き揚げて来て、尖閣までカジキ突きに行って活躍したわけですね。

奥原隆治（元伊良部漁協組合長）さんね、彼もウチの母たちと一緒に、かもめ丸で尖閣に行ってます。母は製造工場、奥原隆治さんは船の方ですね。

奥原さんが書いてましたね。尖閣に行った時、台湾から突き船が来たら、皆伊良部の人たちだったと、で、やがて正月来るから、これはどここの家族に渡してから、それで線香を上げてほしいと、いろいろ荷物を頼まれた。あの人たちは台湾の船に乗ってますから島に上がれないわけです。不法上陸なるわけでしょうね。それでいろいろ頼まれたと。

だから引き揚げないで台湾に残った人も結構いたんでしょうね。

その時にお礼に餅を食べさせてもらったが、これがとても美味しかった、あの味忘れられないと（笑）。終戦直後は、伊良部には餅はなかったはずですから。台湾には幾らでも食べ物がありましたよ。お米もいっぱいありましたからね。餅米も、それで美味しい餅、ダイコン餅なんか作って食べさせたかも知れませんね（笑）。

かもめ丸 尖閣で カツオ大漁 南小島に魚下ろし 仮工場で節製造

そのあと、かもめ丸（船主漢那吉郎）が尖閣行って、カツオ大漁し、南小島に下ろして、そこで仮製造場造って、ナマリ節にして、持って来たんです。その時に母たちは女工で、奥原隆治さんたちは船員で行ってます。この本（「伊良部町漁業史」）にあります。この本は伊良部町漁業協同組合監修とあります。これは仲間井左六さんが奥原さんから話を聞いて、奥原さんが組合長していた時に作ったそうです。こう書いてます。

「佐良浜のカツオ船かもめ丸（漢那吉郎船主、池間武雄船長、西里成長機関長）は、同年（昭和二十五年）十一月ごろ尖閣諸島の南小島で仮カツオ製造工場を造り、カツオ漁に乗り出した。出漁した初日は一屯二百位の漁で同島に設置した仮製造工場では処理できたが、二日目はおよそ三屯を水揚げしたため同工場では処理することはできないとして設備が整った佐良浜の工場へ運び処理をした。だが、尖閣周辺海域の豊漁を見込んだ池間船長らは早速、製造に必要な鍋や煮かご、それにセイロなどを積み、さらに乗組員やカツオ製造工場につとめる男工、女工も雇い、同諸島の南小島に向けて出港した。しかし、操業を続けていくうちに、餌不足に見舞われたため操業を短期間に打ち切り、帰港したのである」（「伊良部町漁業史 仲間井左六著 平成 12 年 7 月刊」）



尖閣諸島、前方より南小島、北小島、魚釣島。カツオ節工場は南小島の後方岩山下の古賀村跡に設けた。
〔「ウェブサイト」より〕

尖閣諸島はカツオもよく獲れたから、明治の古賀さんの頃には魚釣島でカツオ工場もやっていたわけですね。かもめ丸の最初の機関長は西里成長叔父で、あと大浦金助さんに交替してますね。で、仲地行雄さんの話だと、かもめ丸が尖閣行って、カツオ大漁したと聞いて、漢那計徳さんの有徳丸も行ってますね。また八宝丸とか、他のカツオ船も何隻か行っているみたいです。この本に、かもめ丸の船員、男工、女工が皆載ってます。

船長：池間武雄（38） 機関長：大浦金助（40）
 船員：上里盛繁（28） 池間清一（37） 池間浩（27） 国吉孝助（27）
 名城豊吉（20） 大浦繁雄（19） 漢那栄（24） 前里一郎（43）
 奥原隆治（18） 上里 栄（20） 福里良平（不詳） 喜久川繁（15）
 工場長：奥原栄良（43）
 男工：川平金四郎（不詳） 池原勇吉（不詳） 仲地行雄（20） 糸満博文（19）
 吉浜アッピー（不詳） 平良寛雄（32） 国頭秀雄（37）
 女工：西里ハル（31） 仲松スズ（30） 浜川梅子（29） 佐久田ヨシ（16）

漢那国光さんは佐良浜在の工場へ交代し、奥原栄良さんが工場長なつたとあります。

栄良さんは亡くなった母の姉マツ叔母の旦那さん。国光さんはすぐ下の妹キヨ叔母の旦那さんだから、母の義兄義弟です。また、行ったメンバー見ると、殆ど佐良浜の人です。

親戚、隣近所の人もあるし、大体皆知った人です。この平良寛雄さんは知らないです、佐和田の人だから漁業しませんから、陸の上で働く工場の人ですね。



上段：左より かもめ丸初代工場長：漢那国光 同2代：奥原栄良 船員：奥原隆治 同：喜久川繁
 下段：左より かもめ丸船員：大浦繁雄 同：名城豊吉 男工：仲地行雄 有徳丸船主：漢那計徳

この大浦金助さんと繁雄さんは親子で、上の方に住んでいます。糸満さんと大浦繁雄さんは19で、奥原隆治さんは18で、喜久川さんは17歳で行ったんですね。あの時は20代と

言えば素晴らしい、17,8 だと皆 1 人前でしたよ (笑)。

昭和 25 年だから、あれから 70 年近く経ってますから、殆ど亡くなっています。

若い時行った人ならまだ元気かもしれませんが、糸満さんは 10 年前に亡くなった。奥原隆治さんはこの間まで元気でしたが亡くなりました。元気なのは仲地さん、大浦さん、名城さん位ですかね。仲地さんは長年在沖縄伊良部郷友会副会長されて、その後僕が会長しましたが郷友会のことでは大変世話になりました。

一番年長・母が 女工 4 名揃えて行く かもめ丸の義弟に 頼まれた？

昭和 20 年に台湾から引き揚げて来て、母は 5 年後に尖閣に行っています。

仲松スズさん、浜川梅子さん、佐久田ヨシさんたちと一緒に。

その時私は中学 1 年か、2 年ですね。当時のことを今思い出しています。

スズさんと母とは従姉同士になります。スズさんのお母さんとウチの母のお母さんとは姉妹です。浜川梅子さんも親戚、でも遠縁でした。2 つ齢下でしたから、いつも母と一緒にでした。子供さんが 2 人いて、生活は大変だから、いつも母が行く所にはおって、いつも一緒に働いていましたね。母がよく面倒見ていたようです。この佐久田さんとは、どんな関係だったか分かりません。隣近所に住んでました。齢も母の半分、16 で相当若いですから、もしかしたら生きていた可能性はありますね。

母は浜川健(網元で、元伊良部村長)さんの宝得丸のカツオ工場で働いていました。あの宝得丸の工場にはなかなか働けなかったです。相当仕事できないと(笑)。母はそこで削りもやるし、バラ抜きといって煮たカツオの骨をきれいに取る仕事なんかもやりました。

女工としては相当ベテランだったはずですよ。

かもめ丸は兄さんの漢那吉郎さんと弟の国光さんが仕切っていました。あの本見ると尖閣のカツオ工場は国光さんが工場長だったのか分らんけど、国光さんから「義姉さん、かもめ丸は、無人島で、カツオ節製造するから、行ってくれないか」。あの当時は尖閣と言わないです、皆無人島と言ってました。国光さんに、「あそこで、女工が必要だから、探して、一緒に無人島に行ってほしい」と頼まれた可能性がありますね。母が一番年上だし、それに宝得丸のベテラン女工ですから。でもこれ私の推測ですが、どうしても女工が必要だということ、お願いされたら、母の性格とし



西里キヨ、頼まれ女工引連れて行った。



古賀村跡の石積み、石垣を利用し、流木で柱を建て、天幕を被せ製造工場を急拵えた。(新納義馬 1970)

て断らないです。じゃ分かりましたと言って、浜川梅子さんは母の行く所は、どこにでも一緒に行っていましたから、あと従妹の仲松スズさんを誘って、隣近所に声掛けたら、佐久田ヨシさんも行きたいと言って。仲地さんのお話ですと給料はよかった。相当儲けたとあります。それで母たちは、倍もらえるなら、行こうと、それで4名一緒に行ったと思います。

水もない 過酷な環境 母たち 仕事できないと 2か月で帰る

でも、あそこへ、宮古でカツオ漁終える11月頃、冬行ったというから大変寒かったはずです。岩だらけの島、木もない、草しか生えてない、吹きさらしの島ですから。

製造工場といっても、石垣囲いしかないわけです。そこに流木を拾ってきて、それを柱にして、屋根は米軍の野戦用テントカバーを被せて、工場を建てた。壁もないから、北風はピューピュー吹いて寒かったはずです。

仲地さんがこう書いてます。「僕ら陸上班は多分8人位ですよ。女の人達が来たのは1回だけだからね。しばらくおって、すぐ帰ったけど。ああ、この女の人達、ホントに偉いなあ。この中の西里ハルさんねえ、彼女は4,5年前までは元気でいたんだけど」（「尖閣研究2012年」）とありますが、母は14,5年前に、84歳で亡くなりました。

あの南小島は水も湧かない、不便な所です。この写真にありますね。レンガで造った貯水タンクが洞窟の中であって、これ岩から滲み出した水溜めで、飲み水に使っていた。鳥のウンコが滲みていたから飲めるもんじゃない（笑）、でも、これ使って、このタンクでも間に合わなかったらしい。水がなかったら生活大変ですよ。男の人だといろいろできますから、毎日海の水で浴びてもいいけど、女はそうはいかんもんな（笑）。

仲地さんはこう書いてますね。「・・・スクールが来るんです、雨が。だから、海岸にはあっちこっちに水が溜まっている所があり・・・そこをきれいにタワシで洗っておいて・・・シートを被せて置く。スクールが来るのがすぐ分かるから、来たら、シートを取ってねえ。雨水をいっぱい溜めたら、また被せておく・・・なぜかと言うと、もう鳥の群れが来たら、1分でもう全部糞まみれですよ（笑）。もうペンキを塗った見たいに糞で全部白くなる。屋根なんかは、天幕張ると同時に真っ白になったから（笑）。最初はすごい所に来たなあ。これ大変だ、大変だ、逃げろ、逃げろと言ってねえ（笑）」（「尖閣研究2012年」）。

あそこはトリシマと呼ばれている位だから、もう鳥がいっぱいいて、朝夕飛び立つわけですよ、その時にもう糞が雨みたい降って、すごかったらしいですね。

だから、仕事している時なんか糞降ってきたら大変です。皆カバーの中に逃げ込んで。



湧水がないため、レンガで貯水タンクが造られていたが、鳥糞が滲み出し飲める水ではなかった。（仲間均 2002）

とても仕事どころじゃなかったはずですよ（笑）。

母は、責任をもって3名連れて行ったが、こんな環境じゃ仕事できない。

工場長の奥原栄良義兄さんに、早く帰りたいと願ったと思います。

「西里ハルさんの話によるとカツオを煮く薪は男工、女工が島の周囲に流れ着いた木や材木など拾い集めていたが島での滞在は約二ヵ月位だったという」（「伊良部町漁業史」、約2ヵ月位で帰って来た、これ奥原隆治さんが生前母から聞いて書いてます。

でも、あんな水もない不便な島で、雨水溜めて、また、流れて来た流木を拾って、それでカツオ煮いて、ナマリ節造った。母たち女工は2月間しかいなかったけど、仲地さんたち男工は大変だったと思いますよ。そういう意味では、離島の女たちだけでなく、男たちの生命力は強いですね。そういう厳しい時代を逞しく生き抜いてきたわけですから、ほんとすごいです。今の人にはそれができない。厳しさもないから、軟弱になったね（笑）。

尖閣から帰って来た 記憶少しある 母の教え 自分のこと 自分でやれ

尖閣から母が帰って来たのは憶えています。中学1年だったかな、船が入ったよ、帰って来たよと言った。その時は嬉しいかったですよ。だって、行っている間は誰もいない、妹と自分、時々叔母たちが来る位ですから、母が帰って来たらは嬉しかったです。

あの時は船が入ってきたら正月みたいに賑やかでしたよ。外から物が入って来るというのはないから、で、ほんの少しでも分け前があるというのは、これはもう幸せですよ。

アホウドリの肉、あの時はアホウドリとは知らない、何か鳥肉を持って来たのは少し憶えています。あれは当時は非常に貴重な蛋白源ですよ。まあ、あまり工場のあれだから分けてもらえなかったと思います、ほんの少しずつという記憶ですね。

尖閣に行ったということは知っていましたが、帰って来てから詳しい話をする暇なかないんです。次から次から夜業でした、母は休む暇なかったです。いつも家にいなかったですよ。親父は僕が産まれて、戦争に行って、帰って来て1年か2年いて、また南洋に行って亡くなってますから、どちらかと言えば母子家庭ですね。だけど、母親に育てられたという意識もないです。

結局、母が尖閣に行っている間も、帰って来た後も、母はいつも家にはいないわけですよ。昼夜ずっと働いていますから。

だから自分で考えて、その間は飯も食うし、洗濯もして、畑仕事もして、豚も養って、生活しないといかんわけです。自分のことは、何でも自分で考えてやらんといかんかった（笑）。



当時工場のあった後方の岩山はアホウドリ、カツオドリが多かったので、これを捕らえ、肉を土産に持ち帰ったようだ。写真はカツオドリの雛。〈池原貞雄 1979〉

また、あれですね、母はカツオ節を買っておいて、カツオ時季終わったら、今度は行商に行くわけですね、宮古近辺に。で、家で、カツオ節を干すのも、また取り入れるのも、自分らで、これ油断して雨に濡らしたり、傷つけたりしたら商品になりませんから（笑）。

母は、自分が次にやるべきもの、何をしなければいけないかは分るでしょう！ だから、あれをやれ、これをやれとは全く言いませんでした。家にいないわけだから言えるわけがない（笑）。自分でよく考えて、自分でやりなさいと言われました。

でも、ただやるんじゃない、自分が何をすべきか、今はこういう状態だから次はどうなるかと、これをちゃんと考えてやりなさい。だからカツオ節を煮る薪がない、田舎ですからあまりないですね。それで山に生えている木を取って使うわけです。だから、今山に植えておけば、3年後には大きくなっているから使えます。でも、冬の時季しかこれ植えられる、その時冬に行って、休みの時に植えるんです。だから、頑張りなさいと、今植えたらあと3年4年位には、カツオ節を煮る薪が必要だから、その時使えるよと、だから4年先とか5年先とか長期的に判断しなさいと、よく言っていました。

アハア、母のこの教えは、私が社会に出て、今のように自分で事業やっている時に、金が無くなったら、次に銀行との手配をどうしよう、あるいは知り合いにどう相談しよう考える時にも、とても勉強になりましたね（笑）。

また、母は自分のことは何でも自分でしなさいとしょっちゅう言いました。あの時は友達と一緒に遊びたいですよ、小学中学の腕白の頃だから、もう頭に来ましたね（笑）。だけど、今は非常に助かっています（笑）。風呂浴びても下着類は自分で洗って干してます。布団を敷くのも自分で、上げるのも自分でやっています（笑）。小さい時から当たり前にやってきましたから、これは非常によかったです。できたら、ほんと死ぬまでそうしたいです。誰かに面倒みられて死ぬんじゃなくて、死ぬまで自分でやりたいと思います。

母ですか、母は女だけの五人姉妹で、次女なんです。長女のマツ叔母は奥原栄良さんの嫁になって南洋行って亡くなった。小学4年の時お祖父さんが死んだもんだから、実家の西里家は次女の母が継いだんです。

それで玉寄家から婿養子を取って、それが親父なんです（笑）、

いろいろと母は相当苦勞してきたはずですよ。また、妹たちを散り散りにさせないで、まと



西里家四姉妹

右より前列：西里ハル（次女）、与座トヨ（四女）、
後列：本村浪子（五女）、漢那キヨ（三女）。

めて、皆いい結婚させていますから、たいしたもんです、並の女じゃない（笑）。

これが母と叔母たちの写真です。こっちが次女のキヨ叔母で、かもめ丸の漢那国光さんに嫁いで、こっちが末っ子の浪子叔母、アギヤーの親分本村盛公の長男盛一さんの嫁なっています。台湾と一緒に疎開したのはこの2人です。これが四女のトヨ叔母で、この人の旦那さんは与座武治さん。昔ドイツ商船が多良間と伊良部の間で遭難した時、これのお祖父さんが遭難した人たちをくり舟を漕いで水先案内して帰したそうです。この武治叔父さんも宝得丸に乗っておったです。

アギヤー 海の男の本領発揮 全員総出 勇壮な漁 壮観だった

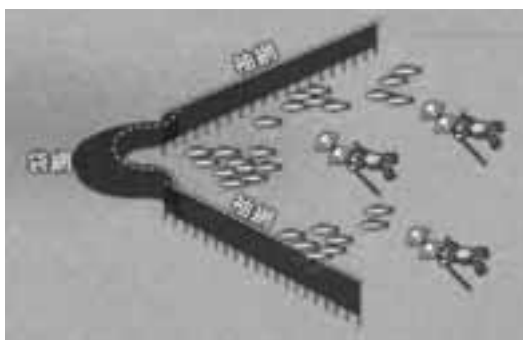
海の男たちの真骨頂はアギヤー（追い込み）ですね。グルクンなんか獲る場合、この時は、もう村中の男たちが、一斉に海に出て、皆一列になって泳いで、あの時は全部素潜りですよ、ミーカガン（水中眼鏡）付けて、網に魚を追い込んで、一網打尽に獲るわけです。これ勇壮で豪快な海の男たちの漁でした、ほんと壮観でしたね。

考えて見たら、このアギヤーというのは、伊良部の佐和田の浜にウヅガツ（魚垣）があるが、あれと原理は同じです。あの魚垣は、浅瀬に周囲を石で囲んでいるから、潮が満ちた時にそこに魚が入る。浜から沖に向かって狭くなっているから、潮が引いた時に出口に網を張っておけば、魚追っかけて行ったら逃げる所は出口だけ。そこに網を張っていたら、これに魚入るからこれ獲るわけです。

アギヤーの場合は、周囲の石垣が袖網、出口の張った網が袋網になる。この網の配置の仕方も魚垣と一緒にです。で、この魚垣は 360メートル位長さあります。これ位大きくないと魚があまり獲れないそうです。アギヤーもそれだけ大規模です。袖網も相当長さあった。よく憶えてないが何百メートルもあったと思う。だから、佐良浜のサバニは全部出ていましたから、これ全部出て一斉にアギヤーやる。で、沖でやるから、皆サバニ出して、あの時はエンジンなんか付いてないです。自分たちで漕いで行って、波が荒いと、その漁場まで漕いで行くのが大変ですよ（笑）、もう行くだけでもヘトヘト。で、着いたら、海底に網仕掛けて、皆で潜って、魚



佐和田の魚垣、浅瀬に周囲を石で囲み、満潮に入った魚を出口狭くして獲る。〈「伊良部町漁業史」より〉



アギヤーは海底に網を設置、全員で潜って網に追込み魚を獲る。魚垣と似た原理である。〈「ウェブサイト」より〉

を袖網の方へ行かして、最後に袋網に追い込んで、一気に魚を獲るわけです。

私の記憶では、アギヤーは糸満からですが、伊良部でやったのは漢那一門でしたね。漢那計徳さんが始めて、漢那加根さんから漢那勇さんと代々繋いで行って、あとはシキンマの本村盛公さんがアギヤーのボスをしてました。末っ子の浪子叔母は、この本村さんに嫁いで、そこの長男の盛一叔父の嫁になった。

私は、小学校5,6年から中学には殆んどアギヤーの手伝いに行きました。高校になったら夏休みの時だけ。盛公オジーがアギヤーの大將でした。漢那勇の一番弟子ですね。サバニの一番後ろの方に乗っていて、大声上げて、皆のサバニを指図していたです。これにはびっくりした、声も大きいしね(笑)。いや、私は潜らんです。盛公オジーの後ろに座って、指図するのをただ見てました(笑)。

海底地形 潮の流れ 風の方角 皆頭に入れていた

網はどこに下ろすか、追い込みはどこにするか、袋網はどこにするかというのは、海底地形と潮の流れ、風の方角見ながら、それを全部頭に入れてやらないと、網の配置もできないわけです。海の中は、岩があったり、何があったりで、海底地形をこれ憶えていても、またその時によって潮の流れもまた違うわけだから、そこをうまい具合に網を張らんといかんわけですね。これ大將が決めて、それぞれの責任者がやるわけです。だから、これ長い間の漁師の、海人の感性、勘ですね、どこに魚がいるというのは、その漁場の地形に自分らで1つ1つ名前を付けて、憶えていたんじゃないか、これは大変な頭だなあとと思った。

佐良浜のサバニですか？ 全部出ていたはずですよ。5,60艘いたんじゃないかね、4,50艘は間違いない。あの当時はサバニに7名8名、多い時は10名位乗っていました。認められたサバニだけが網を持っているんですよ。あとは魚脅して追いかけて行く連中を乗せたサバニです。網全部は配置したら、その場所場所にサバニを漕いで行って、そこに人を、次々下ろして行くわけです。で、どこから魚を追って行くか分かりますから、皆潜って、スルシカー(脅し棒)、あれ棒の下の方にアダンの葉っぱを付けて下に石の錘(おもり)している。あれで脅かしながら、皆一列になって、網の方へ魚追いかけていますよ。ところがよく気を付けないと、岩に引っ掛かってこれが取れない。珊瑚礁ですから、引っ掛かったらもうあれが抜けないですよ、その時に後ろに寄って取らんといかんけど、それで遅れたら、そこにすき間ができて、そこから魚逃げるわけです(笑)。

これ大將は自分で舵も取りながら、サバニの上から見てね、魚が逃げて行くのも分かる(笑)。またあっちがおかしい、あっちがどうだよというわけです。これ



今の潜水具を使ったアギヤー、グルクンを網に追込み船に揚げている、少人数で可能。「伊良部町漁業史」より

すごいですよね。

このアギヤーで、グルクンなんか7,8トから10何トも揚げるわけです。これを平良に持って行って売ったらいい儲けです。これ売って、儲けたお金を計算して、皆に配当します。これいい現金収入です。それに島あるサバニを一斉に動員してやったら、皆に収入ありますから、これで皆助かったはずですよ。

もうこんな島中のサバニを動員したアギヤーは、今どこもやってないです。

今伊良部とかでやっているアギヤーは皆船はエンジン付いているから仕事も早くできる。また潜る人も素潜りじゃない。ボンベ付けてやっているから、昔は魚何名かで追いかけたものを今は1人でやってます。結局、1人で10人分の仕事ができるわけです。これだとあの時みたいにサバニも、人間も、あんな大勢はいらない。今は少人数で、10名位でもアギヤーやっていますね。

海では 実力本位 陸では 優しかった 1つあれば 分けて食べた

僕は、実際海人で飯を食っていたわけではないが、雰囲気は分かりますよ。

海の男たちは実力の世界ですから、仕事は厳しかったです。

アギヤーでも、潜って息の長い人は働き者、短い人はそんなに金ももらえない。

もう海の仕事は実力本位ですから、また、そうしないとやっていけない。

カツオ船宝得丸という非常に大漁船があって、またこの船は非常に船員がまたしっかりしていて、その船に乗れる人はよっぽど優秀じゃないと乗れなかったです。だから、これには皆乗りたいけど、なかなか乗れない、優秀な人ばかり乗るもんだから大漁するんですね。怠け者の船は大漁しないですね。頑張る人じゃないと乗れない。

宝得丸はカツオ工場もありました。ウチの母は浜川さんのお母さんと親しかった。母はそれでこのカツオ工場、ずっと働いていました。もう忙しい所だから毎日夜業でした。

宝得丸の船に乗れる、またあそこカツオ工場で仕事できるのはサラブレッドでしたよ。

私の義父長崎登も宝得丸で船長をしました。で、池間に昇山丸という船があって、これも浜川さんの関係の船だったのか、長崎さんはこの昇山丸船を譲り受けたんです。宝得丸に乗っていた人たちが何名か、この船に乗り移ったですよ。これもまた大漁船でした。もう立派な伝統継いで皆真面目で頑張っているから、機関部から甲板から全部優秀な人でした。私の西里本家の西里拓、文雄兄弟も、この宝得丸に乗ってました。今2人はマグロ船持って、グアム、パラオに行っていて頑張ってます。やっぱり、若い頃は、大漁船に乗って、そこで真面目に頑張って、実力発揮して、こうして伸びて行ったわけですよ（笑乗って）。

結局、海の仕事は実力主義、海では実力本位ですよ。でも、陸（おか）ではそうじゃない。1つのものあったら、これを分けて食べる。皆心優しくて、とても親切でしたね。

あの当時は皆貧乏で生活は大変でした。家は殆ど茅葺です、中にはチンヌブの壁に、寝る所と食事する所は板張りで、あとは皆土間。そんな家に住んでいる人もいましたよ。

ああいう所にも、皆非常に心がやさしく、皆親切なんです。またそうじゃないと生き

られないし、1つあったらそれを分けて食べる。海から獲って来たものを分けて食べる。畑から獲ってきたら野菜でも、芋でも分けて食べる。分けて上げたらいい、もう自分は食べられない。また次あるかどうか分かりませんが、でも1つあったら、これを皆で分けて食べる。早く言えばユイマール精神です、陸ではこれで助け合って暮らしていました。

佐良浜みたいな貧しい離島田舎では、こんなにして助け合っていないと、皆生きていけない。またそうじゃないと生きられない。これ佐良浜の海人たちの大きな智恵です。



海の神に感謝する願いは欠かせない。大漁と航海安全を願うインヌカンニガイは女たちの仕事だ。(平良孝七撮影)

アギヤーのボスの本村盛公さんは皆引き連れて行くもんだから、あそこの家ではもう一番鳥が鳴く頃にはご飯を炊いています。昔は芋ですから、夜明け前にはもう芋炊いているわけ。皆寝静まって真っ暗な中、その家だけは灯が点いている。これ遠くからでもすぐ分かりますよ。だから困っている人は皆ここに助けに来てくれと訪ねて来たそうです。それで皆に芋食べてもらうわけだから、いつも大目に炊いていたそうです。

私の親父も、軍隊から帰って来てしばらくは漁師、アギヤーをしていました。その時に海から獲って来た魚を皆に配るわけですよ。確か私は5つか6つ、小学校上がる前でしたがこんな思い出があります(笑)。親父は忙しかったのか、これ配って来いと1か所を私に頼んだです。それが山を越えて独りで行かんとならん、これはもう大変です。

途中に岩があったり、木が鬱蒼としてましたよ。そこに行くと昼間でも鳥がわんさいて、人が通ると一斉に音立てて飛び立つ、その音がとても怖かったです(笑)。それで、怖いから行くの嫌だと言ったら、親父にビンタを張られました。その時に叩かれたのが忘れられなく、なぜか、結婚した後もトラウマみたいにずっと残ってましたね。

母も、もの1つあれば、これ分けて食べてました。母の知り合いで、この人は旦那さんに先立たれたのか、子供さん2人いて、親戚の所に厄介になっていたようです。それで食事の時間になると、僕らが丁度終わった頃に、必ず家に来てましたね。

あの当時ごはんはあまりないですから、母はいつも少し食べ残して置いていて、来たら食べてもらうといつも準備してました。私が中学高校まではそうしててましたよ。

伊良部海人魂 発揮 再び南方へ 空前のカツオ景気に 沸く

戦前は伊良部の海人はトラックとか、ボルネオとか南方にカツオ漁で行っていた。

私の父もダバオに行って戦死しました。戦後もまた南方カツオ漁が盛んになりました。

昭和50年頃にはすごかった。大きな会社があるね、大洋漁業とか、極洋水産、これはよ

く分らんがスターキスト、そういう所と契約してソロモンとか、パラオ、キャビアン、フィジー、それからラバウル、スターキストに、船出して、南方各地でカツオ獲ってました。

だから、募集があれば、誘われれば、もう喜び勇んで、皆行ったわけですよ（笑）。

この本（「1万8千5百キロの旅—南洋鯉漁業視察報告書」）は、昭和52年に、川満昭吉村長さんたちが現地視察した時のものです。これ見ると、ソロモン・ツラギ基地には、漢那国光さんの第八漁明丸他6隻、ノロ基地には浜川健さんの漁徳丸他6隻がいます。またパラオのマラカル基地には漢那吉郎さんの第八八王丸他4隻が、キャビアン基地には奥原隆治さんの第十八蛭子丸他4隻がいます。またラバウル基地は前泊力さんの安德丸他9隻がいて、スターキストのマヌク基地、ここには久高正吉さんの第十五宮丸他4隻がいます。



南方漁業基地に居並び、出番を待つ佐良浜のカツオ船の雄姿。これらが島に空前のカツオ景気をもたらした。（仲間明典 1977）

この時でも、これだけ伊良部の船が行ってます。海人も大勢行って、頑張ってます。

南方カツオ漁全体では、優に5百、6百名余り行って、活躍したはずですよ。

で、会社とどういう契約して魚を獲っていたか分かりませんが、お金は相当儲かっています。少ない月で3百ドル、多い月で5百ドルを家族に送金していたと言いますから、これ大変な額です。当時千ドルもあれば家建ちます。だから、佐良浜の家は、あの時の儲けで皆コンクリートに替わりましたね（笑）。とにかくものすごく稼いだ。これが島に落ちたわけだから、空前のカツオ景気に沸いた。

あの時はもうビールで足を洗ったという話までありましたから（笑）。この南方カツオ漁時代が、伊良部の海人魂が存分に発揮された時代ですね。

川満村長さんはこう書いてます。「南洋は私たちのもの・佐良浜漁夫のものである。ツラギとノロにソロモン・タイヨウが



ソロモンのツラギとノロ基地には、ソロモン政府と大洋漁業が合弁で設立した缶詰工場、カツオ節加工場もある。（仲間明典 1977）

25億円を投資してつくった鯉漁業基地も、私たちがそこで働かなければ何もならない。この投資は私たちのためにしたものであり、私たちがここを基地として漁業をしてはじめて機能する。また、今後パプア・ニューギニアの各基地が建設されても、これはすべて佐良浜漁夫のものなのだ。南洋の海はフィジーからスマトラまで一つであり、そこにいる鯉は私た

ちが獲らなければ誰にも獲れない。本土漁船がラバウル、キャビアンまで来て 3 日持たないことをみても、南洋の鰹漁業は佐良浜漁夫以外にはできないという誇りと自信をもつ。」
 (「1 万 8 千 5 百キロの旅」昭和 52 年 8 月)

ところが、竿でカツオ釣っていたのに、船で大きな網引っ張って巻いてカツオ獲る、巻き網船が出て来たから大きな大打撃を受けました。それに缶詰もダブついて、アメリカのスターキストは、パラオとパプア・ニューギニア海域から撤退したそうです。あれやこれやあったもんだから、昭和 59 年には沖縄海外漁業ができたんです。これは伊良部町と沖縄県と民間で第三セクターの会社です。それで自分たちで出漁するなどして、勢いを盛り返そうと頑張っていましたよ。だけど、その時にはもう世界的経済不況ですね、魚は価格低迷し、燃料代の高騰、海外での操業トラブルや入漁料の問題もあって、難しくなったんじゃないかね。

結局平成 12 年というから 2000 年ですね。この年に出漁を中止し、南方カツオ漁は終わりました。

海人ならん！と言われ 陸の仕事に 母 結婚前 12,3 歳で 決心

私ですか、私は海人じゃない、海人はならんと母に言われ、陸（おか）の仕事してきたです（笑）。ウチの母の親父も叔父さんたちは皆海の仕事しているわけです。もう冬の海は寒いですよね。昔は今みたいに雨合羽じゃない、スニヤという浴衣みたいなもの着て海にいていた。だから非常に頑健な身体だったけど、海から帰って来たら、寒くて風も強い、舟から荷物を下ろすこともできないほど、ガタガタ震えていたそうです。だから親父たちが帰る頃にはお湯を沸かして待っていて、身体を拭いて、それから荷物下ろしていたそうです。

漁場も池間島の上方の八重干瀬辺りで遠い。それに当時はサバニにエンジンないから漕いで行く、もう波が荒くて、風ある時はどんな体力のある人でも疲労困憊して大変だったらしい。母はそれを見ているもんだから、自分の子供には海の仕事は絶対させないという肚を決めていたらしい。これ結婚しない前の 12,3 歳の時から決めていたと言うから、すごい、なかなかできることじゃない（笑）。だから、私が水産高校に願書を出すと云ったら、水産高校なら行かさん、それ以外ならいいと言ったわけ（笑）。

私は水産高校に行きたかった。母が一人で働いているから、早めにアギヤーにでもやって、カツオ船にも乗って、そのためには水産をやった方が一番手取り早い。そしたら家の加勢ができるから。これをしたいと言ったら、これやるな、水産以外ならいいと言うから、意味が分からない。ウチの田舎で、高校行くならば皆水産で、普通高校に行くのは 1 人か 2 人、同級生は殆んど水産に行った。それに海人なのに海の仕事するなというのは考えられない。陸（おか）の仕事しなさいと言ったら農業しかない。しかし農業ではまた飯は食えない。だから西里本家の曾祖父みたいに大工の仕事させたいと思っていたんじゃないかな。西里家の先祖はどこから流れて来たか分かりませんよ、伊良部に来た時は大工仕事をしていたそうです。で、大工仕事がない時は海に行ったりして海人だったが、大工仕事で相当儲けた

みたい。本家は屋敷も大きく、金持ちでした。屋敷隅には、壺屋焼きの口の大きな水甕があるね、あれが10個を並べてあった。だけど、ウチのお祖父さんは、次男だから分家独立して貧乏だった（笑）。私も曾祖父に似たのか、大工仕事が好きでしたよ。

学校から帰って来たらいつもカツオ船の模型とか、くり舟の模型作りしていましたね。勉強するより物作りが楽しかった。机も高校大学で買ったためしない、全部自分で造りました。私はこちらから、友達があっちから勉強できるような机作って、ランプを真ん中に置いて、両方に光当たるようにしました。また、モーターボートを作って、それに電池を2つセットして、それにプロペラ、これは缶詰の蓋、あれを切って、ペラ作って、電池入れると動くわけ、それを学校の池で走らしたら、物理賞くれてありましたよ。それが物理賞に値したか分からないが、そういうことばかりしていました。

高校では建築の勉強はないけれども図学があるわけですね、これが好きで、この関係の進路を調べて見たら、内地に建築専門の大学があると知って、そこに挑戦をしたんです。ウチの高校から建築に行ったのは私1人です。225名の生徒から私だけです。

だから伊良部島から内地の大学行って建築を勉強して、一級建築士を取ったのは私1人です。あの当時は沖縄でも一級建築士は少なかったです。私の構造建築専門は全くいなかった。だから那覇市民会館、あそこにあるパームヒルズも私の方でやりました。

これが伊良部港に建っていた伊良部離島振興センターです。これ瀬戸内海の島にあったもんだから、川満昭吉町長と一緒に見てきて、これいい、伊良部にも造ろうと、これを設計したわけです。

これが沖縄で離島振興センターで一番最初だった。そのあとあちこちでできた。これがモデルになったんです。考えて見れば、私はいっぱいモデルをやってきました。これ（那覇市泊のメゾン高倉マンション）もそうです。私の事務所があるこの建物、これが沖縄でホテル的なマンションの第一号です。また、これ造っている時に法律が変わってしまった。その法律を先取りして造ったのもこれです、先取り第一号でもありますよ（笑）。

あとは、こんな建築の話になりますから、私の話はこれで終わりにしましょう。

長々と思いつくまま喋って、母の話からあっちこちに飛んでしまったけど、何か役立つものがありましたか？ あれば嬉しいです（笑）。・・・ご苦労さんでした。（了）



右：伊良部町漁協、左：伊良部町離島振興センター建物、沖縄第一号でモデルとなった。〈「伊良部町漁業史」より〉

奥田良 正光 おくだら まさみつ (元与那城村村長)

1929年(昭和4年) 沖縄本島与那城村平安座島に生まれる。89歳(2018年時)。

1945年沖縄工業学校、沖縄外語学学校を卒え、海運会社共進組、学校教員など勤める。のち、与那城村(現うるま市)農協組合長、与那城村村長、県市長村職員年金連盟会長を歴任し、(株)サンプロジェクト代表取締役を経て、現在、悠々自適の隠居生活を楽しむ。



氏に、1947,8年頃、父親が経営する共進組が、宮崎から来た密航船を買取り、船員を連れだって尖閣諸島にカジキ獲りに行き、那覇から尖閣に3回ほど突ん棒を試みた話を伺った。共進組は戦後沖縄で海運業第一号、その第一号が尖閣にカジキ突きに行った話は興味深かった。また、戦後沖縄の海運業草創期のできごとにも話は及んだ。氏は、終戦直後の米軍統治下における稀有な歴史の体験者であり、貴重な証言者である。

密航船 買いとして 尖閣へ 魚獲りに行った

— お父様が、終戦直後に、尖閣諸島に魚を獲りに行かれていたと聞いて驚きました。しかも、ここ那覇からですか(笑)、このお話を聞かせて下さい。

奥田良: (笑)、恐らくね、1948年から49年位だったと思います。あの頃は施政権は全くアメリカでしたからね、戦争で船がやられて間もない頃ですよ。あとで1950年かな、ガリオア資金というのが出ましたね、それで沖縄や内地の方で船造って、戦後、初めて木造船が入ってきました。うちもガリオア資金で船、3艘造りました。その後、1950年1月にアメリカさんの肝いりで琉球海運社(社長桃原茂太)ができますね。内地との貿易ができるようになって、琉球海運が、鹿児島、大阪神戸、東京航路をやりますね。これはその前の話なんですよ。



1950年代の安謝港。遠浅の海で、船は沖合に係留して舢舨で人や荷を渡していた。(那覇市歴史博物館)

うちの父は、金武で戦後最初に船造って、それと、あとでアメリカのLSTという上陸用舟艇を払い下げしてもらって、共進組という会社造って、それで運送業、海運業をしていたんです。あの頃は那覇港は使えませんでした。

だから、安謝港も沖合いです。未だ浚渫していませんから、沖合に係留して、そして渡し船で、荷物や人を渡していた時分です。船が7,8艘あって、奄美大島とか、宮古八重山に船を出していました。

1948年か49年頃、その頃時に、内地から17,8ト位の50馬力の脚の速い船を買ってきましたね。それで尖閣に、カジキ獲りに行ったんですよ。

— 終戦直後に、内地からわざわざ船を買って、尖閣にカジキ獲りに行ったのは珍しいです。お父さんは冒険的ですね。平安座（へんざ）島で漁業をなさっていたのですか。

奥田良：いや、父は海運業をずっと戦前からやっていました。戦前ウチは島納丸という船2艘持って、軍に徴用されてパァになりましたけど。父は海には非常に、何か魅力があったみたいですね。戦後初めて沖縄で海運業したのは父が初めてだったと思います。

海運業なのに、尖閣にカジキを獲りに行くきっかけですか。話によりますと、尖閣は大変、所謂漁場としては素晴らしいんだと、だから、尖閣に漁船を出して、これも1つの事業としてできないかということだったと思います。尖閣は魚も豊富だし、やってみようということでした。けど、3航海位で終わったからね。なぜかと言うと採算合わんから、それですぐ辞めたんです（笑）。

平安座島 戦前は海運業の拠点 海外出稼ぎと共に 島経済支える

— 平安座は戦前から山原（ヤンバル）船の拠点で、海運業が盛んですね。それに戦前は南方へも、豪州木曜島にも真珠採りに行ってます。また戦後、サバ釣船で尖閣行った船員には平安座出身も多くいたようです。あの琉水丸の船長された石川文太郎さんもそうですね。

奥田良：石川文太郎は、あれは尖閣にサバ釣りに行ったあと、今度はカツオ漁を教えに、ハワイに、皆連れて行った。あれからずっとハワイ暮らし、こっちには家族も誰もいませんよ。

平安座の人は、戦前は、木曜島にも真珠採りに沢山行っている。木曜島だけじゃない。サイパン、パラオ、トラックとかの南洋、ハワイや北米、南米とか、海外はもうあっちこっちに行ってます。こんな小さい島に人口3千人、4千人も住んでいて、農地はないわけですよ。

ハワイ、キューバには、キビ刈、ハワイには千人行っているが、皆キビ刈の日銭労働者ですよ。シンガポール、サイパン、パラオとか南洋群島に行ったのは漁業で。でも、自分たちが船持っていたわけでない、皆漁民として使われたんです。フィリピンは麻栽培、けどそれもうまくいわずに海に下りました。結論を言うと食うものがなかった。島で生きるのが大変だった。だから次男三男は、海外に出なければいけない。

平安座は半農半漁と海運業です。昔から島の経済は4本柱で成り立っていた。1本目は女性が農業する。これはヤーヌクチマカナイ（家の口賄い）。2本目は男の人は漁業をする。海に行く。魚を獲って、これを売って金稼ぐ。こんな話もありますよ。遠くの具志川まで魚売りにいったら、これ臭くて食べられないと、もう傷んでいるから買い手がいないんですよ。



平安座島は中部うるま市（旧与那城村）、中城湾上に連なる4つ島の1つで、本島とは海中道路で結ばれている。

魚売るのはあんなこんなで大変だったらしい（笑）、これが2つ目の柱。

3つ目は山原（沖縄本島国頭地方）は、今は道路があるからいいんです。昔は道路はない。陸の孤島ですよ。馬車がようやく通る位。だから、向こうから薪や木材を運んだり、こっちから生活物資を持っていく、所謂海運業ですね。平安座は、山原船（帆船型の輸送船）を60艘以上持ってました。この海運業が島を支えていたわけです。

あと4番目の柱は、海外送金です。木曜島行ったり、ブラジル、アルゼンチン、ハワイ行った人たちからの海外送金です。ですから、この島は一番カーラヤー（赤瓦の家、経済的裕福を象徴する家）が多かった。平安座のカーラヤーが多かったのは海外送金のお蔭です。あの頃は島は皆カーラヤーですよ。（笑）。

山原船 沖縄各地へ 遠くは、宮古・八重山 奄美大島まで

— 平安座は山原船は昔から有名ですね。山原船のことを平安座船と呼んでましたから。王府時代の進貢船の船頭も、平安座から多く輩出したと聞いてます。

奥田良：そうです。琉球王国時代、中国と交易した進貢船、マーラン（馬覧）船ですか、これを操る船頭も平安座でした。

戦前平安座は、山原船を60艘以上は持っていた。恐らく100艘位あったかも知れない。これに国頭山原から薪や木炭、材木とかを持ってくる。持ってきたら、与那原や糸満や嘉手納、那覇辺りに下ろして、当時の交易は所謂物々交換ですよ。ソーメンや缶詰とかの食料品、茶碗とかマッチなどの日用雑貨を買って、また、それ積んで、山原に行って、タムン（薪木）と材木、炭や米とかと交換するんです。とにかく昔は道路はない、海から行くしかない。

だから、沖縄（本島）では、当時の輸送手段はこの山原船が唯一です。

これは、沖縄だけじゃない、遠くは宮古・八重山の先島諸島や奄美諸島まで行きましたよ。結局、山原船は、国頭山原、中・南部の泡瀬、与那原、糸満、那覇、そして宮古・八重山、与論、徳之島、奄美大島の各港を結んだ交易の手段です。琉球列島の唯一の海上輸送手段、海運ですよ。

当時これを平安座の山原船が担っていたわけです。

だから、この山原船が壊れたら修理し、廃船したら新造せんといかんから。島にはドック場、造船場もあったし、平安座の船大工、カンジャーヤー（鍛冶屋）と言えばもう皆優秀でしたね。今は船大工の越来文治、あれの息子と孫が山原船を造っている。もうあの位しか残っていない。もう昔の平安座の山原船は皆失くなって、一艘も見えませんよ（笑）。



停泊中の山原船、平安座は100艘ほど擁し、海運の根拠地だった。（「望郷沖縄5」より）

私の所ですか？　ウチは祖父の時代は山原船持っていた。最初はサバニ 3 艘繋いだターサン船でやっていたが、あとからは山原船に替わった。だけど、あれは帆船だから、港で風待ちしていて、順風なると帆掛けして出ていく。これ不便だからと、祖父の晩年、父か継いだ頃かな、発動機船に切り替えた。島納丸という船に、石油が手に入らん時代だから、木炭吸入ガスのエンジンだった。コッコンコッコンと走るわけだ（笑）。まあ、島納丸 2 艘持って、これで海運業をやってました。これが軍に徴用されてパーなった。

祖父ですか？　奥田良蒲戸という、祖父は戦前那覇の東町で材木屋も手広くやって成功していたんですよ、それが 10.10 空襲でやられて、パーになったね。そうそう、祖父の若い頃撮った写真がありますよ。（写真持ってきて）これがそうです。明治 38 年に日露戦争出征記念に撮った奥田良家の記念写真です。



奥田良家の日露戦争出征記念写真、中列向かい右 2 人目（○印）が祖父奥田良蒲戸
明治 38 年那覇の写真館で撮影

こっち（○印）が祖父です。で、真ん中のこれ（□印）が、祖父の末弟で大変な変わり者だったですよ。奥田巖というて、これ戦前那覇で、満州貿易商の幟を立てて、馬 2 頭に引かして客馬車をしていた。これ沖縄に一台しかなかった。農学校も師範も途中で退めて、満州に逃げて憲兵になって、これ辞めると貿易商やって、とにかくやること、為すこと大変でしたよ。だから、だから沖縄三大奇人かな、その一人と言われて、大変変わり者だった。

それに比べたら、兄貴の祖父は、仕事一筋の生真面目でしっかり者、海運業に熱心でした。

戦後、ウチの父が、その祖父の跡を継いで、新たに共進組という会社を創り、また、海運業を始めたわけです。戦後沖縄では、恐らく、これが第一号の海運業だったと思う。その時に、沖縄に来た密航船を買い取って、尖閣にカジキ獲りに行ったわけですよ（笑）。

終戦翌年 松の木 木挽し 30トの共進1号造る 海運業始める

— 終戦直後に、お父さんが、尖閣に行かれた話だけでなく、共進組という会社造って、沖縄で第一号に海運業されたのも興味深い話です。これは戦後の海運業の歴史を知る上で貴重な話ですから、ぜひお聞かせ下さい。

奥田良：戦争終わって、アメリカは石川に沖縄諮詢会を造って、そのあと群馬政府になって、各群馬政府にそれぞれ知事がいたんです。これ琉球政府ができる前の話ですよ。

終戦の翌年で、沖縄民政府の頃ですか、ウチの父が、金武で初めて精米所を造ったんです。精米所は他になかったから、金武はまた米所だから、精米手数料と米を売り買いして、これで儲かったんです。相当儲かったもんだから、それで船を造ったんです（笑）。

山原で松を伐り出してきましたね、金武の浜田という所で、沖縄で一番最初に、30ト位の木造船を造ったんです。その時のことを僕はしっかり憶えている。

あの時僕は工業学校卒業していたから19歳かな。喜屋武さんといって泡瀬の人で、この木挽きも親子でね、木挽きの専門がいてね、それで山原から松の木を伐ってきてね、それをあの大鋸(おおが)一丁で、船を造る板とか肋骨材に、木挽きでやってくれた。それに木挽きの一緒飯というのが、喜屋武さんも、飯盒をね、日本兵の飯盒があるさ、あれ1つ炊いたら、これ皆平らげよったから、これなんかはっきり憶えている（笑）。



奥田良 繁

で、船大工は、これ皆平安座から行ったんですよ。これはもう専門だから。あのトーバルの系統の、亡くなった徳田さんとか、この泊兄弟なんか、で、棟梁は泊カナー、あれキンブヤーの天皇と言ったが、この人が棟梁で船造ったんです。で、船造って、それで、また海運業始めようということで、ウチは戦前から、島納丸という船持って、これでやってましたから。もう祖父の代からの家業ですよ（笑）。

父は、それで共進組という会社造って、この船が共進組の第一号でした。貨物船？ いや、あの時は貨客船ですよ。で、第一号は奄美大島をこれでやったんです。第一共進丸で。あの頃は全部勝手に船の運航できなかった。アメリカさんの許可がないと何もできない、これも許可もらってやったわけです。

(共進丸広告を指して) これが共進組の広告ですよ。これ大島、宮古、八重山の列島航路になってますね。あとから、LST(上陸用舟艇)もらって、これで琉球一円をやりました。



戦後沖縄海運業第一号の共進組の広告(右端):
「大島、宮古八重山の列島航路」
〔沖縄主要地・主要商工年鑑 1951年版〕より

米軍から LST3 隻払い下げる 馬力あった 先島まで行く

— あの舟艇の LST ですか？ 漁師たちもあれもらって、漁船に改造して使っていたようです。糸満ではあれでダツ獲りに尖閣まで行ってます。あれを貨物船にしたわけですね。

奥田良：そうです（笑）。それで、これどうしたかと言ったら、あとで琉海の社長になっている比嘉繁雄というのがいるんです。これ海運業の大物ですよ、戦前の神戸商船学校出ているから、英語ペラペラです。勝連にセクション・ベース（米軍政府海運部）というのがそこにあったんです、ハマバハナヤーに。そこに海運副部長していた比嘉繁雄を通してアメリカの LST、これを 3 台払い下げてもらって、これを共進組の中に入れたんです。

だから、比嘉繁雄、久高安矩、3 名が株主だったんです。

この LST は、これエンジンの力はあるんです。アメリカの何んと言ったかな、グラマン？ とにかく、あれが 2 基付いているから、これ速いですよ。パタパタパタして、先島まで行ったんですよ。八重山の高等弁務官府もこれをしばらくは使っていたんです。

これがその写真です。弁務官が八重山行ったら、これに乗せて離島を案内わけです。弁務官府の公用船ですよ（笑）。

あとアメリカの高速艇がありましたね。あれは松田邦弘が、あれがどうしたか分らんが、あれをアメリカからもらってきてあった。ウチの父はそれを買ったんです。買って、これを第二共進丸、LST は第三共進丸、第五共進丸、第七共進丸、あとでは皆で 7 艘ありましたよ。皆で、船を。

ウチの父は戦前も船持って海運事業していたけど、戦後は表に立たず、久高安矩さんを共進組の社長にしたんですよ。これは雇われマダムですよ、実権は父が、専務の奥田（良）繁が握っていたんです。金も、全部繁が。

で、共進組は相当儲かってましたね。あの時 1 カ月計算ね、僕も憶えてますが、あの頃 A 円じゃなくて、B 円（米軍票）だったかな、30 万配当がありましたよ。3 名共、比嘉繁雄も、久高安矩も、奥田良繁も、それで家も造ってよ、ハーサ（もう）デージャタン（すごかった）（笑）。



比嘉 繁雄



沖縄戦で活躍した LST（上陸用舟艇）。米軍から 3 台払い下げてもらい海上輸送に使った、（沖縄県公文書館）

買取った密航船 突船？ 尖閣から アホウドリの卵？ 持ってくる

— 相当儲かって、金もあるから、別の事業もやろうと、それで、内地から船を買って、尖閣に、カジキ獲りに行ったわけですね。

奥田良：そうそう、あの時稼いだもんだからね、例のヤマトから密航して入った船を、大

体 20 ト位前後でしょうな、15 か 20 ト位、宮崎かどこからかの密航船を買って、尖閣列島に行ったんですよ。カジキ獲りの船とって持って来たんですよ。僕は、船はよく憶えている、あの時 18 だった (笑)。その代わりスピードが速かった。もうかなりのスピードだったね。潮のあれが引込む位速かった。

— (突船の写真を出して) 船はこんな形でしたか、カジキ獲り専用なら突船です。それに大分辺りなら突船が専門ですから。

奥田良: そんな形だったね。だけど、ここはこんなに長くないですよ。

— これ漁の時季になったら付けるんです。カジキが出るのは冬場ですから、シーズンオフになると今度は突棚は邪魔ですから外して、普通のカツオ船とか曳縄とかするんです。

密航船で来た時も、カジキ突く時以外は、突棚は外していたかも知れませんね。

奥田良: そうかも知らん。して、この突船で、尖閣にカジキ獲りに行ったんですよ。

あの時に初めて分かったのは、アホウドリというの。僕は知らなかった。アホウドリというのが尖閣に沢山おってね、卵を持って来たわけ。肉? いや、肉は持ってこない、卵を持って来た。大きいですよ。この位あった。アホウドリと言っていた。僕は初めて知った。

尖閣列島に行って、そのカジキを獲りながら、アホウドリの卵を持って来たんですよ。で、この時にね、まあ、金はあったからでしょうな、あれは採算合わないですよ。

カジキ情報 どこから? 突船の船主も 台湾戻りかも

— 尖閣にカジキがいっぱいいる情報はどこから? 共進組さんは、宮古八重山列島航路をやってますから、カジキ漁が盛んなのは与那国宮古なんです。あそこは終戦後台湾から戻って来た漁師たちが、台湾の突き船戻り、中古船を買ってきて、これで、尖閣にもカジキ突きに盛んに行っていましたから。先島辺りの漁師からこの情報を聞いたんですかね?

奥田良: いや、これ宮崎の船主からですよ、あそこはカジキ多いという話を聞いたから。

— この船主さんも台湾戻りなんです



カジキ突船は突棚が長く突き出ている。(長濱一男)



尖閣諸島はカジキの好漁場。突船が操業し賑わっていた。南小島から魚釣島を望む。(多和田真淳 1952)

かね。戦前、台湾から尖閣に行っていた人たちが戦後行けなくなって、今度宮崎大分から、尖閣に行くんですけど。確か1956年頃、大分県の突ん棒組合が、水、燃料の補給、荒天時の避難港を確保するため、琉球政府に対し、沖縄に漁場基地設置の協力の申し入れをしています。実際は寄港許可という形になったようですが。台湾戻りだったら、尖閣のカジキ情報は詳しいはずですよ。

奥田良：これ分らん、でも、なるほどね。尖閣にカジキいっぱいいるからと話していたわけだから、台湾戻りかも知れない。

父は、まあ密航船が来たから、宮崎から船持って来てますから、これははっきりしている。密貿易船をそのまま買い取った。これ突船だから、恐らく、船とカジキ獲りの人間も一緒に来たはず。カジキ突きできる漁師も一緒に来たと思う。



米軍政府 本土との人・物の移動、厳しくチェック すり抜ける

— あの時、船と一緒に突船専門の漁師も来たんですか。宮古八重山に行けば、台湾帰りの漁師もいるはずですが、こっち（沖縄本島）にはいないですよ。

奥田良：とにかくこれは宮崎から船員と一緒に2,3名来たはず、恐らく5,6名乗ったからね、半分くらいは宮崎から来たんでしょう。そうしないとカジキ突きできないから。父と船主の事前の約束だったか、買った時に相談したか分かんが、この人たちは密航で、密貿易で、船と一緒に来て、父が雇っていたと思う。

— あの時、米軍政府は入管が厳しいですよ。本土から人間雇うのも、船買うのも、技術導入、資本導入で厳しくチェックしていたんじゃないですか。

奥田良：いやいや、関係ないですよ、あの時戸籍も何もないのに。ヤマトンチューかどうかも分らん。あの時は戸籍も何もないですから、だけど、密航で捕まると現行犯でやられましたかね。バレなければ分かりませんから（笑）。

それと本土から船買うのも、あれ正式には持ってきたなら、通貨も違うし、宮崎は日本円、沖縄はB円（米軍票）でしょう。これだけでもいろいろとややこしくなる。

だけど、あれは密航で持って来たから、父が前から持っていた形でできたんですよ。ウチは第一共進丸造ってましたし、で、アメリカのあれも、第二共進丸も買って造ってましたから、すんなりいった。それで人間も、船も、うまくすり抜けたわけですよ（笑）。

密貿易の中継地 北あった 南の尖閣の話 聞かない

—ああ、なるほど。あのう話ちょっとは飛ぶんですが、尖閣のを調べていたら香港ルート
の船が、尖閣の島の方で、何か荷渡しをするとか、密貿易船がそこで荷渡ししたというこ
を聞いたことありますが、実際そういうことは可能だったんですかね。

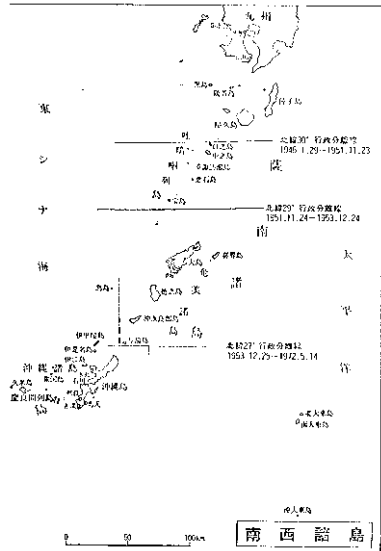
奥田良：あの頃の船乗り達の話聞いてますとね。アホウドリ。アホウドリがものすごく
いたんだって、それで、時に伝馬で上陸したらアホウドリの卵を採ってきたとか言ってま
したからね。ですから、実際にそこで小屋を作って何か生活
をしたという形跡はなかったみたい。

あそこは全くの無人島ですよ。それに、沖合で、警察の
目を逃れるために、荷の受け渡しした中継地の話とかは聞
いたことなかったです。北の方はありましたが、南の方の
尖閣の話は全くないです。

北というのは所謂十島ですね。七島村、三島村、あの辺
の悪石だとか、それから今の口之島が最北端でしたから
ね。北緯 30 度、そこまで来たら、琉球警察が追って行っ
て、向うから上は、鹿児島になるからそのまま行けないと
いう話をよく聞きました。銅線だとか、所謂非鉄金、それ
を、そこでお互いに、上からはヤマトが来て、沖縄からは
船で持って行って、口之島で、お互いに物々交換をしてで
すね。そして口之島である時はバーターです。米と換えて
来たんです。物々交換、色んなものと、日用雑貨とかとね。
そういうふうな口之島で 換えて来たんですが、

でも、あの時は今みたいに海上保安所ありませんし、
水上警察はあったが、あれ形だけでした（笑）。直接取り締まりはなかったですね。直接物
を検査すとかねえ。それはあまりなかったです。北も、南も直接行って、密航船を取締ま
りというのはそんなになかったですね。だけど、口之島に行く船は、警戒してましたね。だ
から、水上警察に、船は出港、入港の届出がありますね。口之島に行く、行ったとはやらな
いですよ。例えば奄美大島の名瀬とか、徳之島だとかね、そういうところから出港したとか
いう形をとりました。入港もそうでしたね。口之島辺りに来たら、入港は沖縄からと言って、
そういうカムフラージュはあったけど（笑）。共進組ですか？ いや、ウチは大島航路もや
ってましたけど、海運業専門でしたから、密貿易で稼いだということはないです。

あの夏子さんとか、照屋敏子さんとか、あの方たちは密貿易で相当儲かったはずですよ。
平安座の島の前でも、密貿易は何回かありました。ヤマトから船を持ってきて、品物を持っ
てきて、そこで下ろしてね。それで、いろんなことがありましたが、あの頃の警察というの
は、ご承知のように警察学校もなかったし、アカ防止から所謂布令布告警察です。特別にど
うということもなかったですね。



密貿易時代の行政分離線。1951年11月23日までは口之島から上に逃げれば琉球警察は追って来なかった。
〔第密貿易の時代Iより〕

尖閣 3航海で辞め 事業撤退する 採算合わん

— 話は尖閣のことに戻りますが、で、尖閣に、カジキ突きに行つて、どうでしたか？

奥田良：尖閣には3回行ってますね、3回位行って、この事業から撤退です。

僕は、カジキ獲つて来たのまで憶えている。カジキも見ただから、それに向こうから持ってきたアホウドリの卵も食べた（笑）。だけど、3航海位で終わったからね。なぜかと言うと採算合わんから。とにかく、行くだけで、1泊2日片道かかるでしょう。それに天気悪くて、中断しますと時間かかりますね。あの頃は船は小さいですけども、やっぱり飲み物、食料は積んでいかんといかんですから、それから燃料ですね。ドラム缶に燃料積んでいかんといかんわけだから、船の大きさと燃料の消費とか考えて、人件費とか、それから魚の鮮度が問題、魚は1日で獲れよったそうです。幾らでも、魚を獲る心配はなかったそうです（笑）。

だけど、行き帰りが問題だったんですね。

それと鮮度の問題、まだ氷を造るという時代ではないですから、身を割いて、潮かけて、生け簀に入れてね、持って来よったから、獲ったら早く持って帰らんといかんから、もう、それだけでも大きなハンディーがあったみたいです。

だから、どうしても採算がとれないし、それに、あの頃はカジキは買うという所謂市場が、カジキを出す市場もないですよ。港に皆来て買ってもらおうというセリもありませんし、まあ商人があればそれをお願いして、売ってもらおうとかね、そういう時代です。

それに社会情勢というものは、カジキの値打ちもそうだけど、まだドル時代ですからね、だからヤマトに持っていくこともできないです。どうにもならなかったですね。3回位やって、父は、この事業から撤退しています（笑）。

とにかく、尖閣は遠いですから、直行して行つても1泊2日かかりますよ、で、それで往復で、カジキをして、1週間から10日はかかったわけです（笑）。

ガリオア資金で ガリオア船3艘造る 1つは瀬底島で座礁

— この事業から撤退したあとは、共進組さんは、本業の海運業に専念されたわけですね。ガリオア資金で船3隻造った話されてましたが、償還は皆大変だったと聞きました。

奥田良：アメリカさんから舟艇をもらってこれ改造し運行してましたが、ガリオア資金という奴、あれが出てきたから、ウチはあれでガリオア船3隻造りましたよ。100ト級の貨物船と60ト級の貨客船、この2つともう1つ、3つ造りました。船名も第一共進丸、第二共進丸・・・にして。あれ償還が大変だった。そしたら瀬底島のあっちで、第七共進丸かな、座礁しましてね、で、あれはアメリカのA I Uの保険入っていましたから、保険会社が補償しました。残りの2隻のガリオア資金は完済しましたよ。

共進組の船長ですか？ 何人かいましたね。ウチは大島航路もしてましたから（奄美）大島の人何人かおりましたが、皆忘れましてね。覚えているのは田原さんとか、宮平行雄さんですね。2人とも恐らく亡



宮平 行雄
乙1免許持ち共進組で
優秀な若手船長だった。

松田 昌雄 まつだ まさお (尖閣諸島防衛協会)

1946年(昭和21年) 読谷村に生まれる。71歳(2018年時)。

米軍エクステンジ(PX)支部に勤務する。全沖縄軍雇用労働組合同支部の戦闘的リーダーだった。復帰後、労働組合運動の方向に疑問を持ち、一転して民族運動に身を投じる。沖縄誠義党(のち日本維新党)を組織し、全日本愛国団体会議の一員として、日本青年社の魚釣島灯台の維持管理作業に協力、尖閣諸島に上陸する。また、尖閣諸島防衛協会を設立し、平成8年(1996年)渡島して、日の丸国旗、古賀村顕彰碑と併せて魚釣島慰霊碑を建立した。数年前に民族運動から引退した氏を訪ねて、当時の話を伺った。日本青年社は魚釣島灯台を建て、島に上陸し、27年間に亘り灯台の維持管理を行ってきた。その上陸した際には、石垣市が建てた遭難慰霊碑を若い隊員たちが参拝供養していたという事実が明らかになった。氏は百戦錬磨の民族派戦士であり、強面な荒男と思いきや、実に心優しく、柔和な紳士だった。



石垣市建てた遭難慰霊碑 参拝者もなく ひっそりと立つ

— これが松田さんが魚釣島に上陸した時に撮った遭難慰霊碑ですね。昭和44年(1969年)に石垣市が建て、あの時遺族の方も、石垣市長も参列して、慰霊祭を行って。あれから大分経ってますので、碑面の文字も風化して薄くなっていますね。

松田：これは平成8年(1996年)8月に上陸した時に撮影したものです。この慰霊碑は旧古賀村の側の岩の上にあります。この場所は見晴らしがよいから、あの魚釣島灯台も、そこに建っています。高台で強い潮風が当たりますから、碑面も風化して文字も読み難くなっています。昭和44年に慰霊碑を建ててから、写真撮った時には、27年近くは経ってますから、風化は仕方ないですが、1つポツンと野ざらしのまま立って、今は参拝する人はいませんから、御霊も寂しがっているはずですよ。

石垣市はこの慰霊碑を建てた時、石垣市長も、遺族の方も参列して、魚釣島で亡くなった人たちを、御霊を供養するために慰霊祭を行って。その後は一度も、ここで慰霊祭をしていません。慰霊碑を建ててから、もう今年(2018年)で49年なります。部外者の私が言うのもなんですが、あの時慰霊碑建てて、供養はしている形にはなっているけど、建てた後は放ったらかしですから、真の供養にはなってないと思います。それにここで無念の思いで命を落とされた人たちの遺骨は収集もされず、放置されたままですよ。



石垣市建立の遭難慰霊碑。参拝者もなく、独り寂しくひっそりと立っている。(恵忠久1996)

遺骨は、暴風の時波にさらわれて海に流されてしまった？ そういう話もありますが、だ

けど、ここにいたら、遺骨はまだあるんじゃないか、野ざらしのままあるから、自分たちを救ってほしいとお願いされている、そんな感じが不思議としますね。

それで、私たちが探したんです。探したんですけど、しかし、これ人骨だなというのは見つけることはできませんでした。でも、探せなかっただけで、確かに、あるはずですよ。

日本青年社が建てた灯台、これ魚釣島灯台と言いますが、慰霊碑の丁度右上の方に建っています。灯台は灯を守り通すため、維持管理しなければなりません。それで日本青年社の若い隊員たちが魚釣島に上陸し、ここに何日か滞在して、レンズの点検、電池交換などの作業をやるわけです。その時には、傍らにある慰霊碑の周囲を掃き清めたり、お供え物をして、礼拝したりしていました。これ大変いいことしたなと思ってます。この若者たちの慰霊碑に対する心遣いですが、これは、ここに祀られている御霊の皆さんの寂しさを癒し、心を休め供養になったと思いますね（笑）。

日本青年社 魚釣島に灯台建て 電池交換で 定期的の上陸

— これ初めて知りました。この魚釣島灯台は写真で見えて知ってましたが、これが慰霊碑の傍らあってよかったです。ところで、政府は尖閣諸島は上陸禁止していましたが、日本青年社は、灯台を維持管理するという事で特別に上陸できたんですか？

松田: いや、もちろん上陸禁止でしたから、海上保安庁の目を盗んで隠密行動です（笑）。

1978年（昭和53年）8月に、日本青年社小林楠扶会長（初代）から命を受け、衛藤豊久（第二代会長）さんが隊長になって、魚釣島に上陸し、灯台建設隊の皆さんが相当苦勞されて、あの灯台を建てたわけです。

そしたら中国や台湾は大騒ぎですよ、もう政府の態度も情けない、腰くだけです。中国をこれ以上刺激したらいかんと、日本青年社に対して監視の姿勢を強めて来ましたね。

でも、尖閣で漁をしている漁師さんたちは大助かりです。灯台ができたお陰で安心して操業ができますと、石垣の漁師さんかな、わざわざ感謝し来たこともあったそうです。またこれ建てた3年後、昭和55年でしたかね。沖合を航行中のフィリピン貨物船が台風巻き込まれ遭難したんです。その時灯台の灯を発見し、針路を灯台に向け、魚釣島に乗り上げて、乗組員23名全員の命が助かったんです。あの時灯台の灯を発見してなければ、全員が遭難していたかも知れません。

魚釣島灯台が、東シナ海を航行する船舶の安全航海に貢献していることが分ったわけですよ。それからは政府や保安庁も、日本青年社に対して少



日本青年社が建てた魚釣島灯台と衛藤豊久（第二代会長）。灯台脇に慰霊碑が立つ。（「ウェブサイト」より）

しずつ協力的になったようです(笑)。灯台の定期的な維持管理、若い隊員が中心になってやりましたから、この目的で隊員を派遣する時は、上陸を大目にもるようになったようです。勿論表立った許可じゃなく、取締まりを緩め、黙認するような形です。

その頃でした、地元沖縄も協力しなければということで、ウチの若い者を随行させて、日本青年社の手伝いに、電池交換とかにやりました。私の方はまたは別の件で上陸しました。

復帰前 全軍労の闘士 復帰後 闘争に疑問持ち 民族運動へ転身

— 松田さんたちが日本青年社の考えに賛同し、協力しなければならないと考えて、沖縄からも、若者たちを灯台の電池交換とかの手伝いに行かせた。これは、どんな経緯があって、日本青年社に関係し、尖閣諸島に関わるようになったのですか？

松田：私は学校卒業して全沖縄軍雇用労働組合(全軍労)におりましたから、復帰直前まで、赤旗振って復帰祖国運動を、上原康助委員長の元に、私も執行部役員でしたから、エクステンジというPX関係の組合でした。それで一生懸命赤旗振って、復帰運動しました(笑)。だが、復帰を勝ち取ったら、同時に組合の運動もまた様変わりして、日の丸反対、君が代反対、あるいは皇室反対、あらゆる国策に反対という運動に変わりました。

ああこれは自分の思いとは何かかけ離れていくなあと、私も自問自答しながら、やっぱり、これは納得いかない。こっちが悲願として望んで復帰した以上は、祖国日本に帰った以上は、47都道府県の1県として、日本国民として、何をすべきか、自分の国に対して、何か貢献というのか、やれることをするのが当たり前ではないか。

私たちは、あの復帰運動の時は、日の丸振って来たわけですから、復帰した同時に、日の丸は反対と、君が代も反対、自衛隊も反対、あらゆる国策に反対することに対して、疑問を持ち、ほんとにこれでいいのだろうかと思ひました。私は上原康助(元衆議院議員、元沖縄開発庁・国土庁長官)が国会議員になって、沖縄批准国会の時には、全軍労の親衛隊で、東京に行って、そこで初めて、右翼と云うのが黒い車



全軍労は復帰運動を主導し、最も戦闘的だった。デモ隊の先陣を常に陣取り、行動は過激であった。
(「大琉球写真帖」より)

に、街宣車に乗って、大声で叫んでいるのを間の当たりを見て、あれ何だ、怖いなあと思っていました(笑)。だけど、復帰して、上原委員長はじめ全軍労がこういう形になったものですから、もう一緒にやれない決心したわけです。それで、米軍職場を依願退職をして、彼らと袂を別って、180度思想転換して、日の丸を振って、民族運動に転換したわけです(笑)。

私は、だから復帰までは赤旗振ってますよ(笑)。そして復帰して、祖国に帰った以上は、これという具体的なことはなくても、全てのものに反対、反対するのはおかしい、私の赤旗

は祖国復帰に対する悲願の赤旗だったわけです。

私が一番最初東京で見て、びっくりした右翼、まさか自分がそういう形になるとは思わなかったです（笑）。でも、この人たちがやっていることは間違いじゃない。それで、私も民族運動に身を投じたわけです。昭和 59 年（1984 年）6 月に、沖縄で第 1 回の日教組大会（第 60 回定期大会）があって、その時に沖縄誠義の党（のち日本維新の党）という団体を組織しました。そして、全愛会議（全日本愛国者団体会議）に入会しました。全愛会議の取り組みとして、日本青年社に協力し、尖閣諸島に逗留と言うんですかね、それで、全愛会議のメンバーとして、持ち番制で、交替で行って、魚釣島に上陸しました。

中国武装漁船 2 百隻余押し掛ける 危機感懐き 魚釣島に上陸

— 昭和 53 年に、中国の武装漁船が 200 隻ほど押しかけて、尖閣に居座って、漁師さんの方も中国の侵略許さないと県漁連で抗議大会などがありましたね。あの時以降、中国は尖閣侵略攻勢を強めてきてます。そのような危機感もあって、尖閣に行かれたわけですね。

松田：そうです。尖閣諸島は日本の固有の領土です。中国はこれまで何とも言ってなかったです。1968 年頃ですか、国連のエカフェの調査で、あそこに石油が出るからと、復帰直前ですよ、急に自分のものと言いついたんです。いま中国は、あの南シナ海でも分かるように軍備を拡張して、海洋進出してます。尖閣諸島は、東シナ海にある日本の国境の島です。これを中国に盗られたら、中国は軍事基地を造って、東シナ海全体を中国の海にします。

そうなるのととても危険です。あの時は中国があんなに軍事強国になるとは想像もしませんでした。とにかく、中国の侵略から、尖閣諸島を、国境の島を自分たちで守らないといかん、そういう思いがあって、行ったわけです。

あそこは絶海の孤島、無人島ですから、何もない、だから一切切自分たちで全部やらないといかんわけです。ベースキャンプ作りも大変でしたよ。

（写真を出して）、古賀さんの石垣囲いに、こんなしてプレハブ宿舎も建てましたが、船をチャーターして、それに材料や機材などを積み込み、船は島に接岸

できないですから、これまたボートに積み替えて、島に揚げるわけです。あそこは大変波の荒い所ですから、これだけでも命懸けの作業です。

こんな所に、日本青年社の方々は、こんな立派な灯台、魚釣島灯台を自力で建ててますから、大変頭が下がります。灯台建てた後も、灯台の灯を守り通さんとならん、これの維持管理も大変な仕事です。灯台の点検とかペンキ塗り一鉛蓄電池・配線・電球・レンズを点検・



魚釣島のキャンプ宿舎にはヘンボンと日の丸が翻る。旧古賀村の石積み囲いの中にあつた。（日本青年社）

整備し、白ペンキで化粧直しするとか、またプレハブ宿舎の補修―床板をはがし張り替え、基礎の柱や横木に防腐剤の塗布、鉄パイプ組んだ 5 坪の食堂の屋根のベニヤ張り・ペンキ塗り、強風に吹き飛ばされた屋根の張り替えなどの作業が幾らでもあります。

向こうではもう猫の手も借りたいほど忙しいです。これが島で頑張っていた若い隊員たちです。皆一生懸命でした。それで、ウチの若い者を何回か手伝わせに行かせました。

私が行ったのは 3 回ほどです。私の場合は、このプレハブ宿舎、これ「魚釣島避難所」と呼んでましたが、これを中国から守るといって行きました（笑）。ウチの全愛会議の仲間たちも皆交代で行きました。



日本青年社の若い隊員たち、作業は山積み毎日大忙しだが、久々の休日で料理を楽しむ？ 〈日本青年社〉



灯台の電池交換、ペンキ塗りに勤しむ。この下方に遭難慰霊碑が立っている。 〈日本青年社〉

霊気漂う魚釣島 上陸すると 眠っている御霊へ 挨拶と祈り

― 最初の話に戻ります、日本青年社は、灯台の維持管理で、島に上陸した時は、灯台の傍に遭難慰霊碑があります。そこを掃き清めたり、慰霊碑に参拝したわけですね。

松田：そうです。私たちは他人の土地に入ると、まず最初に、その土地の神様、またはそこに御霊が眠っておれば、そこに行って挨拶するわけです。私たちは尖閣行っても、どこに行っても、そのような挨拶します。誰でも、最初に他人の家を訪問すると、こんにちは、こうこういうことで参りました、宜しくお願いしますと挨拶します。丁度あれと同じです。

私たちは、ここの土地を荒らしに来たわけではありません。この度、こうこういう目的で参りましたからと、自分たちの目的とか、何のためにここに来たかを告げて、どうかよろしく宜しくお願いしますと挨拶するわけです。最初にこの挨拶して、灯台のある仕事場に行きます。そこ行くと、慰霊碑が 1 つポツンと立ってます。あそこに遭難して亡くなった御霊が祀られていますから手を合します。どうぞ安らかに眠り下さいと祈りを捧げます。

日本青年社の隊員たちも、あそこで作業している間は、あの御霊を、魂を供養することが、日課のようになっていましたね。

やはり、魚釣島はやっぱり我々が寝起きして住んでいる所とはちょっと違う感じ受けま

したね。島に足を一步踏み入れただけで何か心が立ちすくむ感じを受けましたね。絶海の孤島で、人を寄せつけない荒々しい島だからという印象もありましたが、これとは別の感じですね。何か霊気が漂っているというか、魂が浮遊している、そんな感じでした。日本青年社の隊員も同じように感じる所があったはずですよ。

ですから、我々にそういう力はなくても、心の中では、ここで亡くなった魂というんですか、御霊が鎮まり安らかに眠って下さいと、自然とそういう思いを持ちました。だから、1つ1つ何するにしても、木を伐る、土を掘り起こす、石を移動するにしても、やっぱりお断りをする、人はいないけれども、こうこういう事情で、ここを伐採しました、整地しましたと、常に語りかけるといったそういう思いはしょっちゅうありました。やはり、この島で、多くの人が亡くなって、しかも遺骨は収集もされないで、野ざらしのままですから、魂は、成仏できず、嘆き悲しんでいると思います。



掘割から旧古賀村、灯台、遭難慰霊碑一帯を遠望する。ここに足を踏み入れただけで霊気が漂っている感じを受けた。(恵忠久 1996)

魂 悪さするもんじゃない 数々の不思議な体験 何かのシグナル？

— あの川満安次船長さんも、魚釣島は、沢山の人が亡くなっていて、遺骨も野ざらしままで、魂が浮遊している。声はするけど姿見えなくて、怖いから、8月旧盆時期には、用船するから船出してくれと頼まれても、自分は絶対行かないと言ってます。また上陸した他の人からは、夜中騒々しい声がし、外に誘い出して、暗闇の海に引きずり込もうとすると怖い話を聞いたことがありますが、松田さんはそんな体験はありませんか？

松田：人間の魂は悪さをするんじゃないというのが僕の考えですね。魂が救われないから、救ってくれと叫んでいるのは、これはあると思う。しかし、ここで無念の思いで亡くなって、今か今かと救いを求めている魂が、ここに来た人たちを、何で来たのと言って、恨みつらみで足を引っ張って、海に沈めて、生身の人間の命を奪うというのは、僕は信じがたいです。魂といいますか、御霊というものは、純粹で気高いものだし、またそんな力はないです。あの話は自分の恐怖心から出た錯覚ですよ（笑）。

川満さんは、靈感が高いみたいですね、声は聞こえるけど姿が見えない。僕にはそういう靈感はないから、これはよく分かりませんが、でも、靈感の強い人とか、そういうのに敏感な人はいますね。

島に上陸したとたん 今まで元気だった若い者が急に頭が痛いとか、何か重いのが被さったと沖縄でウサーリン（霊に押さえらる、霊障の意）と言いますね。熱発したり、うなされたり、調子が悪かったりしました。僕は医者でもないから分からないけど、本人はほんとうに起き上がれない、動くことも大変、熱発し、額に手当てたら熱もあるわけです。

でも、そうこうしているうちに1日2日でケロリと治って、また皆の仲間に加わって、一緒に仕事やりましたけど（笑）。僕なんか敏感じゃないからそんなことはなかった。

でも不思議な体験はしました。

夜中テントに寝ている時ですよ、人がいないけれど、人の気配を外で感じるわけです。夢でも何でもありません。意識もしっかりしています。トントントンと人が歩いて来る足音が聞こえて来ます。遠くからテントに近づいて来るわけです。ああここまで来ている、傍まで来ていると思って、パッと起きて、待て、誰か外に小便しに行ったかも知れん。僕は責任者ですから、すぐ隊員の人数を確認するわけです。ああ全員寝ている?! でも、確かに人の足音した。やっぱり、おかしい、あれは誰かな? テントのチャック開けて、外に出て見ても、誰もいない。シーンと静まりかえっている。あれ気のせいだったのかと思い、じゃまた寝ようと寝ましたが（笑）、そういうことはありましたね。



旧古賀村脇、遭難慰霊碑下方の水飲み場、この一帯も霊気が漂う? (沖縄開発庁 1979)

また、昼間島を歩いていると、そうですね、人が隠れるような所とか、あるいはうつ伏せになって寝れるような所、そういう所を通り過ぎたり、そこへ向かっていたら、誰かに声掛けられたような感じで、ハッと立ち止まる。誰かな? 周囲見渡しても誰もいない

私は川満船長みたいに靈感はないから、霊の声は聞こえないですよ（笑）。ただ、声掛けられたような感じがしただけ（笑）。あの当時は私も若かったから、あまり勘が取れなくて、最初はこれ気の精かなと思っていました。でも、私が連れて行った若者たちもウサーられたり、人の気配を感じたとか、何かしら普通感じ取れないものに遇ったことは確かです。

日本青年社の若者たちも似たような体験をしているはずですよ。

私は、魂の世界は行ったことないですから、どういうものか分かりませんよ（笑）。でも、魂は絶対ないとは言えません。ここでは、やっぱり魂が浮遊していると思います。

遺骨も野ざらしのままでしょう。魂は成仏もできず、さ迷っているはずですよ。

私たちが歩いている時にちょっと待ってくれ、あれは、ここに何かあるからとの知らせです。魂が波動というか、シグナルを送っていたわけです。それで、私たちも周辺に遺骨でもあるかなと思い、探してみましたが、見つかりませんでしたね。

開拓時代の御霊も 浮遊？ 島の何ヵ所か 日本青年社の供養の跡

— 魂が呼びかけているんですか。遭難者は無念の思いで亡くなって、遺骨は野ざらしのままだから救ってほしいと、魂がシグナルを送っていたわけですか。

松田：そうです。魚釣島に行くとそれが分かります。浮遊している魂が、自分たちを救ってもらいたい、供養してもらいたいと、私たちに何か語り掛けていたと思います。

でも、そこにおられる御霊は、遭難慰霊碑に祀られた人たちだけじゃないです。古賀さんの開拓時代に亡くなった人たちも眠っているはずですよ。

あの開拓時代の写真を見ますと、子どもたちも大勢おりますよ。どこから連れられて来たんですかね。あんな幼い子供たちが、大人と一緒に開拓事業に加わっていたわけですから、もうあそこは、太陽がガンガン照りつける炎熱地獄の島、それに潮風に吹さらしの島ですよ。夏は台風、冬は大陸からの北風が吹き荒れると、もう何もできない過酷な環境



旧古賀村の掘割岸壁に立つ子供たち、宮城福島県より7~11歳の子供を年季奉公で連れて来たたとある。(明治41年頃撮影)

です。あそこで病気がしたり、事故でも起きたら、医者はいないから、十分な治療も、手当もないです。それに食料も、栄養事情も悪かったはずですから、開拓時代には多くの人たちが島で亡くなったことが想像されます。亡くなれば、遺体は船で持ち帰った方々もおられたでしょうけど、止むなく島に葬られて、ここで眠っている方々も少なくないと思います。

ですから、ここには遭難慰霊碑に祀られた御霊と開拓時代に亡くなった御霊の皆さんが眠っていらっしゃるわけです。でも、無念の思いで眠っている御霊は心休まらないはずですよ。

それで私たちに、何かシグナルを送っていたわけですよ。というのは、島を歩いてみると、小さな石を積んで拵えた跡が何ヵ所かにありました。

日本青年社の若者たちが拵えた跡です。これ何んだらう？ 小石を積んだ感じからして、そこで祈りか何かを拵げたようでした。これ成仏せぬ魂の鎮魂、供養のために拵えた祭壇みたような跡でした。もしかしたら、これ浮遊した魂が、自分たちを救ってもらいたい、供養してもらいたいと語り掛けていたから、安らかに眠り下さいと鎮魂の祈りを拵げた跡ではないか？ 私たちはその時は見てないから、そうなのかどうかは分かりませんよ。

たとえば、魂から語り掛けがなかったとしても、若者たちは、この周辺に、霊気か、何かを感じたから、石を2,3個積んで、そこに手を合せて、祈りを拵げた跡じゃないかと思いました。こんな跡が幾つかありましたね。これ今もですか いや、もう残ってないです。ただ2,3個石を積んだだけですから、あそこは台風もあるし、いろんなことがありますから、すぐ壊れてしまい、原形は残ってません。それでも、次ここに来た時は、その場所がここだからと

すぐ分かりますし、手を合せる目安にもなりますから。

全ての御霊の鎮魂・供養 “魚釣島物故者慰霊碑” 建てる

一 台湾へ疎開の途中に米機にやられ、ここに漂着して亡くなった御霊は、遭難慰霊碑に祀られています。古賀さんの開拓時代に亡くなった御霊は、どこにも祀られていません。

松田：そうです、日本青年社は、これではいけないと思い、開拓時代に亡くなった御霊も祀ることにしました。それで建てたのが「魚釣島上陸隊建設の魚釣島物故者慰霊碑」です。

この物故者慰霊碑には、あの遭難慰霊碑の御霊も、開拓時代に亡くなった御霊も一緒に、島で亡くなった全ての御霊を祀って供養しています。

これは旧古賀村の石垣囲いの中に、あのプレハブ宿舎の近くに建ててましたね。

また御霊を慰霊し、供養するため、お地蔵さんをお招きして、安置しました。

このお地蔵様はそんなに大きくなかったです。高さ1メートル位のものでしたね。

日本青年社の隊員の魚釣島での一日の生活スケジュールを見ると、御霊に対する供養が日課になっています。

午前7時20分から10分間、物故者慰霊碑に、全員で読経、参拝してます。

このお地蔵さんには、一日の作業終えたあと、5時には読経、参拝してます。

7:00 起床 7:10 国旗と日本青年社旗掲揚
7:20 日本青年社魚釣島上陸隊建設の「魚釣島物故者慰霊碑」に読経・参拝
7:30 朝礼（国歌と日本青年社歌斉唱、尖閣体操）8:00 朝食
9:30 午前の作業開始 12:00 昼食
13:30 午後の作業開始
17:00 お地蔵様に読経・参拝
17:30 夕食 18:00 国旗及び社旗の降納 21:00 消灯
（「尖閣諸島 灯台物語」（殿岡昭郎著）より）

隊員たちが島にいる間、毎日全員で、御霊に対して、哀悼の誠を捧げ、懇ろに鎮魂供養に勤めていたわけです。勿論、灯台での作業の際は、遭難慰霊碑への参拝、供養も欠かさなかったわけです。だから、御霊にとって、嬉しいですよ。御霊の皆さんの寂しさを癒し、心休める供養になったと思います。嘆き悲しむことはやめ止め、少し落ち着きを取り戻し、安らかに眠ることができたかもしれません。

日本青年社 御霊の供養 第一義 タイ国に 戦没者慰霊碑 建立

一 毎日の作業初めに、物故者慰霊碑に、全員で読経・参拝する。また、一日の作業終えたあと、5時には、お地蔵さんに読経・参拝しますが、勿論、灯台での作業の際は、あの遭難慰霊碑への参拝、供養も欠かさなかったわけですね。

松田：灯台があるから灯台だけのことはやらないです。遭難慰霊碑の周りも掃除して、掃き清めて、参拝供養する。毎日の作業終わったら、また御霊に合掌して、目礼して宿舎に帰る。

そういうことは、この遭難慰霊碑にもきちんとやりました。御霊に対して、哀悼の誠を捧げなさい、これが衛藤豊久会長とか、荻野谷輝男さんなんかの徹底した教えでしたから。

ですから、日本青年社の第一は何かというと供養ですよ。

あのインパール作戦の時に亡くなった御霊の供養にも永年取り組んでいます。

平成7年に、この時の全戦没者を供養・追悼するため、タイ国の西部カンチャナブリに建てた慰霊碑がそれです。これは今に生きる日本人として、戦後日本の平和と繁栄の礎になった御霊に心から感謝の誠を捧げる目的で建てたものです。インパール作戦に関わって亡くなった全て国々の戦没者の御霊を追悼し、世界の恒久平和を祈願する慰霊碑です。

日本青年社は戦後50年に期する一大事業として、これに取り組み、タイ国の関係者と粘り強く交渉して、総面積3千坪の素晴らしい「平和祈念公園」を開園しています。

園内には地上7メートルのこの「平和祈念慰霊碑」の外に、あの戦場に架ける橋で有名なクワイ河にちなんだ「桑井川神社」も建っています。

この「平和祈念公園」では、毎年2回の大祭をしているそうです。

このことからでも、日本青年社の第一義は御霊の供養だということが分かります。

ですから、灯台も勿論造りましたけど、尖閣で亡くなった人たちを供養するというのも大きな目的でもあったわけです。

私は当時の衛藤会長さんとは昵懇にお付き合いさせてもらいましたが、一番は供養ですよという思いはひしひしと伝わってきましたね。この衛藤会長の下で、尖閣灯台の一番番頭として頑張っていたのが荻野谷さんです。私たちが灯台の維持管理で、電池交換の時に協力するという形で無理やりご一緒させてもらいました。その時も、荻野谷さんは、お供え物もお酒も持って行って、ちゃんと供養をなさっていました。



タイに建立したインパール作戦の御霊を追悼する「平和記念慰霊碑」。毎年2回大祭を行っている。（日本青年社）

遭難慰霊碑 若い隊員ら お供え・供養した！！ 永年の疑問解ける

— これまでのお話聞いて、永年の疑問が解けました。1979年（昭和54年）に沖縄開発庁調査団が撮った遭難慰霊碑の写真があります。これ見ると何かお供え物した跡がありま

す。尖閣諸島は上陸禁止だったのに、いったい誰が参拝したのか？と思ってましたが、荻野谷さんたち日本青年社の方々がなさっていたんですね。

松田：灯台を建てたのが昭和 53 年だから、これ翌年に撮った写真ですね。

魚釣島灯台を建てて、その後、荻野谷さんが若い隊員を引き連れて電池交換が行きましたから、その時にお供えたものでしょう。

日本青年社の隊員たちは、皆祖国を思う立派な若者たちでした。彼らは灯台の維持管理で行く時は、この慰霊塔にも必ずお供えものも持って行き、只今参りましたと挨拶をし、御霊に哀悼の誠を捧げていました。また周囲を掃き清め、供養していました。たまには読経もしてくれたんじゃないですかね（笑）。



灯台建てた翌年の遭難慰霊碑の様子。お供え跡がある。左端の石塔は何？お供え跡もある。（白石・荒井 1979）

この慰霊碑が立っている所は海岸の小高い岩です。そこからすぐ海が見下ろせる丘にポツンと立ってます。石垣市は、慰霊碑建てて、あれから一度も行っていない。

遺族の方々も参拝していません。訪れる人は誰もいなかったわけですから、御霊は、切なく、寂しく、悲しいですね。だけど若者たちが時々来てくれたから、よかったです。

彼らは朗らかに声を掛け合い、気忙しく作業しますから、もう慰霊碑周辺まで、笑声が響いて、明るく賑やかな雰囲気包まれたと思います。

御霊の皆さんの寂しさも吹き飛び、心も弾み、和やかになったはずですよ（笑）。

日本青年社の若者たちは毎日の作業の際はもちろんですが、仕事を全部済ませたら、ちゃんと御霊に帰任の挨拶をします。また次は、いついつ頃には、こちらに参りますと言いますよ。御霊の方々も、岩の上から海の方を眺めては、もうそろそろだ、明日かな、来週かなと若者たちがやって来る日を待ち遠しくしていたはずですよ。ほんと、彼らは、御霊の寂しさを癒して供養してくれた、いいことしてくれたと思いますね（笑）。

— それと慰霊碑の左の方に、小さな石塔があつて、そこにもお供えした跡があります。あれ何を供養していたんですか？ もしかしたら、開拓時代に亡くなった御霊を供養する石塔ですか、あの魚釣島物故者慰霊碑を建てる前は、ここで供養していたんですかね。

松田：ほんとだ、石塔がありますね。これ何か分かりませんね。僕が行った頃にはこれなかったです。ここにもお供えした跡があるから、何か供養していたのは間違いないですね。

さっき話したように、日本青年社は全ての御霊を供養するため「魚釣島物故者慰霊碑」を建てましたが、あれ建てる前はどこで御霊を供養していたんでしょうかね。

僕が行った時これはなかったから、最初の頃は、ここで供養して、あとで物故者慰霊碑に移し祀って、これ片付けたのかな？

衛藤会長か、荻野谷輝男さんが生きていたらよかったです、残念なことに、2人とも亡くなってしまった。荻野谷さんが魚釣島灯台関係の総責任者でしたから、彼ならこの辺の経緯はよく知っていたはず。あの北小島灯台、あの灯台建設隊を指揮して建てたのも、魚釣島に自分の戸籍を最初に移したのも彼です。あの闘志がどこから湧き出のかと思う位、温厚な人でした。彼が生きていたら一発で分ったかも知れない。もう当時の事情を知っている人は皆いなくなりましたね。



掘割から荷物を陸揚げしている荻野谷輝男さん。
(日本青年社)

北小島灯台建設 これに呼応 大きな日の丸国旗 魚釣島に立てる

— 日本青年社の第一義は供養である。それで松田さんたちも、この思いに感銘して、これ地元沖縄側としても、魚釣島で亡くなった御霊を慰め、ぜひ供養しないといかんということで、1996年（平成8年）に上陸して、あの「魚釣島慰霊碑」を建てたわけですか？

松田：そうです。そういう思いで以て、上陸して建てました。あの時に上陸したタイミングと言うのは、日本青年社が北小島に灯台、正式には北小島漁業灯台いいますが、これを建てました。建てた直後という大きな時期的事情がありました。魚釣島灯台は、山が聳えていて光が遮られて、360度完全に海上に光当てることができなかつたわけです。東シナ海を航行する船の安全を守るためには、ぜひとも北小島にも灯台が必要でした。それで北小島灯台の建設に踏み切ったわけです。



北小島に立つ漁業灯台、何者かによって破壊されたり、台風に遭ったりして消失した。〈「ウェブサイト」より〉

そしたら中国、台湾から猛反発が起こったのです。わが国の領土に灯台を建てるのに、隣国が文句言うのはけしからん、これ内政干渉です。

日本青年社は、平成8年7月、荻野谷さんら7名を北小島灯台建設隊として派遣したわけです。彼が隊を指揮して、北小島に周囲360度照らす灯台建設を、見事成し遂げました。案の定、中国台湾は非難ごうごうですよ（笑）。

私たちも、尖閣諸島防衛協会（恵忠久会長）を設立し、地元沖縄側として、日本青年社を側面から応援する形で、魚釣島に上陸したわけです。恵忠久会長と奥茂治さん（南西諸島安

全保障研究所長)を引き連れて、あとウチの若い隊員 3,4 名連れて行きました。

あそこは船は接岸できず、大変波の荒い所ですから上陸するのも大変でした。あの時恵会長は 71 歳で、自分もぜひ行きたいと仰いますから、それではとお連れしました。大きな波をかぶりながら胸まで海水につかって、やっとの思いで上陸し、皆で必死になって荷物を陸揚げしましたが、会長は大変だったと思いますよ (笑)。

私にとってあの時は 10 年ぶり、しかも最後の上陸になりましたね。島の様子は 10 年前と大分変わってました。当時木々が生い茂り、海岸一帯も雑草でした。だけど、日本青年社が持ち込んだあのつがいのヤギ 2 頭が繁殖して、このヤギに食べられて、緑は少なくなって、海岸は石が剥き出しになってました。

恵会長先頭に、皆で上陸して、魚釣島慰霊碑と旧古賀村顕彰碑を建てたわけです。

この時のもう 1 つの大きな目的は、大きな日の丸国旗を建てることでした。

一番大きな島の魚釣島に、日の丸国旗を建てて、中国、台湾、いな世界中に向けて、尖閣列島が日本の領土であることをアピールする狙いがありました。日の丸国旗は 3 メーター×2 メーターありましたから、一枚板にしたら、大きくて持って行けません。で、いろいろ考えた末、角材を使うというやり方でした。何 10 本も角材を並べて、日の丸国旗を作りました。白いペンキを塗って、そして中央に日の丸の太陽を描いて、あとは骨組を支える鉄筋などを持って行って、現地で組み立てたわけです。組み立てて、旧古賀村に隣接した山の中腹に運んで、そして上空の飛行機からも、海の沖合の船からも見えるように、日本国旗を建てました。一時は自衛隊の P3C から上空視察する時は、あの日の丸国旗がテレビとか新聞などに報道されてましたね (笑)。



早朝 5 時到着、接岸できないので胸まで海水につかりながら、上陸、必死に荷物を揚げる。(恵忠久 1996)



分解して持参した日の丸を組み立てる。大きさは横 3 メーター、縦 2 メーター、山の中腹に立てる。(恵忠久 1996)

地元沖縄として 鎮魂祈念し 魚釣島慰霊碑 旧古賀村・顕彰碑 建てる

— 魚釣島に上陸したのは、尖閣諸島がわが国の領土であることを示すために日の丸国旗を建てることも大きな目的だった。その時に魚釣島慰霊碑も建てたわけですね。

松田：そうです、魚釣島慰霊碑と旧古賀村顕彰碑も併せて建てたわけです。

日本青年社の衛藤会長は、この島で亡くなった全ての御霊に哀悼の誠を捧げ、鎮魂供養すべきだということで、魚釣島物故者慰霊碑を建てています。

それに比して、私たち地元沖縄側の人間は何1つしてこなかった。遭難慰霊碑にしても、建てたあとは放ったらかしです。石垣市も、遺族も誰一人来ない。これではあまりに情けないですよ。ここで眠る御霊の皆さんにも申し訳ない、恥ずかしい。

そういう思いがありましたから、地元沖縄側として何かやるべきである。やらないといかん、そう決心して、それである時は木材ですが（笑）、これで以て魚釣島慰霊碑を建てたわけです。また旧古賀村・顕彰碑も建てました。2つの碑文にこう記しました。

魚釣島慰霊碑

- 一、昭和二十年（一九四五年）台湾へ疎開中の石垣市民百八十余名を乗せた第一千早丸、第五千早丸が同年七月三日、敵機の銃撃により魚釣島付近で遭難、沈没、内七五名は同島にて死亡す。
- 二、旧古賀村の開発事業に従事中、不幸にして死亡され、この地に眠る多くの先人たち
以上の英霊の鎮魂を心から祈念する
平成八年八月十八日
尖閣諸島防衛協会 会長 恵忠久 ・ ・ 以下略

旧古賀村・顕彰碑

- 一、明治十七年、古賀辰四郎 魚釣島に上陸す
- 二、明治三十年、古賀辰四郎 開拓を開始し、辰四郎、善次父子により、開発が行われ、古賀村の発生を見た。
- 三、旧古賀村では、鳥羽、鳥糞、燐鉱、貝殻、ベツ甲等の採取、カツオ漁、カツオ節の製造、植林、開墾を行う
- 四、魚釣島の開墾面積 六十町歩余、住民 九十九戸 二百四十八名
・ ・ 以下略

私たちが建てた魚釣島慰霊碑は、台湾疎開の遭難者と旧古賀村の開発事業で亡くなった御霊を鎮魂するものです。両者とも、ここで無念の思いで眠っておられるわけですから、その方々を供養し、成仏できるようにと願って建てたものです。

これは日の丸国旗と同じで木材で作っており、すぐ朽ちてしまうので、正式な慰霊碑ではありません。ただ、地元沖縄側として、御霊の皆さまが心安らかに眠れるよう誠、真心を捧

げますと願って建てたわけです。旧古賀村・顕彰碑も同様です。

私たちの心をあのような形にして表したものです。

なお、このことについては恵忠久会長は「尖閣諸島 写真・資料集」（平成 8 年 10 月刊）を著し、その中に述べています。ここに掲載した写真も会長の本から借用しました。



右写真は魚釣島慰霊碑の碑文。戦時遭難者と開拓時代に亡くなった英霊を鎮魂する。左は魚釣島慰霊碑と旧古賀村・顕彰碑を前に記念撮影。中央が恵忠久会長、左隣筆者、右隣奥茂治さん。〈恵忠久 1996〉

魚釣島灯台 上陸規制厳しくなり 維持管理が困難 国へ譲渡する

一話は飛びますが、日本青年社は、魚釣島灯台を、国に寄贈し、現在正式な灯台として、海図に掲載され、国が管理していると聞きました。

松田：あの北小島漁業灯台はその後 2 度にわたって中国か、台湾かの不法上陸者に壊されたので、修復してしばらく使っていました。3 度目に台風か何かで倒壊しました。

それで新しい灯台に建て替えることにしました。発注した機材も全部揃えて船に積み込んで、北小島に向かいましたら、中国台湾が騒ぐもんですから、海上保安庁がどうしても上陸させないわけです。ほんとに政府は情けないですよ。

仕方ないから再建を諦め、魚釣島灯台 1 基で頑張っていました。

中国にとって、日本青年社の灯台は目の上のたん瘤ですから、それに中国は日本政府の弱腰を見透かして外交攻勢を強めて、抗議船が度々押しかけてきました。

平成 16 年 3 月にはとうとう中国人活動家 7 名が魚釣島に不法上陸しました。

幸い灯台は壊されませんでした。航行安全を祈願して建てた尖閣神社と、あの魚釣島物故者慰霊碑の 2 つは壊されましたね。

日本政府はこれ以上中国を刺激したくないから、日本青年社に対する上陸規制を一段と厳しくしてきました。もしも上陸できなければ、灯台の維持管理はできなくなります。

政府は、魚釣島灯台は、船が安全に航行できよう大きな役割を果たしていることは認めました。そのはずで、昭和 53 年に最初に灯台造って、10 年後の昭和 63 年には国際規格に合った灯台を海上保安庁の指導を受けて造って、これに建て替えていましたから。

それで、政府としては、この魚釣島灯台を国の管理に移したい。移したら、正式な灯台として海図に記載できる。また、今後は国が維持管理していきたい。こんな申し出をして来ました。国が維持管理すれば、日本青年社に魚釣島に上陸する必要もなくなりますから、活動は封じ込めることができると考えたわけです。

日本青年社は、灯台を、国に譲渡し、尖閣諸島の活動から撤退するか、これまで通り自分たちで上陸して維持管理して行くか、自分たちでやるなら、政府の厳しい上陸規制に阻まれて、灯台の灯を守り通していくのは困難になることは容易に想像できました。

どちらを選択するか、苦渋の決断を迫られました。

平成 11 年に就任した松尾和也会長（第 3 代）は政府と協議しました。前会長の衛藤さんは、「灯台は決して日本青年社の私有物ではなく、日本国家の貴重な財産である」と明言されていましたし、「元々国がやるべきことをやっている」との考えでしたから、灯台が正式に日本の海図に記載され、国によって維持管理されれば、日本青年社の目的にも合致するわけです。このようなことから、日本青年社は、2005 年（平成 17 年）2 月 9 日に、魚釣島漁業灯台は国に無償譲渡しました。

これは私たちが魚釣島に最後に上陸した 8 年後ですね。国に譲渡したあとは、日本青年社は魚釣島には行けなくなり、また行く必要もなくなりました。



魚釣島に不法上陸した中国人を逮捕、取り調べる沖縄県警、この時に尖閣神社、物故者慰霊碑は破壊された。

（朝日新聞 2004.3.25）

保安庁ホームページ 国への譲渡説明 おかしい 事実と違う？

一 海上保安庁のホームページに、魚釣島灯台のことがあります。海図と灯台の写真、あと国に移管された経緯が紹介されていますね。

松田：そうです。僕は、これ見る度に、実に政府は情けないと思います。

「この灯台は、昭和 63 年に日本の政治団体が設置したのですが、これを譲渡された漁業者が所有権を放棄したため、国庫帰属財産となり、政府全体の判断として、平成 17 年から海上保安庁所管の魚釣島灯台として運用しています」とありますね。これおかしいです。

設置したのは日本の政治団体で、日本青年社とは書かない。これを譲渡された漁業者が所有権を放棄したため国庫帰属財産となった。日本青年社から譲渡されたとも書かない。

また、政府全体の判断として、海上保安庁所管の灯台として運用しているとある。これ日本青年社と政府の双方で取り決めた譲渡条件だったはずなのに、これもおかしい。

国は譲渡する時の話し合いで、国としては日本青年社の名前出たくないと言えば、松尾会長は結構です。その代り、ちゃんと国が漁業者や船舶のために安全が保てるよう灯台を維

持管理してくれるなら、これにこだわらないと、言ったかもしれません。

日本青年社は偉いです。自分たちの私利私欲とか名誉とか、団体の宣伝のためにやってなかったことは、これでも分かります。普通の売名行為の団体だったら、こっちの名前も出せと言いますよ。しかもこの灯台を国に無償譲渡しているわけです。これ建てるのも維持して行くのも大変です。国からもどこからも援助はない、衛藤さんなんかがかき集めた金で、27年間、灯台の灯を点し続けてきたわけですから、この偉業にほんとに頭が下がります。

また、灯台の保守管理で上陸して行く度に、御霊を供養しているわけです。それは衛藤会長の誠、真心でありました。それを実践したのが萩野谷さんら若い隊員たちです。

誰もしない供養は見えない部分の奉仕ですから、マスコミも何も取り上げないです。

初代会長の小林楠扶さんのこの思いは、2代会長衛藤さん、3代会長松尾さんらに引き継がれて、民族派として思想家として、かくあるべきだとして、厳然と貫かれてこられた。

私は衛藤さんには昵懇にお付き合いさせて頂きましたが、気骨ある真面目な方でした。

世間では右翼の親分とか言うかもしれませんが、立派な人格者でした。私もいろんなことを学ばせてもらいました。

日本青年社の皆さんが大変苦勞されて灯台を最初に建て、27年間もこの灯を絶やさず守って来たわけですから、国から感謝状貰ってもいいと思いますよ（笑）。

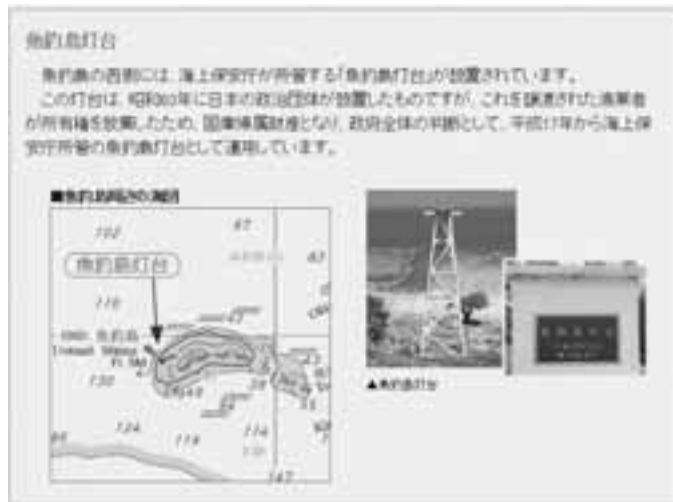
それでも国もマスコミも、右翼とか政治団体とかの色眼鏡でしか見ない。だから灯台を国に譲渡した時は、マスコミはちゃんと報じないし、国もあんな曖昧にした形でしか書かない。

ほんと情けないです。私は日本青年社の隊員でも会員でもありませんが、その時に微力ながらも関わった者として、端にいた一人としてはっきり申し上げたい。あれは事実でないです。

国は曖昧にせず、事実を事実としてちゃんと残すべきだと思います。

遭難慰霊碑 切なく悲しい 1人ポツネン 当てもなく 待ち詫びる

— 国に灯台を譲渡したら、日本青年社は、魚釣島に行けなくなり、行く必要なくなった。遭難慰霊碑には誰も参拝する人はいなくなり、とうとう一人ぼっちになったわけですね。



海上保安庁HPに、魚釣島灯台の海図と灯台の写真、国に移管された経緯が紹介されており、「海上保安レポート 2013年」よりとある。

松田： 日本青年社が灯台建てたのは昭和 53 年（1978 年）です。国に移管したのが平成 17 年ですから、その間、実に 27 年間、灯台の維持管理のために行っていたわけですね。

建てた当初は今の太陽光と違い旧式の電池交換式です。確かあの時は年 4 回位は行ってたんじゃないかな。うちの若いものも応援で何回か行きました。国に移管した後からは、隊員たちは行けなくなって、僕たちも行っていない。

誰も行っていないから、掃き清めも、参拝も、供養も何もしてませんね。

この写真にある通り、遭難慰霊碑は、海を見下ろす岩の上に、この灯台の鉄塔の傍に、1 人寂しくポツンと立っていますよ。

終日、海の彼方を眺めては、ああ誰か来ないかと、来てくれたらと待ち待ち焦がれているはずですよ。

日本青年社の若者たちがやって来た時は、またいつ頃には参りますと報告していたから、これ楽しみにしていました。彼らが来たら、もう騒々しいほど賑やかになり、寂しさも吹き飛んで、心も和やかになったはずですよ（笑）。

だけど、今は誰も来ない。来る当ても何もない海の方に目を凝らしては、水平線に人影が現れて、誰か来ないか、迎えに来てくれないかと、昨日も、明日も、毎日毎日、待ちわびているわけです。もう切なく、悲しいですね。

僕は、生きている人間として、これは本来あるべき姿ではない。こんなことでは、亡くなった尊い御霊に対しては大変申し訳ない。我々は同胞として大変情けないと思います。



灯台鉄塔の傍らに、1人ポツンと佇む慰霊碑
(2017年撮影の「ウェブサイト」より)

遺骨 野ざらしのままある？ 国が責任以て 遺骨収骨 行うべき

— 誰か来ないか、迎えに来てくれないかと言うのは、遺骨を収集してほしいとの願いもあるわけですね。遺骨は高波で海に流されたんじゃないかとの話ですが。

松田： 私たちも探したんですけど、人骨らしきものは探せなかった。前にも話しましたが、あそこ行ったら、確かに不思議なことがあります。島に上陸したとたん 今まで元気だった人がウサーリて、急に発熱したり、起きられなくなりますからね。普通考えられない色んな体験します。こんな体験したら、成仏できないで浮遊している魂がこれさせているんじゃないか、そういう気になりますね。だから、遺骨はあるかも分らんから、ちゃんと探すべきです。あっちこっち探して見つからなければ、遺骨に代わる霊石か何か持って来て、ちゃんと供養、法要すべきです。そうしないと無念の思いで亡くなった御霊は成仏できません。

国か、沖縄県か、石垣市か、分からないが、考えて、ちゃんと遺骨収集なり、供養する必要があります。国の指導で台湾へ疎開に行く途中で、敵機の空襲に遭って亡くなって、また

こっちに辿り着いて亡くなってもいますから、これは国が責任持って遺骨収集すべきです。

また、開拓時代には、この島で、ここで、羽毛とか、カツオ節工場やって、そこで働いて亡くなった人たちもおります。私たちが今日こうしてられるのは、これら先人たちのお陰でもあるわけですから、そこで亡くなった人たちをちゃんと供養しないといかんです。

あの場所はそういう意味でも、良い悪いは別にして、我々現世にある者がしっかりと、御霊の思いというか、願いを受け止めて、きちっとした形で、そこは環境整備をする、遺骨を収集してきれいにする必要はあるんじゃないか。他の国だったらとっくの昔にきれいにしています。日本は、中国にとやかく言われるからと、もう放ったらかし状態です。

尖閣列島は、紛れもない日本国の領土であって、石垣市の一行政区であり、ちゃんとすべきです。戦後 70 年も経って、今日に至るまで、まだこういう形で戦後処理されてないのが情けなく、悲しいです。

とりわけ、尖閣の地元沖縄県に住んでいる我々としては、考える必要があるんじゃないか。御霊の供養、成仏は、右とか左とか関係ないです、政治的立場を超えてやるべきだと思います。我々の同胞が亡くなって、遺骨も拾われずに野ざらしのままです。

御霊の方々は、今日は来なかった。明日は誰か迎えに来てくれるか、明後日なら来るかもしれないと、毎日毎日待ち焦がれているのです。

遺族会 御霊が 何を望んでいるか 考えるのが一番

一 遺族は魚釣島は遠隔の地だからということで石垣市新川の舟蔵に「尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑」を建て、毎年慰霊祭をしています。だけど亡くなった現地の慰霊碑は放置したままではいけない。せめて魚釣島でも慰霊祭はやるべきだと声がありますが、それに対し、遺族会としては政治利用されたくないからと拒否しています。これをどう考えますか。

松田：そのことは新聞でも報道されてますから、よく承知してます。

遺骨収集は国がやるべきであると言っても、すぐに実現できるわけではありません。

問題は慰霊碑と慰霊祭です。石垣市はこの慰霊碑を建てた時、石垣市長も、遺族の方も参列して、御霊を供養するために慰霊祭を行ってます。その後、49 年間一度もここで慰霊祭していません。部外者の私が言うのもなんですが、建てた後は放ったらかしですから、私は真の供養にはなっていないと思います。

だけど、遺族会としては政治利用されたくないからと魚釣島現地での、あの遭難慰霊碑での慰霊祭を拒否しています。これをどう考えるかですよね。人間にはそれぞれ色々な考えがあります。現地で慰霊祭やった方がいいか、どうかは、これは遺族会自身が決めるものだから、他人が口を挟むべき問題ではありません。

ただ私に 1 つ言えることがあるとしたら、この問題を考える場合に、どの立場に立って判断するかということです。向こうで亡くなった人たちは、一番何を望んでいるだろうか。御霊の立場に立って、御霊の気持ちを最優先にして、考えるべきだと思います。

私たち生きている人間の立場で考えると、自分たちの都合、利益を優先しますから、それ

ではいけないと思います。御霊の皆さんが何を望んでいるだろうか。自分たちの祖父母、親兄弟、肉親たちの遺骨が、しかも収集もできず、向こうに野ざらしのまま、無念の思いで眠っているわけですから、遺族としては、彼ら御霊がどうしてほしいかを一番に考えるべきです。そう考えれば、私たちとしては、今の政治的に利用されるとか、遠隔の地だからとか、上陸が難しいとかは、二次的な、瑣末な問題だと思います。

— よく分かりました。お忙しい所、貴重な時間を割いて、お話を聞かせて頂いて、ありがとうございました。

(了)



旧古賀村脇の岩山に建つ灯台鉄塔の傍らで、独り寂しく佇む遭難慰霊碑。
今日も、ひねもす海の彼方を見つめ、参拝者が来るのを、ひたすら待ちわびている。
2012年9月東京都尖閣諸島洋上調査の際、石垣市が同行して撮影。(石垣市2012)

※参考資料

速 報

昭和53年に尖閣諸島魚釣島に建設以来
27年間領土主権を主張してきた
尖閣諸島灯台を国家に移譲!!

平成 17 年 02 月 10 日
日本青年社総本部

私どもが昭和53年に尖閣諸島魚釣島に建設して以来、現在まで27年間にわたって守り続けてきた魚釣島漁場灯台は、政府から正式に海図に記載し今後は国が維持管理を受け継ぎたいとの申し出があったことから、政府関係者と協議を経て平成17年2月9日に灯台を国家移譲致しました。

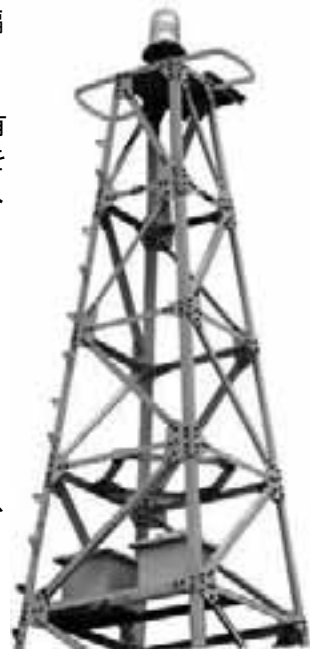
日本青年社が取り組んだ尖閣諸島魚釣島漁場灯台建設と保守点検の意義

尖閣諸島は明治28年(1895)に政府の閣議決定によって領土編入措置が行われた日本固有の領土ですが、昭和43~44年にかけて国連海洋調査団による海底調査によって東シナ海の海底に有望な石油資源が埋蔵されている事が発表されてから台湾・中国が領有権を主張しはじめ、昭和53年8月12日の日中平和友好条約締結を目前にした4月には中国の武装漁船140隻が尖閣諸島海域に侵入し一週間に及ぶ威嚇行動を行うという事件が発生、政府がこの中国の暴挙に何の対応のできなかったことに危機感を抱いた私どもは「尖閣諸島領有決死隊」を編成、同諸島に上陸して領有権を主張するべく灯台を建設、同12日に日本の灯火を点して以来、今日まで27年間にわたって日本の灯を守ってきました。

今にして顧みれば、この27年の間には多くの先輩同志が灯台の保守点検に携わり、数々の出来事がありました。

そもそも尖閣諸島の灯台は海上保安庁の指導を受けて完成し、魚釣島漁場灯台の名称も海上保安庁が命名したのですが、私どもが再々提出した灯台の管理許可申請に対して政府は「対外的な問題が介在しているので暫く猶予期間が欲しい」「現在関係官庁と検討中、結論を延期したい」などの理由で今日まで許可申請は保留にされてきました。

・ 私どもは、これこそ正に歴代内閣と外務官僚の弱腰外交と自己保身の証左であると激しい憤りを抱いたこともあります。そこに本来守るべき国家国益を蔑ろにしてきた日本政府の本質を見ることもできました。然し、この度、政府が尖閣諸島魚釣島漁場灯台の国家管理を鮮明にしたことは、私どもが取り組んできた国益を重視した活動の成果であり異論を挟むものではありません。然し、現代社会において最も重要なことは今日まで国益を蔑ろにしてきた歴代内閣を見るが如く、政治改革、行政改革、司法改革とともに政治家改革が喫緊の課題ではないでしょうか、皆さんもぜひご一考をお願いします。



※参考資料 尖閣列島戦時遭難事件 (1)

21 年前、尖閣で人骨発見？ 戦時遭難者の可能性

仲間均石垣市議



(八重山日報 2017.12.26)

(一部抜粋) 石垣市議の仲間均氏が1996年に尖閣諸島の魚釣島に上陸した際、人の手によると思われる石積みの下に人骨を発見していたことが分かった。仲間氏が 25 日までに、八重山日報の取材に明らかにした。周囲の状況から、1945年に起きた「尖閣列島戦時遭難事件」の犠牲者の可能性がある。石垣市議会は2014年、犠牲者の遺骨収集を決議し、政府に要請行動を起こしているが、政府は中国、台湾との関係に配慮し、具体的な動きを見せていない。仲間氏によると、魚釣島上陸後、東へしばらく歩くと、海岸から約 50 ㍍の場所に人工的な石積みが見つかった。中を覗きこむと、腕の骨のようなものがあつた。周囲にはほかにも 3、4 か所同じような石積みがあり、ほかにも人骨が埋まった可能性がある。尖閣戦時遭難事件の犠牲者の遺族で、元県会議長の伊良皆高吉氏(80)によると、生存者から、父親の高晨さん(享年 54)ら 3 人(注 1)が魚釣島で埋葬された際、のちに判別できるよう、それぞれ北、西、東に頭を向けられ、上には大きな石が乗せられたとの情報を得た。仲間氏の見た石積みは、伊良皆氏の語る、犠牲者の「墓」の情報と酷似している。伊良皆氏は取材に対し「遺骨が島にあるなら、大変嬉しい話だ。自分の体が動くうちに上陸の許可が得られれば、一日も早く自分の目で確認したい」と話していた。

※注 1:3 名は間違いでは？ 魚釣島に置き去りされた 5 名のうち、亡くなった方は伊良皆高晨さんと村山信方さんの 2 人とされています。

※参考資料 尖閣列島戦時遭難事件 (2)

遺骨収集を要請決議 石垣市議会

「高齢化」「名ばかりで」与野党で賛否



(八重山毎日 2014.10.12)

← 石垣市議会要請決議書

(一部抜粋) 石垣市議9月定例石垣市議会(知念辰憲議長)は21日、本会議を開き、尖閣列島戦時遭難事件で犠牲になった人たちの遺骨収集の実現を求める要請決議など、議員提出議案7件を可決した。遺骨収集に関する要請決議は伊

良皆高信氏が提案。上陸の許可や慰霊祭の援助、調査に基づく記録集の作成、資料館を建設する慰謝事業を求める内容で、与党の賛成多数で可決された。

質疑で伊良氏は「組織としての遺族会には話していないが、遺族は高齢化しており、今なら行けると遺骨収集を求める遺族もいる。国が戦後処理の問題として遺骨収集を求めるべきだ」と訴えた。野党側は質疑や討論で「趣旨には賛同するが、今の状況では現実的ではない。名ばかりの決議になりかねない」(長浜信夫氏)、「遺族会に先走って決議するのは、政治的意図があると思える」(前津究氏)などと反対した。

※参考資料 尖閣列島戦時遭難事件 (3)

自衛隊配備反対訴え 遺族会、現地慰霊祭も否定



(八重山日報 2017.7.4)

(一部抜粋) 尖閣列島遭難者遺族会(慶田城用武会長)主催の慰霊祭が3日、石垣市新川の慰霊碑前で開かれた。慶田城会長は式辞で「経済発展の阻害要因となる自衛隊配備は辞めるべきだ」に続き、石垣市への陸上自衛隊配備反対を訴えた。尖閣諸島をめぐり日中の対立を念頭に「石垣市と中国福建省との航路を設置することで、観光や第一次産業が飛躍的に発展する」と述べ、日中友好を訴えた。

一部で魚釣島での現地慰霊祭開催を求める声があることについて、遺族会は会議で2011年の総会で確認した「遺族の考え」を爽快資料として配布。「魚釣島で慰霊祭を挙げることは私たち遺族会が望んだものではありません」と明記した。

1972年日本復帰後の尖閣諸島をめぐる沖縄県の動き

— 沖縄県の漁場利用調整対策会議と尖閣諸島周辺漁場調査について —



元沖縄県水産試験場主任研究員 ^{ともり}友利 ^{あきのすけ}昭之助

1943年(昭和18年) 宮古島市に生まれる。75歳(2018年時)。
1965年(昭和40年) 長崎大学水産学部卒業
1966年(昭和41年) 琉球水産研究所入所、研究員、主任研究員
1988年(昭和63年) 沖縄県水産試験場次長、
1996年(平成8年) 沖縄県水産振興課長、農林水産部次長を経、
2006年(平成17年)～2012年(平成24年) (財)沖縄県水産公社理事長

はじめに

台湾北部海域から尖閣諸島海域は、カツオ、マグロ等の好漁場であり、先島及び沖縄の漁業者に活用され、各種漁業の漁場として利用されてきた。

戦前の1920年～1940年代沖縄県水産試験場が主にカツオ漁場調査を実施し、戦後は琉球水産研究所の名称でマグロ延縄、深海一本釣等の漁場調査を実施してきた。

1972年米国の施政権下から沖縄が本土復帰し、名称が沖縄県水産試験場となったが、漁業調査船「図南丸」の船名を引継いでおり、現在は戦後三代目である。

そして1970年代、尖閣諸島海域は激動の時代に入った。1968年国連アジア極東経済委員会が“尖閣諸島海域に海底石油資源が埋蔵されている”と報告。これを受けて、台湾中国が尖閣諸島の領有権ありと主張。風雲急を告げる尖閣諸島海域“波高し”となった。

そして1978年武装した中国漁船団が大挙して尖閣海域に出現し、底引網漁業を強行している。この事件は沖縄県内の漁業者は強い危機感を持ち、尖閣の漁業を守るべく漁民大会を開催、日本政府及び関係機関等に抗議の声を上げ、要請活動を行った。

他方、1970代は国際的に見ると、カラカス国際法会議(1974年)において、200海里、排他的経済水域設定問題が取り沙汰されたように世界的転換期の時代に突入していた。

海洋は、漁業資源、鉱物資源問題にとどまらず、世界戦略、安全保障上の観点から総合的に判断すべき問題であると、日本水産資源保護協会久宗高氏はいみじくも指摘している。

尖閣問題においても然りであるが、この観点からは筆者の力の及ぶところでない。

1972年日本復帰後における尖閣諸島をめぐる沖縄県は様々な動きをしている。

その中に1978年尖閣諸島についての漁場調整会議と1981年沖縄県尖閣諸島周辺漁場調査がある。筆者は、前者は県水試の一員で、後者は県水産課から世話係として参加させて頂き思い出深いものがある。この2つについて触れて見たい。

1970～80年代における尖閣諸島をめぐる動き

- 1968年 尖閣諸島海域に石油埋蔵資源ありと国連アジア極東経済委員会が報告
- 1970年 台湾が大陸棚条約に基づき尖閣諸島領有権を主張、琉球政府 尖閣領有を表明
- 1971年 台湾、香港、中国が尖閣諸島領有権主張
- 1972年 沖縄本土復帰、日中国交回復、周恩来発言、米中接近
- 1973年 オイルショック、第四次中東戦争、(1978年再価格暴騰)
- 1974年 カラカス国際海洋法会議
- 1976年 日本海に北朝鮮と中間線設定、旧ソ連 200海里設定
- 1977年 米国 200海里設定、日本 200海里漁業専管水域設定
- 1978年 “鄧小平談話” 尖閣領有権問題は“次の世代が良い方法を探すだろう” 棚上げし現状維持とする暗黙の了解
- 4月12日 中国武装漁船団、尖閣海域に領海侵犯
- 4月20日 “尖閣守れ”の沖縄県漁民大会 4月24日中国漁船団退去
- 11月17日 沖縄県漁場利用調整対策会議
- 1981年 沖縄県による尖閣諸島周辺漁場調査

戦後の日本漁業 海外漁場に進出 右肩上がりに 漁獲量増加

戦後の日本は経済復興にまい進し高度成長期にあった。水産分野でも、沿岸から沖合へ、そして遠洋への国策のもとに1960年代には、全世界の海洋に進出し、海外漁場における日本の漁獲量は右肩上がりに増加していた。遠洋マグロ延縄、遠洋カツオ一本釣り、ベーリング海の母船式底引き網、アフリカ、南米沖の南方トロール等である。

他方、沖縄においては、1960～1970年代の海外漁場は、遠洋マグロ延縄があげられる。本土の中古船を購入し、大臣許可指定漁業であるため関係当局の交渉により許可屯数枠を琉球政府は日本政府から獲得し、急成長を遂げ、マグロは砂糖、パインに次ぐ琉球の輸出産品であった。漁場は西部太平洋、インドネシア海域であったが、1962年琉球のマグロ船がインドネシア海軍からセレベス海で銃撃をうけ、死傷者を出すに至った。船舶旗が日の丸ではなく、米国民政府が定めた琉球船舶旗が認識されず、国籍不明であったとインドネシア側は弁明している。米国施政権下に起きた悲劇の一つである。

また、カツオ一本釣り船がパプア・ニューギニア、ソロモン諸島、パラオ等に出漁している、いわゆる南洋基地カツオ漁である。日系、米国の現地法人企業による母船式操業で、沖縄船は売魚契約であった。大部分が宮古の伊良部、池間の漁船であるが、大漁続きで、1978年には5万ト余りの水揚げがあり、その時期前後の数年間、地元が好景気に沸いたことは今でも語り草になっている。

国連海洋法会議で200海里枠組み 対応遅れた日本

当時は沿岸3海里から外の海の水産資源は早い者勝ちの獲り放題であったため、沿岸国、

とくに途上国からの不満の声があがるようになった。

先進国に対抗する漁獲能力を持たない途上国が、漁場を確保するために、排他的に利用できる漁業水域を拡げたいとする動きが出てきた。

1960年第二次国連海洋法会議において、領海の拡大を主張する沿岸国と公海漁場の維持を旨とする日本など遠洋漁業国と対立した。そこで米、カナダが中心となって、領海6海里、その外側に6海里の折衷案が出され、多く国々の支持を得たが、日本のみ反対し、廃案となった。1973年第三次国連海洋法会議において、議論の末、200海里の排他的経済水域の枠組みが確立されている。このことは国際的潮流の背景に資源ナショナリズムに立つ沿岸国の主張はもはや動かし難いものとなったと主張している。

そして1974年のカラカス国際法会議である。この会議の意味するものが何であったか？あまりに水産のみの視角から見ていたので、会議の本質を見誤ったのではないかと懸念し、久宗高（日本水産資源保護協会）が昭和59年水産工学研究推進会議で講演し次のように述べている。



これはなにも、水産関係者に限られたことではなく、わが国では一般に、海洋法の問題は、「あゝあの200海里の問題、即ち水産問題か」と受け取られているかの如くだが、実は「さかな」はむしろさしみのツマで、本命は、超大国の関心事、即ち軍事、海底油田、マンガン団塊等希少資源等、世界企業との利害が真正面からぶつかり合う局面なのである。即ち200海里問題は、世界戦略、軍事的観点から、海域通過に重大関心を持つ超大国と、資源確保に固執する第三世界との間にできた妥協の産物であって、路線とか安全保障とかいう重大問題に深いかかわりを持って総合的に判断すべきであるのに、それらを専ら「水産」の立場からのみ頑なに反対した日本は、この会議の性格、歴史的意義をわきまえぬ“例外唯一の国”—エクセプト・ワンと揶揄されたのである。

ともあれ、グローチェース以来、数世紀に亘って公理として通用してきた「公海自由の原則」が、音をたてて崩れ去ったことに、いかに大なる歴史に遭遇しているかがうかがわれる。そしてこの200海里問題の大勢が、第三世界のイニシアチブで決まったことで、第三世界の地位は著しく強化され、超大国も代償を提供することを余儀なくされ、その恣意を貫くことが出来にくくなった。

日本は200海里問題を“水産”プロパーの問題と錯覚し、対応が遅れたところに悲劇があると述べている。

1、水産庁、国内漁場の資源調査に本腰、各県水試へ調査委託

200 海里水域内漁業資源総合調査で、操業、水揚げ実態を把握

1977 年日本が 200 海里漁業専管水域を設定することに伴い、水産庁は北海道海区、東北海区、東海区、南西海区、西海区のそれぞれの海区における重要魚種について、各県の水産試験場に資源調査を委託することになった。

水産庁の指針計画の説明会が急遽開催されることになり、会議出席の件を当時の崎山憲一場長にお伺いしたところ、“沖縄海区は国境の海区であり、台湾中国に接している複雑な問題が予想される。水産行政担当部局と計画を調整検討すること”の指示を受けた。

南西海区は和歌山～鹿児島～沖縄の太平洋側である。対象魚種はイワシ、アジ、サバであり、沖縄の沿岸沖合漁業の漁獲対象魚種でないため、調査対象種、漁業は、沖縄水試の計画案のおり了解していただき実施することになった。

なお、調査は資源評価を行い、資源管理を行うのに必要な漁獲統計、生物情報等を収集することを目的としている。

調査の内容は、①漁獲量調査、②生物測定調査、③標本船調査である。

①、漁獲量調査

調査対象の魚種、漁業は、曳き縄漁業のカツオ、マグロ、カジキ。深海一本釣りの赤マチ、シチューマチ等。小型巻網のミジュン、ガツン、グルクマである。これら魚種にトビイカ、白イカを加えた。

②、生物測定

現地から漁獲物の一部を送付してもらい水試内で行った。

③、標本船調査

特定の漁業者に、出漁日毎の操業の位置、漁獲物を記録するものである。

また、県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協のセリ帳よりマチ類、ハタ類、イカ類の水揚げ量を調査した。

尖閣諸島の標本船 宮古漁業者 主に曳縄で 浮魚を調査

標本船調査はかなり面倒である。漁業者が厳しい海上労働のあとで、出漁日毎の操業の位置、漁獲物を記帳することになり、調査依頼が可能か当初懸念したものである。

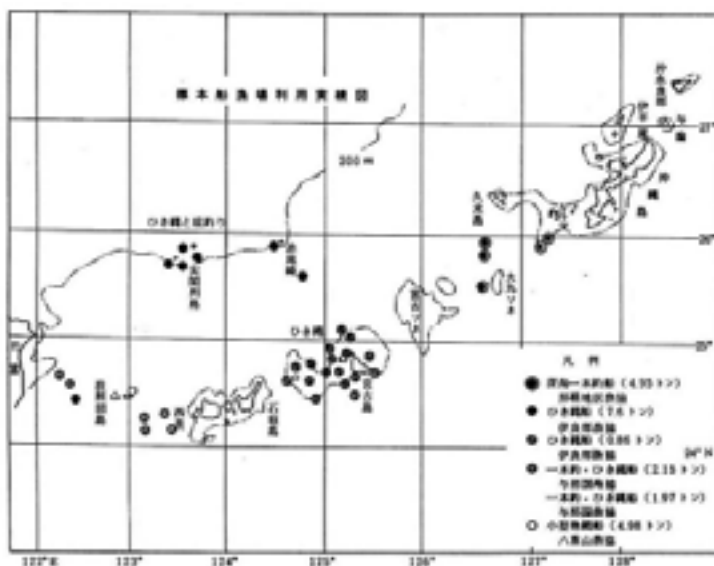
各地の漁業者の皆様にも調査の趣旨、目的を理解していただいた。

与那国漁協の仲嵩組合長と松川氏、八重山漁協の上原組合長と波照間氏、宮古支庁の下地水産業改良普及員、那覇地区漁協組合長の他皆様方に漁業者の紹介、漁獲量調査の協力等、

ご配慮をいただいた。

漁業種類	漁協	協力者	漁船規模	海域	主な対象魚
小型巻網 1隻	八重山	上地源光氏	3ト	石垣島近海	ミジュン、ガツン、 グルクマ
深海一本釣 2隻	与那国 那覇地区	小島、翁長氏 國吉氏	1～3ト 5ト	与那国近海 大九ソネ他	アカマチ、 シチューマチ。
曳縄 4隻	与那国 伊良部	小島、翁長氏 國吉守夫氏 前泊氏	1～3ト 7.6ト 1～5ト	与那国近海 尖閣海域、 宮古近海	カツオ、マグロ、 カジキ

標本船、漁場利用実績図



(「昭和52年度 沖縄水試事報 p7」より)

この標本船調査によって、どの水域では、どの時期に、どんな漁法で、どんな魚が、どの位水揚げされたか、(これは3漁協市場セリ帳より調査)。

漁業の実態が概ね把握できる。

標本船調査の雑感

漁業者探しは、私の知人、海人仲間、市町村の水産普及員、水産担当の職員とか、漁協の組合長、職員に紹介してもらった。漁業者を紹介してもらおうと、直にお会いして、調査の趣

旨を接明し、標本船調査をお願いした。反応はいろいろあった。忙しいからこんなことができるかと文句も言われた。でも、優れた技術を持っている人、儲かっている人は理解が早かった。この調査は大事だ。これから必要なことだからと、協力の意思を示してくれた。

その代わりに、絶対迷惑はかけませんからと、調査方法をしっかりと説明して承諾してもらった。また、漁業者は厳しい海上労働のあとで、操業した日時、漁場、魚種、漁獲量などを調査表に書いてもらうため、何かと勘違い、記入ミスがあったらということで、県水試に送る前に、調査表を漁協の職員にチェックし、整理してから送ってもらう方式をとった。

与那国漁協の場合も、組合長の指示で、松川さんが調査表をきれいに整理してくれたので、助かった。カジキの水揚げも種類もしっかりとチェックしてくれた。セリ帳を見れば、誰が何と揚げたか、毎日把握できる。また漁場はどこそこだとポイントのチェックもできる。

結局、この標本船調査は、漁業者と漁協が二人三脚体制で協力してくれたお陰で、調査はスムーズに運んだ。

あとは成功の鍵は人間関係である。海人はとっつきにくい。口が重くて、気難しい。

でも、海人は不思議である。時間を掛けて付き合いあえば、皆気持ちのいい人ばかり。

宮古ではオトーリ（一気飲みの酒座）もした（笑）。こんなあんなで深く、長く付き合い合ってみたら、人のよさがほんとに分かる。

与那国に行った時の思い出を1つ。与那国町役場の米盛氏にお願いしたところ、漁業者の自宅を訪ねる前に、ひと仕事片づけたいとのことで曰く。「先日ベトナムの漂流難民が乗ってきた船（ボート）が久部良漁港内に繋がれている。これを漁港の奥に移動し、固定繫留したい」とのことだった。1960年代からベトナムは戦争状態にあり、米軍が介入、圧倒的な物量、近代兵器による軍事力で、焦土と化していた。ベトナムの空爆にB52が沖縄から出撃していた。ベトナムの人々から沖縄は悪魔の島と言われていた。胸の痛む思いであった。

1976年ベトナムは南北統一をみたが、南シナ海へ脱出する難民（ボートピープル）の悲劇が報道されていた。南シナ海から遙か彼方の遠方に位置する沖縄に、難民漂流船がどのような経路でたどり着いたのか、その時は感慨と複雑な思いにとらわれたものである。

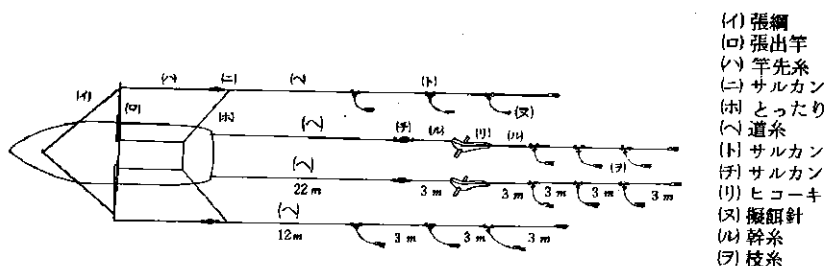
尖閣曳縄標本船、國吉守夫さんのこと

漁業者への聞き取り調査（尖閣研究2012年P77）にこの曳縄標本船の國吉守夫氏が紹介されている。同氏は昭和4年生、終戦直後台湾でカジキ、カツオ船に従事、台湾北部海域のアジンコートから尖閣海域を漁場とした。26歳で宮古に戻る。尖閣海域では深海一本釣、シマカツオ（ウブシュー）漁を得意としている。また漁業先進地長崎で、底立延縄、ジャンボ釣りの漁法を習得導入し、漁業技術の向上、創意工夫に熱心である。年間水揚げ数千万円、地元では「尖閣長者」と呼ばれている。



國吉 守夫氏

尖閣諸島海域における標本船（曳縄）の操業



伊良部のカツオ、スマ曳き縄（「沖縄県の漁具・漁法（1986.3）」より）

なお、曳縄標本船（7.6ト）は赤尾嶼、尖閣列島周辺で主に操業した。

昭和52年度の報告を見ると月別魚種別漁獲状況は下表の通りである。

尖閣周辺で操業した標本船は半年間（4月～9月）で13トを漁獲し、4月にはヤイトを主な、6月以降の半年間はカツオを主に漁獲した。内訳はカツオ39%、ヤイト19%、サワラ4%、あとシイラ、ハガツオの順となっており、その他36%が占めている。

曳縄標本船 昭和52年度月別魚種別漁獲量（単位：kg）

尖閣周辺ひき縄標本船										
月	操業日数	カツオ	ヤイト	ハガツオ	サワラ	キハダ	シイラ	サメ	その他	合計
4	13	250	1,770	100	70	0	40	0	810	3,040
5	12	96	590	0	431	0	80	0	715	1,912
6	15	1,000	150	0	0	0	0	0	1,516	2,666
7	14	2,560	30	0	0	0	0	0	590	3,180
8	7	1,300	20	0	0	0	0	0	320	1,640
9	11	0	0	0	0	0	0	0	910	910
計	72	5,206	2,560	100	501	0	120	0	4,861	13,348

（「昭和52年度 沖縄水試事報」より）

曳縄標本船が実証 — 尖閣諸島は好漁場



左：大正島は曳縄の好漁場、宮古古池間の曳縄船が操業に励んでいる。
右：曳縄で釣り上げたシビマグロ、カツオ、シイラ、オキアジ。(長嶺巖 2011)



冬場の尖閣諸島は曳縄だけでなく、一本釣、底延縄の好漁場でもある。
伊良部島の漁船が、魚釣島沖合でスマ（ウブシュー）を竿釣りしている。
(漢那竜也 2013)

200 海里水域内漁業資源調査 2010 年代も継続実施

沖縄海域（尖閣諸島海域を含む）における沖縄県水産試験場の漁業資源調査は、国の委託費により実施され、200 海里水域内（沖縄海域）資源評価に資することを目的としている。本調査は 1970 年代後半に始まり、その後調査事業名の変更、対象魚種の変化が見られるものの 2010 年代も継続実施されている。

深海一本釣漁業の対象種であるマチ類については主要漁場が宝山、大九ソネ、八重山雌雄返、尖閣諸島海域であること。資源回復のため禁漁保護区の設定するなど、調査研究の進展がみられている。

また沿岸マグロ延縄漁業、パヤオ漁業の対象とするマグロ類、とくにクロマグロについては漁獲統計、魚体調査などを行い、資源管理に必要な基礎データの収集に努めている。

2、中国武装漁船団の闖入と“尖閣守れ”漁民大会

1978年 突如、中国武装漁船団 尖閣領海に侵犯

尖閣諸島に百ト級の武装漁船団約 100 隻が、こつ然と現われ、底引き網操業中の中華人民共和国（中国）船籍の漁船を第 11 管区海上保安部石垣保安部の巡視船やえやまが発見した。1978年4月12日の朝である。

突然の事件に「武装の中国漁船団、先島漁民に強いショック、カジキ漁など始めたばかり、新たな漁場荒らしに怒り」（琉球新報 4.13）。巡視船が、魚釣島領海に侵犯している 16 隻に退去を求めたが応じることなく、「この地は中国の領海、我々は操業する」の趣旨の中国文を板にチョークで書いて示した。領土権を主張したのである。（琉球新報 4.15）

しかも、中国大船団の半数は機銃を装備しており、尖閣諸島領海警備本部によれば船体番号から確認したところ「●漁」上海船籍が多く「青漁」山東省青島市、その他「宇漁」浙江省寧波市、「舟漁」浙江省舟山島、「烟漁」山東省烟台市の船籍であり、総数 140 隻程度としている。これまでの調査から中国漁船団の乗組員に中国の報道関係者か政治局員のような人が乗り込んでいる可能性が強いと発表している。（沖縄タイムズ 4.16）

海上保安庁は尖閣諸島現場海域に九州管区から巡視船を急遽直行させた。

第 11 管区“おきなわ”“のぼる”、第 10 管区鹿児島から“さつま”、第 7 管区門司から“きくち”、第 5 管区“くま”の 350 トン～900 トン級である。（新報 4.13）

なお、水産庁の漁業取締船“青雄丸（377 トン）”も尖閣海域に急行している。（新報 4.14）

台湾漁船が先島の宮古八重山海域や尖閣諸島海域で操業している実態は、かねて以前から散見されていた。漁業取締船、海上保安庁巡視船は常時監視を実施、領海侵入船は退去警告を行ってきた。

1977 年末から 1978 年始めにかけ台湾の小型漁船が領海侵入し、不法操業が目立つとして、県水産課は県水産試験場の漁業調査船“凶南丸（216 トン赤嶺正弘船長）”に印南昇



中国漁船は「魚釣島は中華人民共和国の領土である」との板書を示している。（琉球新報 1978.4.15）

漁業監督吏員を乗船させ尖閣諸島のパトロールを実施している。

しかしながら、今回の中国武装漁船団の大挙襲来は初めてである。

「中国漁船団は・・17日夜半から18日未明にかけて活発な動きを見せていたが、船団はその後、航空機の確認でこれまでの約140隻から200隻にふくれ上がっていたことが判明した。同船団は18日午後6時現在、魚釣島北西方向の領海外で終結の状態。」(沖縄タイムス.4.19)



中国武装漁船団、200隻にふくれ上がって、魚釣島北西沖の領海外に終結している。(18日午後3時20分撮影) (沖縄タイムス1978.4.19)

“尖閣の海守れ” 島ぐるみの漁民大会 千人余 ウミンチュ結集

沖縄県下の漁業者は強い危機感を持ち、尖閣の海を守るべく結集して尖閣諸島漁場を守る漁民大会を開催することになった。1978年4月20日、場所は那覇市興武山球場広場である。主催は沖縄県水産振興会で沖縄県漁業協同組合連合会を始めとする各水産団体との共催となった。当日は北は国頭漁協から南の与那国漁協まで33漁協の組合員、関係者が参集し約1000名余の大抗議集会となった。

『去る十二日、中国漁船団が領海を侵犯するという、われわれの予想だにできなかったことが起きた・・』との経過報告を聞き入る漁民たちの表情は硬い。続いて各漁協は代表が意見表明。那覇の我那覇生精さんは『精神的にも経済的にも損失は計り知れない。火急的、速やかに尖閣を事件発生前の状態に戻さなければ路頭に



領海侵犯に怒り爆発 漁民大会、漁民の死活問題、計り知れない経済、精神的損失 漁場確保強く訴える きょう代表団派遣 (沖縄タイムス1978.4.21)

ことになる』と訴えた。・・『地元八重山にとって晴天のへきれきというべきもの』（八重山）、『操業中、中国漁船団と遭遇、危険を感じて島に引き揚げた。死活問題だ』（伊良部）と次々に事態を憂慮する声で、政府に対する早急な現状打開を訴えた。」（沖縄タイムス 1978.4.21）

大会スローガンは、

- 1、尖閣諸島海域における安全操業を確保せよ！
- 1、尖閣諸島領海の外国漁船操業を許すな！
- 1、尖閣諸島に緊急避難施設を早期実現せよ！
- 1、祖先から受け継いだ尖閣漁場を守ろう！

農家の人々は、土地や山林に依存度が高く、地域共同体として団結力が強い。

一方、漁業者（ウミンチュ）は、個人各々の漁業活動で自立した個人事業者である。そのため異論百出で組織的に大同団結が不得手である。尖閣の海を守る漁民大会に千人余の漁業者が結集して抗議の声を上げたことは特筆に価する。抗議する漁民の熱気と行動は1950年代の島ぐるみ土地闘争エネルギーを彷彿させるものである。



沖縄全県下から集まった漁民たちの表情は険しかった。ふだん、ろくに口もきかない漁民たちは、思いをこめたプラカードを手にハチマキ姿で参加した。「尖閣諸島領海で外国漁船操業を許すな」、「祖先から受け継いだ尖閣漁場を守ろう」・・・と。（「週間朝日 1978.年 5月.5日号」より）

侵犯 12 日間後に 中国船団退去 4 か月後に 日中友好条約締結

稲嶺一郎氏は回顧録の中で次のように述べている。

「4月20日の大会の後、即要請行動に動いた。県漁連玉城徳幸会長、県水産振興会糸満三郎副会長、那覇地区漁協我那覇生精組合長、上原星一久米島漁協組合長、仲里全吉与那原漁協組合長ら代表が上京し、衆参両院の沖特委員会に要請書を手渡し、実情を訴えた。関係各省庁に対しても陳情に歩いた。一方、日本政府は大使クラスの外交交渉を進めていたが、

(私は) 民間レベルの日中友好組織、人脈を駆使することになった。漁民大会の翌日中国の(コウヒョウ) 副首相が『今回の事件は偶発的なもので、平和友好条約の早期締結を望む中国の方針に変わりない』と発表した。そして4月24日、中国漁船団は尖閣海域から退去した。この4ヶ月後日中友好条約は締結された。しかし肝心の尖閣列島問題は結局残されたままだった。』(「稲嶺一郎回顧録 世界を舞台に p563~p564」1988 沖縄タイムス刊)。

結局、日中政府間の協議で、なんとなくやむやのまま処理され提出しまった。

石油資源探査に動く中国 侵犯事件に新たな見方

改めて中国武装漁船団の尖閣諸島領海侵犯事件の背景に政治外交の問題があり、尖閣の石油資源開発に絡んでいることは明らかだった。

尖閣諸島と海底油田と題して「石油資源探査に動く中国、資源獲得競争に名乗り? “侵犯事件”に新たな見方」(琉球新報 1978.4.18)と報じている。

稲嶺会長の「しかし肝心の尖閣列島問題は結局残されたままだった。」の発言は意味深長である。

「・・『沖縄近海及び尖閣列島海域資源開発委員会』(稲嶺一郎会長)が去る6月(中国武装漁船事件から3年後の1981年6月)に発足している。沖縄の財界が中心となり、“和製メジャー”を創設して尖閣の“大油田”に挑もうという壮大な構想。稲嶺会長は発足の会見で『われわれは10年待った。復帰したら(尖閣油田)開発が進むと思ったが、政府は、政府は中国に遠慮している。裏切られた感じであり、だまっていられない』との心境を述べ



た。漁業資源調査(後述する1981年7月沖縄県が実施した尖閣諸島周辺漁業調査)程度で、“裏のけん制”が働く、ましてや油をや・・。尖閣の波は、やはり荒いというべきか。」

(沖縄タイムス 1981.7.28「尖閣の自然(7)一資源調査に同行して一“油田”絡み開発多難」)

さきに、久宗高氏が海洋問題は、何も漁業資源にとどまらず、海底石油問題、安全保障上の観点から総合的に判断すべき問題だと指摘されたのは、まさに達見と言えよう。

3、尖閣諸島の危機に対応した沖縄県の2つの動き

1、1978年11月、県漁場利用対策会議を開催

尖閣漁場の現状把握、可能性を検討

この会議の開催は、中国武装漁船の尖閣襲来から半年後の昭和53年11月17日である。沖縄海域では漁場をめぐる県内外の漁業間の摩擦が懸念されるが、本県の広い沿岸沖合海域の中から特に尖閣諸島海域の漁場利用をとりあげ、いろいろな問題点と可能性を提起し、調査検討していきたいとの会議の趣旨であった。

なお、この機会には沖縄海区漁業調整委員会が主催し、同事務局が呼びかけて関係機関、宮古八重山の漁業関係者が参集した。この時のメンバーは以下の通り。

西海区水産研究所：真子渺浮魚資源部長
石垣市：牧野清（八重山地方史研究家）
琉球大学：西島信昇 ※総合討論司会者
沖縄総合事務局林務水産課：堀川昭夫課長
沖縄県水産課：伊佐次郎課長
沖縄県水産試験場：崎山憲一場長、当真嗣誠漁業室長、友利昭之助主任研究員
沖縄海区漁業調整委員：篠原士郎、長嶺彦昌、仲里全良、大城満助、仲間清一
新垣禎三、渡真利栄宏、玉城徳幸、渡具知裕徳、比嘉昌市
漁業協同組合：上原一八重山組合長、上地亮一伊良部組合長
蔵元広県近海鯉鮪組合、大城肇糸満漁協
漁業者 伊良部漁協：國吉守夫、前泊吉弘、川満実
八重山漁協：金城巖、具志堅用徹、仲元実、池田元

前半は、①尖閣諸島の概観、②海域における県内漁船の操業状況が説明され、③西海区水産研究所真子渺浮魚資源部長による「尖閣諸島海域における漁業とその資源」のテーマで、次いで④八重山地方史研究家牧野清氏による「尖閣諸島と沖縄の歴史的経緯について」のテーマで講演があった。後半は全員による活発な⑤討論だった。

②、尖閣諸島海域における県内漁船の操業状況

①は割愛し、②の尖閣諸島海域における県内漁船の操業状況は、表3の通りである。

漁業形態は、底魚一本釣、マグロ延縄、底延縄、サンゴ業者が周年行われ、5月から10月期には、カツオ、カジキ等の回遊性魚を対象とした釣り、曳き縄漁業が営まれている。昭和52年の業態別、出漁隻数、漁獲高は次表の通りである。

底魚一本釣は104隻577ト、4億59百万円、マグロ延縄は28隻503ト3億36百万円、底延縄19隻311ト3億11百万円と続き、カツオ、曳き縄、サンゴの順になっており、合計は隻数168隻、生産量2590ト、生産額15億16百万円である

昭和 52 年尖閣諸島海域への出漁状況 (漁協別)

(単位: 隻、ト、百万円)

漁協	漁業種類	底 魚 一本つり	曳 縄	かつお 一本つり	まぐろ はえなわ	さんご 採取	底はえなわ	計
那覇地区 漁協	隻 数	18	-	-	-	-	-	18
	生産量	323	-	-	-	-	-	323
	生産額	272	-	-	-	-	-	272
那 覇 市 沿岸漁協	隻 数	1	-	-	22	-	-	23
	生産量	3	-	-	226	-	-	229
	生産額	3	-	-	143	-	-	145
糸満漁協	隻 数	2	-	-	6	-	19	27
	生産量	10	-	-	277	-	311	599
	生産額	8	-	-	194	-	311	513
名護漁協	隻 数	2	-	-	-	-	-	2
	生産量	22	-	-	-	-	-	22
	生産額	18	-	-	-	-	-	18
平 良 市 漁 協	隻 数	18	4	2	-	2	-	26
	生産量	18	4	72	-	0.35	-	95
	生産額	18	2	2	-	17	-	39
池間漁協	隻 数	15	14	6	-	-	-	17
	生産量	2	4	24	-	-	-	30
	生産額	2	3	7	-	-	-	12
伊良部村 漁 協	隻 数	-	7	6	-	-	-	7
	生産量	-	260	377	-	-	-	636
	生産額	-	130	113	-	-	-	243
八 重 山 漁 協	隻 数	24	-	7	-	-	-	24
	生産量	81	-	277	-	-	-	358
	生産額	81	-	55	-	-	-	137
与那国町 漁 協	隻 数	24	23	1	-	-	-	24
	生産量	119	100	80	-	-	-	299
	生産額	56	57	24	-	-	-	137
合 計	隻 数	104	48	22	28	2	19	168
	生産量	577	368	830	503	0.35	311	2,590
	生産額	459	192	202	336	17	311	1,516

(「漁場利用調整対策会議報告 昭和 54 年」より)

隻数では、底魚一本約 104 隻、曳縄 48 隻、まぐろはえなわ 28 隻の順。

生産額では、底魚一本約 4 億 5 千 9 百万円、まぐろはえなわ 3 億 3 千 6 百万円、底はえなわ 3 億 1 千百万円となっている。

③、真子渺氏の講演「尖閣諸島海域における漁業とその資源」

春季 マアジ、サバ漁場形成？ 底魚有用魚分布 エビ籠も有望？

西海区水産研究所真子渺氏の講演の要旨の一部を紹介する。

尖閣諸島海域を 27° N～25° N、125° E～121° 30'E に囲まれる約 46,000 k m² の水域で、魚釣島はほぼ中央に位置し、東シナ海南西部の大陸棚外縁部に属し、水塊配置から黒潮の主流域に位置しており、カツオ、ゴマサバなど南方系浮魚類、やや深みがキダイ、アカムツなどの底魚類が分布し、東シナ海における好漁場の 1 つとなっている。漁場環境は、尖閣諸島海域は黒潮の影響を強く受け、水温の季節変動が少なく、水深は深く、海底は比較的荒い、とくに南側は大陸棚斜面に属し急深の特徴となっている。

浮魚資源を対象とする漁業は大中型まき網漁業（網船 111 ト型）で、尖閣諸島海域のまき網の約 15%。魚種はマアジ、サバが多く、その他はムロアジ類、マルアジである。漁期は秋期から冬期で、春～夏は少ない。漁場別には 123° 以西の漁獲が周年を通して多く、123° 以东は 10 月～12 月に漁獲が増加する。

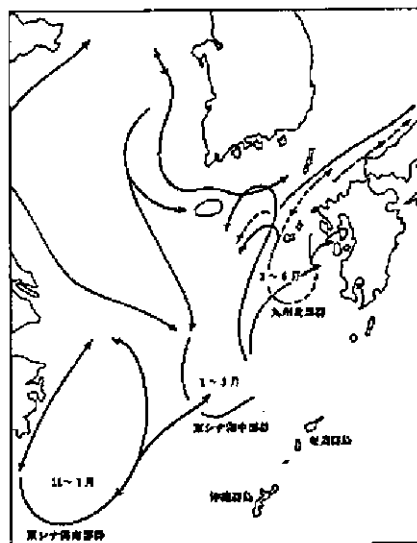
尖閣諸島海域における以西底びき漁船の操業は比較的少なく年間 5600 トで全域の 3% にすぎない。漁業根拠地から遠距離にあり、有用魚が少ないことがその理由としている。漁獲対象はレンコダイが最も多く、次いでエソ、イカである。近年マアジが以西底びきで 1 月～3 月に漁獲が増加している。

尖閣諸島海域の大陸棚斜面域、深海漁場の調査結果を紹介している。

水産庁調査船開洋丸と用船（ベーリング海から締め出された北転船）のトロール調査によると、250m 深以浅では、以西底びきによって漁獲される深み漁場の魚種と共通している。250～500m 層にはオオメハタ、ムツ、カガミダイなど。500m 層以深にはなじみのないグロテスクな魚のみで環境、生物分布の境界にあたるようである。

イカ類については春季と秋季に尖閣諸島海域でケンサキイカが漁獲される。冬季に南下回遊するのではと推測している。

今後の漁場開発については、台湾北方海域に潮境が春季に見られ、マアジ、サバの漁場が形成される。一本釣などによる漁獲を検討すること。深海底魚については、海底起伏が激しいため底びき網の操業は難しい。しかし有用魚は分布している。立縄式延縄、ヒゲナガエビのエビ籠などが考えられる。併せてイカ釣にも触れている。そして専業ではなく、他漁業との兼業が好ましいと述べている。



日本海南西部・東シナ海におけるマアジの系群別回遊想定図（月別産卵期を示す）

④、牧野清氏の「尖閣諸島と沖縄漁業者との歴史的経緯について」講演

明治期に開拓者古賀辰四郎氏の尖閣諸島の開拓、また戦後は、宮古八重山の漁業者がカツオ一本釣漁業を行い、大ナベを魚釣島、南小島に持ち込み、半製品（ナマリ節）にして持ち帰ったことは広く知られた事実である。これら歴史的経緯について講演していただいた。

⑤、参加者全員による討論会

漁業者、研究機関、関係者を交えた活発な議論がなされた。

尖閣諸島の漁場利用の実態を把握し、現状に対する問題と今後の課題がひき出された。

討論会の発言要旨を順不同で以下に紹介する。

サバ こつ然姿消したが・・・

長嶺彦昌（海区委員）：1950年代、久米島沖合の東シナ海大陸棚上で琉球水産（株）がサバはね釣、棒受網操業を行った。当初は大漁であった。が、豊漁のあまり、サバ（ゴマサバ）の価格が暴落した。あれだけ獲れていたサバの群がこつ然と姿を消し、1960年に操業打ち切りになり、結局大きな赤字を計上した。・・・当時、琉球水産は55ト船と90トのサバ釣漁船2隻を持っていた。急に漁獲されなくなってしまい、船と乗組員をかかえて苦慮した。出漁しても漁獲されなくなったので、1960年に打ちきった。結局当時で25万ドルの欠損金を出してしまった。

真子渺（西海区水産研究所）：浮魚資源の変動は著しいものがあり、ゴマサバの資源についても移動したりするよりも減少したと考える。

ダツの追込み ゴマサバの中型巻き 有望

上原一（八重山組合長）：八重山の尖閣諸島海域の漁場利用は19ト型船が夏場にカツオ一本釣、冬場はアカマチ等底魚一本釣の操業している。2～3ト階層は、深海一本釣、曳縄、ベツ甲採捕を行っている。他にダツの追込み、ゴマサバの中型巻網も有望と思われる。・・・八重山の小型まき網の漁獲物は以前はムロアジ主体であったが、昨年からはグルクマ主体に変わってきた。ムロアジはマグロ延縄のエサに使用され、また鮮魚として販路も広いが、グルクマはエサにも不向きで、鮮魚では肉質が軟らかと、市場ではだぶつき販路に困っている。出漁すれば、いつでも満船帰港できるのだが・・・。

曳縄漁場の価値高い 宮古島沿岸の漁獲10倍 標本船データから

友利昭之助（沖縄水試）：私は、主として浮魚類を対象とした漁業を、昨年度から水産庁の委託を受け実施している。「200海里水域内の資源調査」の資料に基づいて述べたい。現在、八重山、那覇地区、伊良部、与那国漁協の協力で標本船を定め調査している。

特に、伊良部漁協からは、尖閣諸島海域で操業している曳縄船（7.6ト）と宮古沿岸で操業している曳縄船（1ト未満）から操業成績を送っていただいている。

尖閣海域の曳縄船は赤尾嶼の西側海域が主漁場になっており、夜釣りや天候の悪いシケ時に、魚釣島島影にきてたまたま周辺海域で操業する程度である。宮古沿岸の曳縄船は、漁場が特定されず、宮古島沿岸一帯に広がっている。下表は両者の操業成績の対比である。空欄は報告もれである。

両者の操業成績を比較してみると1日当の漁獲量は宮古島沿岸では24.4kg、尖閣海域では271kgで単純比較ではあるが10倍である。1人1日当の漁獲量にならしても、尖閣海域では67kg、宮古沿岸では24.4kgであり、同海域の曳縄漁場としての価値を示す一つの指標になるのではないかと思う。

曳縄船の尖閣漁場と宮古沿岸漁場出漁船の漁獲量

尖閣漁場出漁船 FRP船 7.6トン 40馬力 4名									宮古沿岸出漁船 木船 0.86トン 14馬力 1名										
年月	航海数	有漁日数	漁種別						計kg	年月	出漁日数	有漁日数	魚種別						計kg
			カツオ	キハダ	ソウダ	サワラ	シイラ	底物					カツオ	キハダ	ソウダ	サワラ	シイラ	アオリイカ	
52-7	1	3	850	250	-	-	-	1,100	52-7	5	2	18	30	27	8	-	-	83	
8	5	13	3,410	750	-	40	-	4,944	8	18	9	66	183	-	43	6	-	485	
9	4	12	427	200	-	310	-	1,473	9	20	18	-	949	-	29	-	-	58	
10	3	11	-	-	-	764	-	1,290	10	19	17	-	610	24	-	-	-	118.5	
11	-	-	-	-	-	-	-	-	11	14	11	-	-	-	-	-	117.5	52	
12	-	-	-	-	-	-	-	-	12	22	21	-	-	-	-	-	135	451.5	
53-1	2	11	-	-	-	126	-	912	1,038	53-1	13	13	-	-	-	-	-	119	
2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	10	10	-	-	-	-	-	-	120.5	
3	1	2	-	-	-	-	-	350	350	3	-	-	-	-	-	-	-	-	
4	1	6	-	-	800	445	60	800	2,105	4	15	15	-	-	103	12	41.5	15	
5	2	7	-	150	1,650	170	10	970	2,950	5	16	13	160.5	10	27.5	12	53.5	-	
6	1	1	-	200	1,000	-	-	-	1,200	6	16	15	142.5	9.5	36	100.5	106	-	
計	20	66	4,687	1,550	3,450	1,855	70	6,289	17,901	計	168	144	387	1,791.5	217.5	204.5	207	507	790.5

月平均航海数	2.2回	月平均出漁日数	15.2日
1航海当日数	3日～7日	1日当漁獲量	24.4kg
1日当漁獲量	271kg		

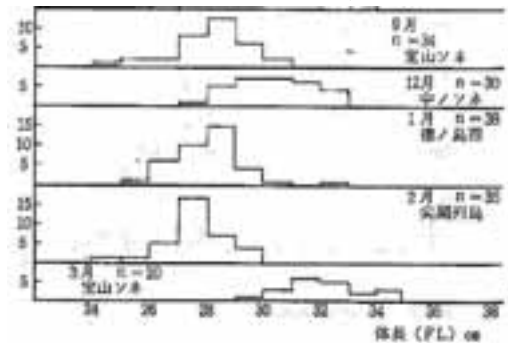
(「漁場利用調整対策会議報告 昭和54年」より)

マチ類 年平均水揚げ千3百ト余

当真嗣誠 (沖縄水試) : 本県の底魚類を対象する漁法として、深海一本釣り、底延縄、立延縄漁業が営まれ、極めて重要な漁業となっている。対象魚種はいわゆるマチ類である。この12年間の平均水揚げ高は1,371トであり、年により多少の変動はあるが、横這い状態で推移している。昭和40年代と現在では漁船規模、漁労装備、漁具等に大きな相違がある。セリ市場は県漁連、那覇地区、糸満の夫々で水揚げが多く、マチ類の中では、アカ

魚体 年々小型化傾向

ヒメダイの月別体長



(「沖縄水試事報 昭和54年度」より)

マチ、シチューマチ、マーマチ、クルキンマチの4種が91.5%を占める。

試験場の魚体測定結果によるとアカマチとマーマチ魚体は年々小型化傾向にある。シチューマチ、クルキンマチはとくに年変化は見られない。赤マチの年齢と体長は明らかでないが、シチューマチは1年魚12cm、2年魚24cm、3年魚29cm、4年魚34cm、5年魚38cmの成長曲線を画くと言われている。

安全操業施設 造ってほしい 早急に必要

上地亮一（伊良部組組合長）：伊良部漁協は尖閣諸島海域に大きく依存している。とくに赤尾礁付近では周年操業している。伊良部漁協所属船はカツオ一本釣、曳き縄、底魚一本釣他の漁業に従事している。尖閣海域は操業の安全確保の面で問題がある。

1つは赤尾礁が米軍の爆撃演習地になっているため、出漁制限をうけ、大きな損害を受けている。

2つは、避難港の問題がある。昨年伊良部漁協の船が1隻遭難している。

係留ブイなど漁船を安全に係留できる危険防止施設の設置を希望したい。

篠原士郎（海区委員）：伊良部漁協のカツオ漁業は尖閣諸島海域、なかでも、赤尾島の西側漁場に大きく依存していることであつた。もし、同海域にブイ等の安全操業施設を設置した場合は、出漁隻数がふえ、漁獲がさらに増大すると見込まれるのか。

上地亮一：資源としてはまだまだ余裕があると思われるので当然に漁獲の増大は期待できる。

國吉守夫（伊良部漁協）：私は船長として尖閣死闘海域を主漁場に操業している。カツオ釣の場合、3時ごろエサ取りに出漁する。約8時間で赤尾礁西側の漁場に到着し、操業時間は2～3時間、短時間で4.5トンのカツオを釣り帰港する。

尖閣海域の海底地形は起伏がないため、投錨しても錨がかからず、夜間に休息をとる場合も、船は漂泊している。漁場はすれすれに形成され、手を伸ばせば岩に届く程に接近して操業している。

イセエビ、夜光貝、高瀬貝の磯根資源 豊富 可能性探るべき

池田元（八重山漁協）：私が他の漁業者から聞いたところによると、尖閣海域には、イセエビ、夜光貝、高瀬貝、甲イカ、タイマイなどの水産物資源が豊富であるという。40年前の話であるがイセエビをムキ身にして300kg位獲ってきたという事例もある。このような先達者の話をきくと埋もれた資源があるような気がしてならない。魚類以外の水産動物についても調査を進め、漁業の可能性を探るべきだと思う。

篠原士郎：イセエビ類、貝類、甲イカ類を対象とした最近の事例にないか。

池田元：イセエビ、夜光貝、甲イカについては聞いている。ただ、漁業者特有の漁場の閉鎖性から、尖閣諸島海域と答えるだけで、はっきりした位置は教えてくれないので、それ以上は詳しい場所を聞くことはできなかった。

複合操業なら 経営成立 大陸側漁業資源 データ分析必要

蔵元広 (県近海鯉鮪組長) : 尖閣諸島海域は高級魚の漁場であるが、真子先生の話にあったように、単一形態の漁業を営むことは難しいと思う。やはり漁期に応じて別形態に転換していくような複合の操業形態をとらないと漁業経営としては成立しえない。ただ、この場合、それぞれに応じた装備をしないといけないというのが現実である。

司会西島信昇 (琉球大学) : 沖縄海域側の資源についてのみ話しているが、大陸側資源の利用方途についても考えられないか提起願いたい。

真子渺 (西海区水産研究所) : もうすこしデータ分析しないといけないと思う。

先程、話があった潜り漁業について興味をいただいている。

総括 今回提起された問題・課題 今後 調査検討望ましい

司会の西島信昇氏は討論の総括を次のとおり述べている。

- 1、尖閣諸島海域は優れた漁場であることは全体の一致した意見である。係留ブイが設置されれば、出漁船は増加し、漁業生産は上がる。
- 2、尖閣諸島海域の大陸棚斜面域の水深 500m 以浅ではかなりの有用魚が存在し、立縄式延縄、エビ籠漁業の導入が示唆された。
- 3、これまで魚類を対象とした釣、網漁業のみを念頭において当海域の資源を論じてきたが、イセエビ、夜光貝、高瀬貝などの磯根資源や甲イカ、タイマイなどの水産動物も豊富であり、潜り漁業の可能性も大きい。今後資源調査を検討すべきである。
- 4、今日の会議は厳しい 200 海里時代に対応して、地先沿岸漁場の高度利用方途を見出すこと、特に尖閣諸島海域の漁場利用が当面の課題であるとして討論を行った。現地で操業している漁業者、研究機関、関係者から資料、問題提起があった。現状を把握し、そして可能性を見出して行くというのが目的であった。今後は提起された問題を調査検討していくことが望ましいと総括している。

これが次に述べる沖縄県の“尖閣諸島周辺漁業調査”に引き継がれる。

なお、同対策会議の内容は、「漁場利用調整対策会議報告—尖閣諸島海域の漁場利用について—昭和 53 年 11 月 17 日」(沖縄県農林水産部 昭和 54 年 1 月刊)にまとめられている。



2、1981年7月、沖縄県による尖閣諸島周辺漁場調査を実施

西銘知事 尖閣諸島の漁業基地 可能性検討

昭和 56 年の新年早々沖縄県西銘知事が尖閣諸島に県の調査団を派遣するとの情報が流れた。中国武船団の尖閣襲来、沖縄漁民の抗議大会から 3 年後である。

「西銘知事は・・・とくに漁業振興の推進をはかるため、同諸島の活用を構想し、・・・56 年度に知事自らが団長となり、・・・尖閣諸島の基礎調査を実施したい意向だ。調査団は各分野の学者、専門家、県当局などで構成し、石垣市をベースに、空から海から県警へり、海から水産高校実習船、水産試験場『凶南丸』、チャーター船を動員したいとしている。」(沖縄タイムス・1981.2.3・「」)



(沖縄タイムス 1981.2.3)

尖閣諸島の波高し

外務省、慎重な対応求める

この背景には「中国漁船船団約百隻が尖閣諸島を侵犯する事件があり・・・その時も日中政府間の協議で、なんとなくうやむやのまま処理された。今回の漁業調査は、政府の煮え切らない態度にシビレをきらした県が、先手を打って実力行動に出たともとれる。最近では経済界が石油資源開発委を発足させて、尖閣油田へねらいもつけている。・・・去る 2 月『私が団長になって尖閣に乗り込みたい』と打ちあげた。知事自らが島に上陸するというビッグニュースにマスコミ陣も色めき立った。」(沖縄タイムス・1981.7.14・「尖閣列島の波高し」)

ところが、中国は県の漁業調査を非難し、日本側に中止を求めてきた。「県は・・・11 日間の日程で尖閣諸島周辺の初の漁場調査を実施する。調査団は喜久山農林水産部長を団長に水産試験場、琉球大学のスタッフなど総勢 50 人。当初、西銘知事が団長となる予定だったが・・・知事不参加・・・尖閣諸島をめぐる中国との領有権問題は依然としてたな上げ状態にあり、日中友好関係への影響を配慮した外務省が知事に対し『慎重な対応』を求めた、との見方が有力だ。」(「琉球新報」・1981.7.8・「外務省、慎重配慮を望む」)



(沖縄タイムス 1981.7.14: 世事批評)

このように、中国、台湾が領土権を主張し緊張した国際情勢にあったことから、沖縄県が 7 月 11 日から実施する尖閣諸島の漁場調査は大きな注目を集めた。

尖閣漁場調査 沖合漁業資源と沿岸磯根資源、2つを調査

尖閣諸島周辺漁場の利用開発を促進するため、海上班と陸上班の2つに分かれ、
A：沖合漁業資源調査、B：沿岸の磯根資源調査を実施した

調査団の構成



主な調査項目と調査参加者は下記の通りである。

A：尖閣諸島周辺海域沖合漁業資源調査

- 浮魚漁場調査（アジ、サバ、ダツ）
- 底魚漁場調査（マチ類、）
- 漁場環境調査

水産試験場 次長：嘉数清 漁業主任研究員：川崎一男 研究員：喜屋武俊彦
琉球大学理学部大学院生：白神悟志 北海道大学水産学部大学生：西銘史則
財団法人水産公社事務局長：桃原仁一 伊江漁業協同組合：又吉久保
水産試験船「関南丸」（216.09ト） 船長：赤嶺正弘



沖縄県水試場所属・水産試験船「関南丸」（216.09ト）

B : 尖閣諸島沿岸の磯根資源調査

海岸魚類、貝類など底生生物調査

イセエビ類調査

海藻類調査、他

琉球大学理学部 部長：山里清 助教授：西島信昇、諸喜田茂充

熱帯海洋科学センター助教授：香村真徳

理学部大学院生：酒井一彦

水産試験場 増殖室主任研究員：当真武

研究員：島袋新功

八重山支場研究員：大城信弘、

渡辺利明、勝俣亜生

県農林水産部水産振興課

友利昭之助、上原孝喜

県総務部広報課：伊波久雄、山城直吉

拓洋土木調査船ぐるくん 船長：内間良喜

潜水土：横井兼典

調査船ゆたか3号 船長：大城兼一



尖閣漁場調査をとりまとめた「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」
(沖縄県農林水産部 昭和57年3月刊)

西銘知事の思い出

今回の尖閣諸島の調査については、定例の知事を囲んでの記者懇談会がもたれた折、尖閣諸島が話題になったことが、事の発端となったと伝えられている。

今回の学術調査団（磯根資源調査）の魚釣島上陸及び滞在期間中は、海上保安庁の巡視船の監視のもとに行われている。当初、調査団長は知事自らとのことであったが、時間経過とともに団長は部長、課長と降格してゆき、終には、現地の調査はヒラの係長（筆者）が連絡役、世話係として同行することになった。様々な圧力が内外からあったであろうと想像に難くない。調査団の出発以前、東京出張から戻った課長さんは沈痛な面持ちであったことが記憶に残っている。しかしながら、たかが一県の学術調査団の派遣に過剰に反応することは、大国の沽券にかかわるものではないかと思ったものである。

西銘知事は在任中に、ラバウルなど訪問し、南方カツオ漁業に頑張っている沖縄漁民の皆さんを激励している。

また、魚食普及の講演会で「カツオの味噌あえも、グルクンの唐揚げも美味しいが、何といてもエーグワーマース煮が一番だ」とあいさつし、会場を沸かせた。

知事は中々のイマイユの食通であった。

A：沖合漁業資源調査

調査日程

昭和 56 年 7 月 11 日、15：00 糸満漁港を出港。12 日、14：45 調査海域に到着して直ちに浮魚資源調査開始、15 日の 1：30 まで同調査を実施した。

15 日、魚釣島及び南北小島周辺の沿岸域におけるシジャー（オキザヨリ、タイワンダツなど）の蟻集状況調査を実施。

夜は 25° 50'N、123° 21'E から漂泊して集魚灯による集魚試験。

16 日魚釣島西方 8 マイル付近の海域で底魚漁場調査（底立て延縄釣獲試験）を実施。夜は南小島の北 0.5 マイルの所で停泊して集魚試験。

17 日、朝から波浪が高く、南北小島東邦海域における底魚漁場調査が不可能になったため予定を変更して、漁場環境（海洋観測）を実施。

18 日、台風 8 号の発生により波浪がますます高くなる中で 13：30 海洋観測を終了。台風避難のため船浮港へ向かう。19～20 日：台風避難で船浮港に停泊。

21 日、8：00 船浮港を出港、帰途につく。22 日、8：30 糸満漁港へ入港。

①、浮魚資源調査 報告：川埜一男

東シナ海における浮魚類に関する調査研究並びに魚獲統計に関する報告書は、水産庁西海区水産研究所、南西海区水産研究所から以前から刊行されている。

沖縄水試の前身琉球水産研究所ではサバはね釣り隆盛り時の昭和 30 年～34 年および昭和 27 年～39 年に調査が実施されているが、

近年は同海域では 浮魚類に関する調査はほとんど実施されていない。

この報告は浮魚類の魚群布調査の結果を報告する。

調査方法

調査範囲は 25° 46'N～26° 30'N、122° 30'E～124° 00'E に囲まれた範囲で、緯線に沿って 10 マイル間隔に 6 定線を設定し、昼夜連続航走しながら魚群探知機による魚群反応を調査した。周波数 50kc、測深範囲 0～260m レンジとした。

魚探記録から群れの長さ（L=哩）、高さ（H=メートル）を測定しその断面積 $L_i \times H_i$ を単群の魚群の魚群量指数とした。魚群反応がみられた場合は停船し、多鈎釣（ハイカラ釣）サバ用 50 本掛 7 基を用いて釣獲試験を試みた。

昼間の航走中は目視観察と曳き縄による表層魚の分布調査を、漁獲物は魚体測定、生殖線、胃内容物調査を行った。

調査は昭和 56 年 7 月 12 日 14：45 から 15 日 01：30 まで行った。

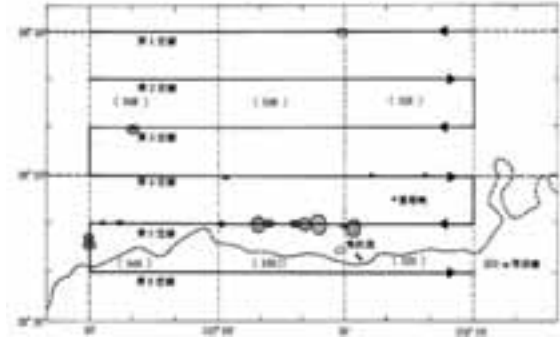
魚群の分布状況および魚群量

魚群探知機を作動し航走した距離は延 590 マルである。魚群反応がみられたのは 17 回、合計魚群量指数は 13.79 を示した。

右図に見る通り魚釣島北～北西海域では、魚群反応 10 回、魚群量指数 10.38 と高い数値であった。魚種確認のため多釣鉤を行ったが釣獲はなかった。この大群は底魚釣の混獲物、および水産庁、南西水研（俊鷹丸）の調査報告からほとんどサバ類（ゴマサバ）と類推される。魚群の遊泳層は 30m～100m の中へ低層であった。

浮魚資源調査航跡図及び魚群分布図

() の中は農林漁区番号



目視観察および曳縄釣獲試験について

魚群発見数は 17 群で、魚種の確認できたのはシイラ 9 群、カツオ 2 群、サバ 1 群であった。また流木付き 4 群、鳥付 3 群、素群は 1 群から釣獲された。釣獲尾数はシイラ 28 尾、サワラ 12 尾で、シイラは流木付きと鳥付群から釣獲され、サワラは流木付きであった。大きさはシイラ尾叉長 47.1～60.2 cm、体重 0.95～1.90 kg の小型魚、サワラは 111.2 cm 7.8 kg の 1 尾が揚ったが残りの 11 尾は 61.8 cm 1.2～2 kg の小型であった。シイラの胃内容物は、カニ、エビ類もみられ魚類ではトビウオ類が主であった。

②、シジャーの蛸集状況調査 報告：賀数清

魚釣島及び北小島の距岸 1 マル以内の沿岸域において、伊江島出身者などの魚業者が乗った糸満の漁船により、マーシジャー（オキザヨリ）やヒラシジャー（ハマダツまたはタイワンダツ）の追込み網漁業が昭和 35 年頃まで盛んに行われていた。

「…ダツ(方言でシジャー)のシーズンにはいり糸満町の漁夫は荒れがちな冬の海でのダツの追い込みに必死になっている。ダツは 11 月から 2 月までが漁期だが、こしは 7 日までの 1 ヶ月余ですでに 3 万 5 千^キを水揚げし、昨年中の水揚げ高、1 万 8 千^キの 2 倍に達した。同町はかつてないダツの豊漁に活気を呈している。糸満独特のダツ追い込み漁は 15 トン以上の母船 3 隻に、クリ舟 4 隻がつき、はえなわでクリ舟が押し込んで母船に揚げる。母船 3 隻のうち 2 隻は漁場と糸満港間の運搬にあたり、漁夫は漁期の終わるまで漁場に残留。こしは台湾近海の尖閣列島で 100 人近くの漁夫が出漁しているがひと航海で 1 万数千



尖閣列島近海で追込漁でダツ漁に励む (琉球新報 1966.12.10)

キを水揚げするという豊漁。またダツの値段が年末のため上がっているとあってホクホクだ。・・・」
(1966.12.10・琉球新報・「ダツ大漁。1カ月で昨年の2倍、糸満漁夫はホクホク顔」)

この調査は、同海域におけるシジャーの蝟集状況を調べるとともに、現在のシジャーまき網漁法により操業できる海況であるかどうかを見るために、又吉久保氏が行った。同氏は、伊江島漁協に所属し、トビウオ及びシジャーのまき漁業を現に営んでいる。シジャーの蝟集状況調査は、ゆっくり航走しながら船尾から枯れススキ（本来はワラを使用することが多いとのことである）を連続的に投入して、それに対するシジャーの反応状況を見て判断する伝統的な方法で行われていた。

調査結果は次のとおりであった。

- 1、今回の調査ではマーシジャーもヒラシジャーも群れをつくっている状況にはない。同海域で群れをつくり漁場として利用できるのは、かつて追込網漁業がおこなわれた時の漁期（旧暦の10月頃から正月頃まで）であろう。
- 2、同海域での潮流は激しく複雑であるので、シジャーまき網の操業には十分な注意が必要であるが、魚釣島の南側及び西側で操業することは可能である。



シジャーの蝟集状況調査、(魚釣島南側にて)
(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

③、マチ類底魚 漁場調査 報告：喜屋武俊彦

釣獲試験は 昭和56年7月16日に大陸棚斜面域、魚釣島西8マイルと6マイル、大陸棚上42マイルの3地点でI回ずつ実施した。使用した漁具は立縄式底延縄である。1漁場に釣鉤5本付の25籠を2連結してI組とした。投縄後、魚群探知機で水深、海底地形を調査し、2時間経過後ラインホーラーで揚縄した。

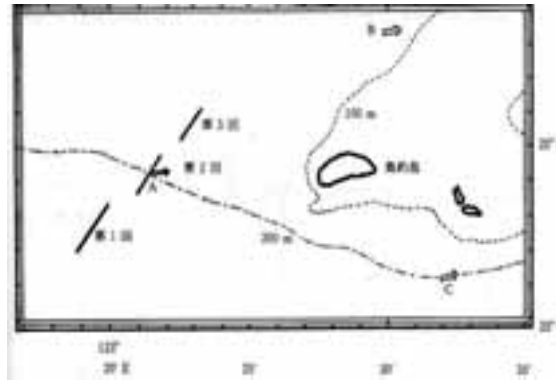
調査海域の海況をみると、魚釣島の北側と南側は海速 1.4 ノット、流向は東、魚釣島西側は流速 0.7 ノット、流向東北東で、黒潮主流域を示していた。また渦を巻いた潮目がいたる所に観察された。表面水温 28.8℃、50m 層 24.6℃、100m 層 19.4℃、200m 層 16.8℃で、水温躍層は 50m 層付近にみられた。

第 1 回目の釣獲試験は魚釣島西側 8 マルの地点、水深 206~218m、起伏のあまりない地形であった。釣獲状況は 7 種 18 尾、漁獲量約 20 kg、有効釣獲率 7.2%、魚種はキダイが最も多く、次いでハナフエダイ、マハタ、マダイ、アカアマダイ、ヨリトフグ、ウツボ類であった。

第 2 回目は魚釣島西側 6 マル、水深 150~180m、起伏の激しい海底地形である。釣獲状況は 8 種 24 尾、37 kg の漁獲量である。有効釣獲率 17.9%、魚種はアオダイが多く、カンパチ、サメ類、ヒメダイで、シマアオダイ、アオバダイは夫々 1 尾であった。

第 3 回目は魚釣島西側 4 マル、水深 146~150m、大陸棚上の起伏の少ない地形であった。有効釣獲率 3.3% と低く、ヨリトフグ、ゴマサバが漁獲された。

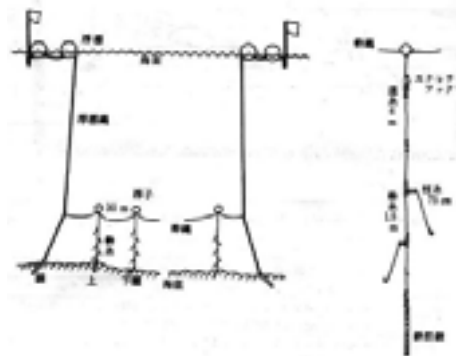
調査海域、G E K、B T 観測点



有効魚種は操業場所による魚種組織の違いがはっきりしていた。アオダイの体長組成を魚釣近海 28~35 cm と他の海域 32~47 cm と比べると小型であることが明らかである。マハタ体長 36.6~55.2 cm、キダイ体長 20.0~25.4 cm、ヒメダイ 24.4~29.2 cm であった。

尖閣諸島周辺海域の魚釣島周辺を黒潮本流があり、東向き強い潮流がみられた。今回使用した立縄式底延縄では、錘りの調整、浮標の調整等で十分に操業可能と思われる。

立縄式底延縄の構成と操業



釣獲試験が 3 回のみで充分とは言えないが、1 回目と 2 回目の魚種組成の違いは、漁場水深の違いによるものと思われた。

魚種別の生息水深をみると、キダイは海底近くに、アオダイは海底から少し浮上して生息しているものと思われた。他の海域漁場と比べると、沖縄本島北西側の東シナ海大陸棚斜面域より、有効釣獲率等から尖閣海域の方が漁場価値は高いと思われる。

また、尖閣諸島周辺海域のマチ類は一般に小型魚が多いとの漁業者の情報があるが、今回

の調査でもアオダイは従来の他海域の漁場より小型であった。これは今回の操業場所によるものか、今後の調査資料の集積によって検討していきたい。台風 8 号の接近により魚釣島北側海域での試験操業を断念した。

今回の釣獲試験で漁獲されたアオダイ（方言名シチューマチ）、ヒメダイ（方言名クルキンマチ）の消化管内容物と生殖腺の調査が佐多忠夫（鹿児島大水産学部大学院）、西銘文則（北海道大学水産学部大学院）、白神悟（琉球大学理学部大学院）によって行われた。

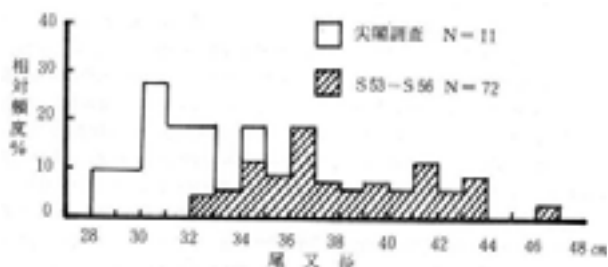
アオダイの胃内容物は 2 個体から、腸内容物は 9 個体から得られた。アオダイは尾叉長 28.9～34.0 cm 体重 0.47～0.60 kg で、消化管内容物の重量は 0.13～10.40 g であった。内容物はオキアミ類、コペポダ類、端脚類、矢足類仔魚（釣餌のイカ足）で優占種はオキアミ類で動物プランクトンの出現が多い。アオダイの食性として動物プランクトン食であると考えられる。アオダイの生殖腺重量は 0.05～0.19g で、非常に小さく未熟である。2 個体は♀であったが、残りは♂♀の判別不能であった。未成魚であった。

ヒメダイは 26.7～31.9 cm、0.3～

0.6 kg（3 個体）で胃が反転していたこと。消化が進んでいたこともあって、1 個体の腸内容物はコペポダ類、オキアミ類が僅かにみられた。ヒメダイの生殖腺の判別から♀が 2 個体、生殖腺重量は 18.34g と 27.81g と大きく、卵巣内の卵径は 0.8～0.85mm であった。

今回はサンプル数が少なかったため、十分な結果が得られずとしている。

アオダイの体長組成



④、漁場環境調査 報告：金城清昭

調査は昭和 56 年 7 月 12 日から 7 月 18 日まで、図南丸で実施された。

浮魚調査時、底魚調査時にも海洋観測を行い、とくに石垣島北から、魚釣島北方まで観測点を設定して行われた。

調査項目は、転倒温度計、及び、BT による水温 塩分観測（深度別）、G E K による表面流況観測、各層観測点で栄養塩類及び魚卵、稚仔採集である。

今回の G E K 流況観測では、台湾東方から与那国西、東シナ海に入った黒潮は、流幅 40 マル、最強流 2.2 ノットで魚釣島を洗うように東方に流出していた。1973 年長崎海洋気象台の観測では石垣島北方海域の黒潮は、流速は弱く、流向・流路が安定していなかった。また第 11 管区海上保安本部の G E K データからも流向流路が不安定であったとしている。

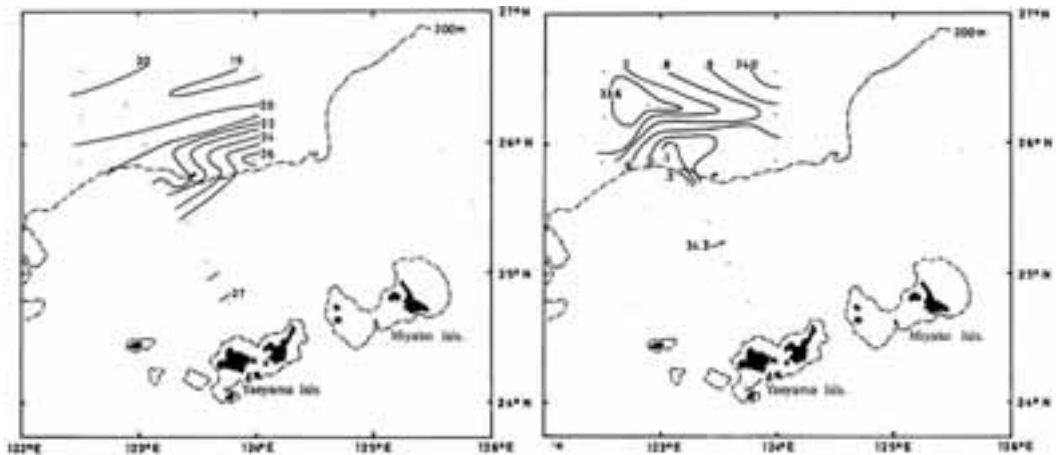
表面水面温は 28℃～29℃台であった。大陸棚上の中底層の水温分布を見ると冷水の突っ込みが北東側から、北西側から逆に暖水が突っ込みが見られた。表面塩分は大陸棚上

33.51%、黒潮域は 34.23~34.33%で大陸棚上から低塩分水の張り出しが見られた。夫々の水塊の特性を示すダイヤグラムから大陸棚上には高温低塩分、魚釣島の南から石垣島にかけて高温高塩分を示した。従って魚釣島周辺の大陸棚縁辺部は黒潮系水と大陸棚沿岸系水の混合域であることを示している。

栄養塩類（リン酸態リン、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、及び三態窒素）の測定結果と分布状況を大陸棚上～黒潮流域～石垣島北側まで検討している。この海域の栄養塩類は大陸棚沿岸水と湧昇水により海底から供給される。観測結果から魚釣島北側の底層では高い濃度を示し、黒潮流域、石垣島北ではリン酸塩、三態窒素とも低い値を示している。垂直分布から栄養塩類の等量線の上昇が大陸棚斜面に沿ってみられ、これは深層水の湧昇を示していると思われる。これも長崎海洋気象台が、かねて長期にわたり観測している。

沖縄北西方の大陸棚縁辺での結果と同様であるとしている。

なお、今回の観測結果は、沖縄沿岸、黒潮域は貧栄養水域であり、大陸棚上はより栄養塩類が高いことを裏付けるものである。



75m 層水温水平分布 (July12~18.1981)

表面塩分水平分布 (%) (同左)

⑤、卵、稚仔魚調査 報告：喜屋武俊彦

本調査は魚釣島北側から石垣島にかけて、6 定点を設定し、丸稚ネット（1.3m 口径モジ網表層 10 分曳）、丸特ネット（口径 45cm、垂直曳 0~150m 深）で採集された稚魚、仔魚、魚卵等を査定するものである。魚介類はフ化後、幼生・仔魚・稚魚のそれぞれの段階で姿形が変態していく。これらを分類し査定していくことは高度な専門知識と経験が求められる。

今回の調査の丸稚ネット出現魚種は、稚仔魚 24 科 37 種総数 148 尾が科以上の段階まで分類査定できた。多く出現した稚仔魚はトビウオ類、ヒメジ科、アジ科、ニシン目シラスで

あった。I尾はマカジキ、バショウカジキ、ハタ科である。またイカ数稚仔もみられた。

カジキ類の稚魚が出現したことは、この海域がカジキ類の産卵海域であることを示している。魚卵の丸稚ネット採集物は不明が大部分であったが、エソ科、サヨリトビウオ、フリソデウオ属が査定された。丸稚ネット出現種は8科8種26尾であった。魚種はニシン目シラス、ハダカイワシ科である。いずれも黒潮縁辺域南側であった。

魚種別観測点別出現量(特ネット、稚仔魚、魚卵)

魚種	観測点	SO 1	SO 2	SO 3	SO 4	SO 5	SO 6	計
稚仔魚								
ニシン目シラス		-	-	-	2	1	1	4
オキエソ		-	-	1	-	-	-	1
ハダカイワシ科		-	-	-	3	-	-	3
ハダカエソ科		-	-	-	-	-	1	1
ウナギ目レプト		-	-	-	1	-	-	1
シイラ		-	-	-	-	-	1	1
ワニギス		1	-	-	-	-	1	2
ベラ科		-	-	-	1	-	-	1
チョウチョウウオ亜目		-	1	-	-	-	-	1
ウシノシタ亜目		-	-	1	-	-	-	1
サイウオ属		-	2	-	-	-	-	2
リンコB型		-	-	-	-	-	2	2
イカ類		-	-	-	1	-	-	1
不明稚仔魚		-	-	-	3	2	-	5
合計		1	3	2	11	3	6	26
魚卵								
不明卵		2	1	-	6	2	2	13

B：魚釣島沿岸の磯根資源調査

調査日程

7月16日早朝魚釣島西岸着、母船ぐるくん(143ト、1600PS)は水深17m投錨。直ちに調査機材、キャンプ資材を陸揚する。午後から深夜まで魚類、サンゴ、イセエビ、海藻班に別れ、夫々調査を実施する。沖合に海上保安庁巡視船が漂泊。

17日06:00急流のため母船ぐるくんのアンカーが引きずられる。午前、午後とも各班調査を実施する。イセエビ班は夜間の潜水調査を行う。

18日09:00、19°N、128°Eで熱帯低気圧996mb・・・、16:00熱帯低気圧は21°N、128°Eで990mb、最大風速25mの台風8号となる。

尖閣諸島からはるか南約450km、進路WNWあり、風波は表面は比較的穏やかに見えたが、朝から大きな強いうねりが押し寄せていた。急流を観察。母船ぐるくんの船長判断を優先し、魚釣島現地調査を断念、陸上キャンプ撤去、刺網エビ籠等の漁具を引き揚げた。

底生動物班は、午前中魚釣島南側沿岸のボートにより状況観察するも調査予定地点に接近困難と母船に戻る。

夕刻、出発のためアンカーを巻き上げに入るが、2つの錨がからみ合い、非常事態になる。横井謙典潜水士らの潜水作業により、ようやく抜錨に成功した。直ぐに石垣に向け進路をとる。帰路の船中で山里清先生が、あと半日現地調査は可能ではなかったか、午前中に調査断念したことに強い不満のご様子でフィールドワークをモットーとする海洋学者の一面を見る思いであった。しかし調査団長の西島信昇先生は、船の航行の安全と大勢の調査団の皆さんの安全確保のために、海の経験が深く気象海象に詳しく海の恐ろしさを良く知っている船長の判断に従うのは当然であると毅然とした態度であった。夜間大時化となる。

母船ぐるくんは大きなピッチングとローリングで大揺れであった。

尖閣諸島海域は現在でも、国際政治、領土権紛争の嵐が吹き荒れている。しかし自然の嵐、台風程恐ろしく人間は抵抗のすべもない。避難するしか術はない。琉球大学の磯根資源学術調査団もあきらめ切り上げるしかなかったのである。19日01:00母船ぐるくんは石垣港に到着した。

調査内容

本報告の全文は、尖閣諸島周辺漁場調査報告書(昭和57年3月沖縄県農林水産部 P7~88)に報告されている。①魚類調査班、②サンゴ類調査班、③海藻類調査班、④イセエビ等調査班の夫々について論文としてまとめられている。かなりのボリュームもあり、専門的になるので、詳細を知りたい方は、同報告書を参照下さい。

魚釣島で調査活動していた磯根資源調査団には、沖縄タイムス社、琉球新報社など報道機関から11名が同行し、調査を分かりやすくレポートしてくれているので、ここでは、これらの新聞報道をもとに各班の調査を紹介する。

なお、引用した新聞記事は一覧表にして巻末に掲載しました。

古賀屋敷跡に キャンプ設営

「キャンプは、尖閣の開発者・古賀辰四郎が大正中期まで海鳥ふん、羽毛採取、カツオ漁業をやっていたという、いまや廃墟になった屋敷跡に設営。ガジュマルにおおわれた泉の水は豊富で冷たく、調査団の助けになった。調査団は16日夜明けとともに上陸、午後から底刺し網、エビかご、潜水などにより魚類やイセエビのサンプリング、生息状況の観察をはじめ、藻類やサンゴの生えぐあい、種類などを調査し、多くのサンプルを手に入れた。刺し網にはサメがそのつどかかり、サメの多い海を印象づけた。」(沖縄タイムス・7.20・「資源量は豊富・・・」)



調査団が本部を設営したかつての鯉節工場跡、岩盤を切り開いた船着き場の掘割が見える。(琉球新報 1981.7.25)

尖閣の海 資源豊富

「磯根資源調査は魚釣島の東西南北、4 点にポイントを定めたが、今回は台風接近で東、南の2地点は調査できなかった。しかし、結果は①魚類調査は時速 3 ノットという速い潮流、月夜という条件下ではあったがサメ、メジナなどがかかり、『本島より資源的に豊富』(西島助教授) ②無せき椎動物は造礁サンゴにしぼって調べた結果、水深 10 メートルのところは 60%~80%の海底はサンゴにおおわれ『魚類のすみかとしてはあまり役立っていないが、地形の形成に役立っている』(山里教授) ③藻類は小型、糸状藻類が多く『密度は非常に高い、藻食性動物との関連を調べる必要がある』(香村教授) と報告され、④エビ、カニ類はカゴによる捕獲を試みた結果、5 平方メートルから 10 匹もとれ、高密度である。『小型で成熟が早く、卵を持っているものが 70%を占めていた』—などを明らかにした。」(琉球新報・7.20・「尖閣の海 資源豊富・・・」)



尖閣諸島の近海でエビカゴを船に引き上げ、資源調査をする県の調査団。(琉球新報 1981.7.20)

①、尖閣諸島 磯根漁場の環境特性と漁業資源

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 西島信昇、諸喜田茂充
 沖縄水試八重山支場： 大城信弘、渡辺利明

魚群に驚く まるで養殖場！ 昼夜で一変する魚種

「水深 2 百メートルの等深線にそって黒潮はゆるい曲線を描いて北上し、尖閣周辺の潮目は魚種、魚群の濃密さで知られるところだ。・・実際、あの岩場から見た魚群にはおどろいた。海面を波立たせ押し寄せて来る。同行の広報課カメラマン・伊波さんが『まるで養殖場ではないか』と声をあげた。魚群は海中でも同じであった。調査船『ぐるくん』の専用ダイバー・横井謙典さんは、テンジクイサギやハタ類、ダツ、ハマグロモンガラなどの大群に出会い、作業中、20 数種類の魚種、魚群を観察している。サメも多い。(琉球新報・7.25・「尖閣の海(4) 険しい自然 山中は深い原生林」)



テンジクイサギの群れ。魚釣島の魚群は大形で、イサキのほかにアジなどが多い。調査船「ぐるくん」ダイバー横井謙典氏撮影
 (琉球新報 1981.7.22)

「尖閣のカワハギの魚影たるや、すさまじく濃い・・夕方、船に帰ると、報道関係者のほとんどがわれ先にさおを入れる。心を躍らせて釣り上げればカワハギ、またカワハギといった調子。底には黒い魚の群れが右往左往している。・・太陽が水平線に吸い込まれる時刻から、釣魚の種類は一変し、多様化する。“夜勤部隊”の到来だ。ハンゴミーバイ、イトウダイ、アカナ、ミミジャー(ヒメフエダイ)が主役だ。(沖縄タイムス・7.26・「尖閣の自然(5) 昼夜で一変する魚種」)

草食性のメジナも

豊富な藻類が育む

「魚類グループはさし網を張る。この作業をポイントを変えて 2 日間行った。ベテランぞろいとはいえ流れの速さ、海底の急激な傾斜、荒波の中での作業は重労働であり、危険きわまりない。ましてやサメのウロウロするところだ。作業は 3 日目、台風 8 号の接近で打ち切られたが、16,17 日の両日、風波は強いものの快晴に恵まれてほぼ計画どおりの成果をあげた。(琉球新報・7.22・「尖閣の海(1) 豊かな資源を確認」)



魚釣島の岩場にある唯一の人工水路を利用して活動する調査隊。
 (沖縄タイムス 1981.7.21)

「セットした底刺し網(長さ 27メートル)2枚を朝、引き揚げる。初回はその1枚に、サメ3匹とシチュー2匹、他の1枚にはハリセンボン1匹と4割半程度のクロダイ(チヌとは別物)に似たものが1匹、計7匹。・・・2匹のシチューはメジナの仲間である。・・・メジナは主に草食性。・・・潮間帯の磯に小型の糸状紅藻類が・・・密度100%と豊富であり、香村教授は『資源的にいうと、(藻類は)一次生産者としての働きが大きい』と評価した。それと、草食性のメジナが2匹も網にかかったこととは、符号するようだ。(前掲・「尖閣の自然(5)」)

「魚類グループの西島助教授は『さし網は魚種と分布量を調べたが、サメに網を倒されたりしてうまくいかなかった。月夜だったこともよくない』と報告したが・・・このさし網漁獲調査では、まず①流れが速いため設置する場所が限定される。②サメがウヨウヨして網が倒されたり、破られる。③条件は悪いが、それでもテンジクイサギがよくかかった。資源量は本島海域に比べて比較にならないほど多い、と判断できる。・・・資源量掌握の手がかりはあった、とみていいだろう。」(琉球新報・7.22・「尖閣の海(1) 豊かな資源を確認」)



刺し網に掛ったサメ類。サメが来なければ夜行性の漁獲は増えていたか。(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

②、魚釣島のサンゴ群集

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 山里清、酒井一彦
沖縄水試：島袋新功

潮流速く サンゴ浅場はない 水深2,3以深だと豊富 種類も多い

「尖閣は、台湾の東海岸を北上した黒潮が北東に向きをかえるところであるため・・・潮の流れは海岸に近い、水深20メートル足らずのところでもかなり速い。潜って海底のサンゴなど調べた調査隊は、3ノットぐらいのスピードだという。・・・サンゴ班の調査に参加し、“潜水取材”をした報道関係者の一人は、『ものすごい潮流だ。命綱をはなすと、こわい。大きな魚がキリキリ舞っていた』と真顔でいっていた。サンゴ関係の調査は、『20メートル水深だと流れが速くて無理なので、10メートル段階でやった』と琉大理学部山里清教授はいつている。同教授によると、造礁サンゴの生育状況は水深2～3メートルと、それ以上の深さでは対照的。

浅い所は種類も個体数も少なく、2～3メートル以浅深では豊富で、海底の60%～80%が覆われているが、大きいのは少ない。浅い所でサンゴが小さいのは、生まれ変わりが著しいため、波の荒さを反映して浅場のサンゴは、すべてはいつくばっている。深場では、いくぶん

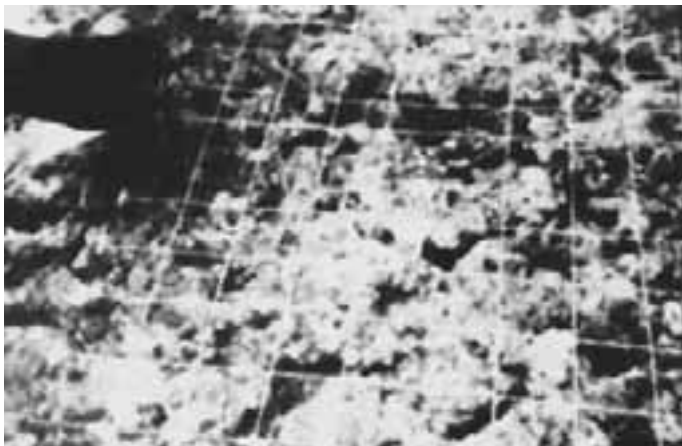
枝状になっているが、魚類の『かくれ場所としては大きな役割をはたしていない』とも述べている。」(沖縄タイムス・7.24・「尖閣の自然 (4) 潮流の速さに驚く」)

海底 60%~80%だと 魚釣島磯根 ほぼサンゴでおおわれる！

「今回の調査地点は、島の東西南北、4点を設定したが西側と北側の2カ所しかできなかった・・・水深10メートルやや岸に寄ったところで造礁サンゴの活発な生育がみられる。個体も大きく数量も多い。方形わくをセットすると60%~80%がサンゴでおおわれ、ほとんど群生状況・・・サンゴ相は青サンゴが多く、与那国の海に似かっている。『ソフトコーラルをたくさんつけているのが普通だが、今回はみられなかった。島全体として同じ状況ではないか』と山里教授は推定した。ところで、方形わくでとらえたサンゴの生育状況が60%~80%というのは魚釣島の磯根がほぼサンゴ礁でおおいつくされている、とみていいかも知れない。山里教授は『魚のすみ家としてよりも、これは地形をつくっていくうえで重要な意味をもっている』と話す。尖閣の強烈な海底に育つサンゴのたくましさは、尖閣そのものかも知れない」(琉球新報・7.23・「尖閣の海 (2) 荒磯とサンゴ 沿岸地形をつくる」)

海底2~3メートルでは
サンゴはない。
水深10メートルほどに
生育が見られる。

(「尖閣諸島周辺漁場調査
報告書」より)



海底に方形わくを
設置して
サンゴの種類と
生育状況を調べる。
(同上)

③、尖閣諸島 魚釣島の海藻類とその生育状況

調査員 琉球大学熱帯海洋学科センター：香村真徳

沖縄水試：当真武 同八重山支場：勝俣 亜生

外リーフのない荒磯 小型藻類

糸状藻類が多い

「魚釣島は外リーフのない荒磯になっているので、干満による潮の移動差があまり目立たない。潮間帯（満潮線と干潮線の間を占める地帯）の幅が狭いわけである。潮がひくと岩場の斜面に赤いじゅうたんのような帯状の藻場が現れた。・・藻類班は、50センチ四方の糸で小さい目をつけた“方形わく”（コードラード）と呼ばれる測定器を岩に当て、海藻の種類ごとの生えぐあい（密度）を記録したり、生育状況を調査している。・・主なねらいは、海藻資源と草食性動物との関係をさぐるうというものである。斜面が赤い色をしているのは、紅藻類がびっしり生えているからである。『波の抵抗が大きいので、小型の藻類が多い。密度はほぼ100%』と香村助教授は説明する。ハテングサが最も豊富に生育し、次にジュズモノなど細かい糸状藻類などが多いといった特徴がみられる。・・潮間帯のスロープの傾斜度は15度～20度、幅は約10メートル。斜面には、波の浸食作用でできた壺状の小さなタイドプール(甌穴)がたくさんあり、月面のクレーターを想起させる。プールには大型の海藻であるホンダワラが2,3カ所で見られたが、量的には少ない感じ。普通、潮干帯の上の方にはアナアオサが顕著にあらわれるが、ここではそのベルト状がない。(沖縄タイムス・7.23・「尖閣の自然(3) 海藻密生 じゅうたん状に」)



波打ち際の岩場で藻類の採集調査、小型で糸状の藻が多い。魚の格好のエサ場である。(琉球新報 1981.7.25)

豊富な藻類 磯資源を育む

人間食用の藻 ない

「人間が利用する藻類、草類は尖閣にはほとんどみられない。これは季節外はずれだったからというだけではないようだ。・・香村さんは『小型、糸状藻が密生している。これが大きな特徴です』と話す。サンプルを60種類、数量にして100近く採集した。『藻食動物との関係を直ちにみたかったが、それは調べられなかった。既存資料と照合して検討したい』という。荒く、その



甌穴で、草食性の動物資源に重要な役割を果たす海藻を調べる調査隊。(沖縄タイムス 1981.7.23)

ために潮間帯がせまく、ベルトの特長はアオサがないこと、ハイテングサ、糸状藻類、石灰藻類の順に多く生育している。香村さんは『藻類が豊富なことが魚釣島の磯資源を豊かにしている』と話していた。」(琉球新報・7.24・「尖閣の海 (3) 豊富な藻類が資源を育む」)

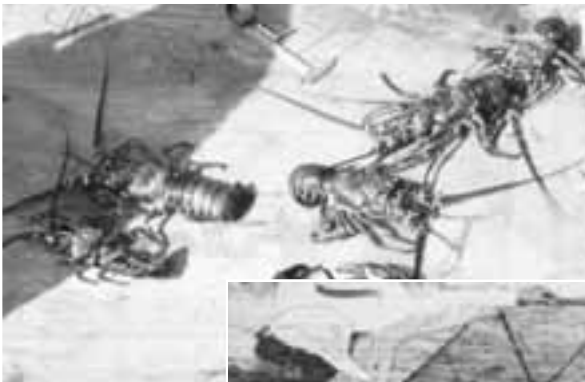
④、尖閣諸島産 シマイセエビの漁業生物学的研究

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 西島信昇、諸喜田茂充

沖縄水試：当真武 同八重山支場：大城信弘、渡辺利明

イセエビ 捕獲カゴは 空振り 期待はずれ

「報道関係者が調査の中で最も関心を寄せた 1 つは、イセエビの捕獲カゴである。エビカゴは全部で 5 個、・・・記者たちが期待を込めて見守るなかを沖合投入のカゴを積んだボートが出ていく。4 個は深さ 10~20 メートルにセットし、残り 1 個はクレーター状の“壺”が点在する例の藻場近くのタイドプールに・・・翌 17 日の午前。沈めた 4 つのカゴは見事空振りで、残るはタイドプールのもので・・・カゴに入っていたのはシマエビの小さいのが 1 尾である。・・・調査隊長の西島助教授は首をかじげ『期待はずれだね。年変動が大きいようだ』。一昨年 5 月の学術調査 (沖縄開発庁尖閣諸島総合調査の意) に参加した経験のある同教授は『前回とは大きな違いがある』といぶかしそうにつぶやく。」(沖縄タイムス・7.27・「尖閣の自然 (6) イセエビは空振り」)



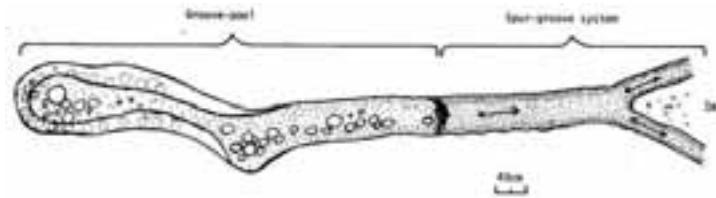
1979 年沖縄開発庁尖閣諸島総合調査の際、イセエビが多数捕獲された。
(白石・荒井 1979)



今回は期待されながらも
成績不振に終わった
エビカゴによる
捕獲調査。
(沖縄タイムス 1981.7.27)

1 坪半に 10 尾確認 エビの好漁場 数量的にも 豊富

「もぐり調査ではわずか5平方メートル、1坪半程度のところに10尾ものイセエビを確認した。採集して調べたら10尾中7尾は卵をかかえていた。小型だが、早熟というのが特徴。しかし、以前の調査ではかなり大型だったこともあって『大型は捕られてしまったのではないか』との声も。『カゴでは期待したようにはいかなかったが、集中的にいる場所があるようだ』と・・数量的にも豊富であることがほぼ確実視され、『その集中する場所がどのような場所かを漁場全体として掌握する必要がある』と述べている。」(琉球新報・7.24・「尖閣の海(3)エビの好漁場」)



シマイセエビの生息していた縁溝プールの平面図



縁溝凹地プール内の外間イセエビ・396 cm立方内の穴に5尾も入っていた。(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

(了)

引用した地元新聞報道記事一覧

経緯と調査結果の報道

1981.2.03・沖縄タイムス・「尖閣に調査団派遣 西銘知事意向 漁業基地の可能性検討」
1981.6.27・沖縄タイムス・「尖閣諸島で漁場調査 来月 11 日から知事先頭に」
1981.7.08・沖縄タイムス・「県 尖閣周辺の資源開発へ 11 日から 50 人の調査団 磯根、漁業中心に 3 年間にわたって実施 知事視察は見送り」
1981.7.08・琉球新報・「尖閣諸島 11 日から漁場調査 外務省 慎重配慮を望む」
1981.7.14・沖縄タイムス・「世評 尖閣諸島の波高し！」
1981.7.20・沖縄タイムス・「資源量は豊富 数々のサンプル採集 イセエビ密魚の疑いも 魚釣島の磯にメス」
1981.7.20・琉球新報・「尖閣の海 資源豊富 県の漁場調査終わる」
1981.7.23・琉球新報・「沖縄の漁業調査非難 中国外務省が『尖閣』で談話」
1981.8.16・琉球新報・「尖閣周辺 魚群分布が薄い 漁場は期待はずれ 県『調査が不十分』来年以降にも再調査」

琉球新報社の掲載同行記 「漁場調査に同行して」①～④

1981.7.22・琉球新報・「①豊かな資源を確認 調査の条件は悪かったが エビ籠設置 急流に調査難行」
1981.7.23・琉球新報・「②荒磯とサンゴ 沿岸地形をつくる 大きくて数量も多い」
1981.7.24・琉球新報・「③エビの好漁場 かご漁はかなり有望 豊富な藻類が資源育くむ」
1981.7.25・琉球新報・「④険しい自然 山中は深い原生林 ツタ、カズラからみつく」
1981.7.25・琉球新報・写真特集「カメラで探る 尖閣の“海の幸”」

沖縄タイムスの掲載同行記 「尖閣の自然 資源調査に同行して」①～⑦

1981.7.20・沖縄タイムス・写真特集「魚釣島の磯にメス」
1981.7.21・沖縄タイムス・「①きつ立する奇岩の島」
1981.7.22・沖縄タイムス・「②ヤギの繁殖に懸念 山火事の跡、右翼のプレハブ小屋」
1981.7.23・沖縄タイムス・「③海藻蜜生 じゅうたん状に・・・種類も豊富」
1981.7.24・沖縄タイムス・「④潮琉の速さに驚く」
1981.7.25・沖縄タイムス・「⑤昼夜で一変する魚種」
1981.7.27・沖縄タイムス・「⑥イセエビは空振り」
1981.7.28・沖縄タイムス・「⑦“油田”絡み 開発多難」

※参考資料

尖閣諸島関係の報告一覧表

尖閣諸島海域において、これまでに水産試験場が調査し、その結果を事業報告書にまとめたものの一覧表である。

- | | ① 報文名 | ② 報告書年度 | ③ 使用船舶 | ④ 調査員 |
|----|---|----------|-----------|--------------------------------------|
| | ⑤ 調査月日 | ⑥ 調査概要 | | |
| 1. | ① 琉球近海共同調査概報 | ② 1958年度 | ③ 俊鷹丸 | |
| | ④ 大鶴典生、城田得位、当真嗣誠、知念正男、金城武雄 | | | ⑤ 3月19日～23日 |
| | ⑥ 尖閣付近の水温測定及び26°45'N、125°18'E付近の底魚一本釣的獲試験 | | | |
| 2. | ① 深海一本釣漁業試験 | ② 1959年度 | ③ 漁業丸(用船) | |
| | ④ 調査人不明 | | | ⑤ 4月11日～17日、4月25日～26日 |
| | ⑥ 黄尾鯛及び魚釣島近海における釣獲試験 | | | |
| 3. | ① 深海一本釣漁業試験 | ② 1960年度 | ③ 八祥丸(用船) | |
| | ④ 当真・豊平 | | | ⑤ 1月17日～1月26日、2月24日～3月7日、3月17日～3月31日 |
| | ⑥ 魚釣島及び赤尾鯛近海における釣獲試験 | | | |
| 4. | ① 第二次一本釣漁場調査 | ② 1962年度 | ③ 図南丸 | |
| | ④ 城田・得位・上地清吉 | | | ⑤ 5月7日～8日 |
| | ⑥ 魚釣島近海での釣獲試験 | | | |
| 5. | ① 近海一本釣漁業試験 | ② 1962年度 | ③ 図南丸 | |
| | ④ 城田・得位・上地清吉・豊平盛光 | | | ⑤ 2月21日～3月2日 |
| | ⑥ 赤尾鯛、魚釣島、南小島近海における釣獲試験 | | | |
| 6. | ① サバ及びタイ魚場調査 | ② 1963年度 | ③ 図南丸 | |
| | ④ 上地・新垣 | | | ⑤ 12月17日～26日 |
| | ⑥ 尖閣周辺海域における浮魚の魚探調査及びはね釣試験並びに魚釣島・南小島、赤尾鯛、近海の本釣試験、その他海洋観測。 | | | |
| 7. | ① 深海一本釣漁場調査 | ② 1963年度 | ③ 図南丸 | |
| | ④ 当真嗣誠 | | | ⑤ 6月20日～22日 |
| | ⑥ 魚釣島及び赤尾鯛近海における釣獲試験 | | | |
| 8. | ① サバ魚場調査及び海洋調査 | ② 1964年度 | ③ 図南丸 | |
| | ④ 城田・当真・新垣 | | | ⑤ 4月7日～16日 |

- ④ 魚釣島西方（農林海区 539）における漁探記録及び一釣獲試験
9. ① 深海一本釣漁場調査 ② 1964 年度 ③ 因南丸
④ 新垣盛敬 ⑤ 8 月 5 日～8 日
⑥ 赤尾嶼近海における釣獲試験
10. ① 深海一本釣漁場調査 ② 1965 年度 ③ 因南丸
④ 上地清吉 ⑤ 12 月 20 日～12 月 23 日
⑥ 魚釣島及び赤尾嶼近海での釣獲試験
11. ① 海洋観測並びに一本釣漁場調査 ② 1966 年度 ③ 因南丸
④ 当真綱誠 ⑤ 6 月 16 日～6 月 30 日
⑥ 久米島～魚釣島の西方の風潮横断観測及び魚釣島西方における一本釣獲試験
12. ① 深海一本釣漁場調査 ② 1967 年度 ③ 因南丸
④ 城田・得位・久具一成 ⑤ 1 月 24 日～2 月 2 日
⑥ 赤尾嶼及び魚釣島近海での釣獲試験
13. ① 一本釣漁場調査 ② 1969 年度 ③ 因南丸
④ 調査員不明 ⑤ 11 月 8 日～12 月 7 日
⑥ 赤尾嶼及び魚釣島近海での釣獲試験
14. ① 尖閣諸島周辺の海洋観測及び漁場調査 ② 1971 年度 ③ 因南丸
④ 兼兵安信・金城武光 ⑤ 3 月 29 日～4 月 10 日
⑥ 魚釣島近海での海洋観測及び一本釣獲試験（琉球大学との共同調査）
15. ① 産魚、浮魚漁場調査 ② 昭和 50 年度 ③ 因南丸
④ 久具一成 ⑤ 8 月 30 日～9 月 9 日
⑥ 赤尾嶼、黄尾嶼、魚釣島近海における一本釣又は産立網又は流し刺網による漁獲試験

なお、本参考資料は、「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より転載しました。

※参考資料

尖閣諸島における安全操業施設の設置要請の経緯

尖閣諸島に緊急避難港を設置せよとの要求は、1978年、尖閣を守る漁民大会で“尖閣諸島に緊急避難施設も早急に設置することが決議された。のちに開催された漁場調整会議の席でも、危険防止として漁船係留ブイ設置してほしい旨が要望された。

尖閣諸島で操業する漁民にとって、これら安全操業施設は不可欠であり、前々から、琉球政府もしくは日本政府に対して設置方を要請していた。参考資料として、新聞資料及び聞き取りからこれまでの経緯と漁民の思いを紹介したい。(編集部)

1、避難港の設置、1950代から漁民の悲願だった

1、1952年4月、琉球大学調査団の団長(高良鉄夫)は、漁業施設の必要性を帰任報告で提言、「同島を基点とする冬期の水産業は世界的価値を有する。即ちカジキ、鰹、フカ、イルカなどの漁獲、日本、台湾から冷凍船が進出している点から見た時冬期の水産は世界的漁場として最も有望で、そのためには同島で給水設備、船溜り場、冬期の無線設備が是非必要である」。(1952.4.29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る」)

2、1957年6月、宮古漁協による「魚釣島への漁港設置に関する請願 1957.6.22」(琉球立法院院)。宮古漁業協同組合代表 天久恵秀他二名、第10回、琉球立法院定例 42号(1957.9.27) 公報(号外)」

3、1968年8月、日本政府沖懇委員(高岡大輔)は、尖閣視察報告で港湾施設等を提言。「・・・魚釣島と南小島に漁港と避難港を兼ねた港湾施設をする必要がある。これは尖閣列島一帯の経済開発には必須の条件である」。(「尖閣列島一帯の視察報告要旨」高岡大輔、1968.8)

4、1969年8月、総理府派遣の尖閣列島海域調査団(東海大学新野弘団長)は「・・・この一帯は揚子江から流れる冷たい水と黒潮がぶつかり合うため・・・良い漁場となっている。去年はカツオやタイが豊富にとれたが、ことしはサバの豊漁である。したがって常時漁場調査を行ない、尖閣列島に漁港をつくれば一大漁場になると思われる。」((1969. 8.30・琉球新報・「尖閣列島調査団の報告書」)

2、1978年の漁民大会、漁場調整会議で、“安全操業施設設置”再浮上。

1972年復帰前後において、地元沖縄側から、日本政府に対して、灯台、無人氣象観測施設、安全操業施設の設置要請がなされたが、復帰準備のどさくさでウヤムヤとなっていた。

中国武装漁船の領海侵犯事件を契機に、また政府へ設置要請がなされた。

1978.4.13・琉球新報・「“尖閣列島付近は領海”中国大船団、字幕掲げ強行採決 巡視船の命令無視 半数は機銃で武装」

1978.4.18・琉球新報・「“避難港の設置を” 野島副知事 国への要請に上京」

1978.4.19・琉球新報・「尖閣諸島に漁業施設建設へ 県、近く調査開始 当面緊急避難港を検討 水揚げ量の拡大図る」・建設場所選定、潮流、気象条件等調査を始めたい。
1978.4.21・沖縄タイムス・「領海侵犯に怒り爆発 漁民大会 漁民の死活問題 “計り知れない経済、精神的損失” 漁場確保強く訴える 尖閣諸島 きょう代表団を派遣」 ・漁民大会で“尖閣諸島に緊急避難施設も早急に設置すること！”決議される。
1978.4.21・沖縄タイムス・「避難港築港に難色 尖閣諸島 海洋条件悪く困難 政府事務レベル」・園田外相の外交上の立場から避難港早期建設の反対表明に対して、恩田水産庁次長も、尖閣諸島は海洋条件が非常に悪く、築港工事は、予想以上に困難と思われ、各方面からの徹底した事前調査が必要で、その結果をみて態度を決めるとしている。
1978.4.21・八重山毎日・「尖閣の避難港修復へ 安部長官が実効支配で」・新たな避難港建設は戦略的に考えなければならないが、尖閣諸島には戦前沖縄県人が住み、避難港(掘割の意)があった。県側の申し入れもあり、これを修復したいと言明。
1978.4.25・沖縄タイムス・「尖閣諸島に施設を建設 各省庁 県議会折衝団に回答」・時期的問題はあがるが、施設(避難港、ヘリポート等)を設けるべき点で一致した意見である。
1978.4.27・八重山毎日・「尖閣諸島に避難港を 県漁連が政府に申し入れる」・安倍長官は沖縄県からの要請があれば、前向きに設置に取り組むことを明らかにした。
1978.4.29・沖縄タイムス・「尖閣避難港建設得策でない 外相が否定的見解」・我が国は尖閣諸島を有効に支配しており、こちらから火種をつけるようなことは得策でない。外相答弁は安部長官との姿勢の食い違いを浮き彫りにしていると報じている。
1978.11.25・沖縄県農林水産部漁場利用調整対策会議の席で「伊良部漁協から避難港が無理であれば、ぜひ係留ブイを設置してほしい」旨の要望が出る。

3、1979年沖縄開発庁、基礎調査を実施 技術的観点から 設置無理と発表

1979年5月末、沖縄開発庁は、尖閣諸島蔵合調査(学術及利用開発可能性調査)を実施。避難港、漁船避難用係留ブイについて設置建設の基礎調査を行った。

1979.5.23・琉球新報・「今月末に調査団派遣 尖閣諸島、学者らを中心に 地質、気象などに主眼 沖縄開発庁 西銘知事 避難港建設が妥当」
1979.5.28・沖縄タイムス・「尖閣諸島 本格調査開始 機材など陸揚げ さっそくテント設営」
1979.5.30・沖縄タイムス・「尖閣 いっせいに本調査 標本採集・ボーリングなど」
1979.6.01・沖縄タイムス・「尖閣の学術調査 日程短縮 三原長官が指示 日中関係を配慮」
1979.6.02・琉球新報・「揺れる尖閣調査団 一現地に同行して 終始政治がらみ 日程短縮 学者、連日 調査に大忙し」
1979.6.07・沖縄タイムス・「成果あげた『尖閣学術調査』 標本千点持ち帰る 池原教授ら けさ石垣に到着」
1979.12.18・沖縄タイムス・「尖閣諸島 避難港設置は無理 小渕総務長官、調査結果を発表」



魚釣島西避難港(漁港)候補地 南北小島間避難港(漁港)及び漁船避難用係留浮標設置水域
(沖縄開発庁「尖閣諸島利用開発可能性調査編」1979年(昭和50)年10月)より

「・・・地元が強く求めていた避難港(漁港)の建設は、沖縄開発庁の基礎調査で殆んど不可能に近いことが判明した。しかし灯台、ヘリポート、無人観測施設などについては気象条件が良ければ機動力を動員して設置できるとしている。・・・台風や台湾坊主などの異常気象で漁船が避難できる避難港や漁船避難用係留浮標の建設・設置が必要だが、同諸島は、遠浅の水域がなく、しかも十二～十七㍎の高波に達するため、避難港建設は技術的にみて不可能に近い。また、漁船避難用係留浮標についても強い風波の影響で、漁船や乗組員に危険をおよぼすので設置は適当でない、と結論を出した」(1979.12.18・沖縄タイムス・「尖閣諸島 避難港設置は無理」)、このようなことから、設置は見送られた。

4、漁民の思い、今なお強し、大規模でなく、すぐにできる小さな船着場を

2010年、避難港について、漁協に聞き取りした。今なお設置の要望は強い。

「避難港を作る場合は是非とも漁業者の意見を聞いてほしい。大きい港を作るとなると多分相当時間がかかるし、建設できるかもどうかもわからない。与那国漁港の避難港、あれ位の規模でもいいと思う。私たちの使えるサイズでいいから早く作ってほしい」(与那国漁協・中島組合長) / 「先島からの出漁では日帰り操業できない為、悪天候に備える為にも」(宮古島漁協・小禄組合長) / 「天気が悪いとき避難港があれば助かる。尖閣ではアンカーを沖の方に下ろしていても、潮の流れが早くなると船が流されて座礁してしまう、それで船を沈めた事故が過去に何度もあって、伊良部町時代に、避難港の要請を決議した」(伊良部漁協・友利組合長) / 「避難港ができれば最高、小さな船でも行けるようになる。昔は3トンの船でも行っていたから」(池間漁協・濱川組合長) / 「避難港があれば本当に助かる。夜に着いて休んで、早朝から操業できるし、急に天気が荒れたらすぐ避難できる。小型船でも行けるようになる」(与那国漁協・中島組合長)。

(「尖閣研究 尖閣諸島の自然・開発利用の歴史と情報に関する調査報告平成22年度」より)